
フィスト

蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フィスト

【Nコード】
N5344F

【作者名】
蜻蛉

【あらすじ】
僕が正気に戻ると、目の前には二体の死体が転がっていた。その日から、僕の日常は狂っていく。僕を聖人君子のように扱う御奥さん。学校で筋金入りの不良、阿形くん。そして僕の姉ちゃん。様々な人物を巻き込んでいくダークサイドミステリー。ここに開幕。
不定期更新。第20話更新予定↓大変遅れます。更新については作者の活動報告を参照いただけるとありがたいです。

0、情動の始まり（前書き）

15 禁指定ですが、場合によっては17 禁になるかもしれないです。グロは基本的にないつもりです。微妙な性的描写、残酷描写、宗教等の思想に関する話題を含みますので、苦手な方はご注意ください。

追記

ある程度物語が進んだ後、「0、情動の始まり」と「1、日常的邂逅」の二話は書き直し予定です。内容は変わりませんが、文章表現等が変わる可能性があるのをご了承ください。

0、情動の始まり

爆発しそうな狂気の中に身を潜めていたら、急に口が寂しくなった。八重歯が疼いてカタカタと音を立てているようにも思える。思いつきり歯軋りをしたけれど、疼きは一向に静まらなかった。何か砕き甲斐のあるものを噛まなければならない。僕はそう思って、辺りを見回した。

脳みそがドクドクと脈打っているせいで、視界が定まらない。眼球が血走っているのか、見えている空間がひび割れてしまったのかすら今の僕には分からなかった。真っ赤に染まったのか、真っ黒になっってしまったのかも分からない。破滅した視界の中で、僕は情動を治められるものを探す。

とにかく手を伸ばしてみたら、質感のあるものに辿り着いた。柔らかかったのか硬かったのか、良く分からないうちに僕はそれを口に運んだ。歯を立てると、それが大きく、そして噛み応えのあるものだとは分かった。味は分からなかった。でも、これを食べれば僕は落ち着ける気がした。

「――！！」

音にならない音が鼓膜を突き破る勢いで響いた。音波が衝撃となって僕の行動を必死に食い止めようとしている。邪魔だと思って掻きまわってやったら、すぐに音は黙った。僕はそのことに安堵すると、再び咀嚼を始めた。

ガリゴリ。グチャグチャ。

時折歯の奥に当たる感触が気持ち良い。身体のツボを押されているような快感がある。味覚は機能していなかったが、美味だ、と思った。

自分に何が起きてて、何故そうなったのかの理由も忘れて咀嚼、そして嚥下を続ける。これは食事ではない。快楽だ。自身を保つための儀式と称しても良い。僕は病みつきになりそうな感覚にあらぬ

妄念を抱き始めていたのかもしれない。僕はいつからか、ナイフとフォークを使うのを忘れ、こん棒で肉を叩き貪る原人のごとく何かを口に運んでいた。

——そうして僕が落ち着いたとき、目の前には二体の死体が並んでいた。

「え……？」

我に帰った。途端に掴めない状況に困惑した。思考の坩堝に嵌り、三半規管が渦を巻き始めた。声が出ず、言葉を発しようとした唇だけが無意味に動く。吐き捨てられた吐息から漏れたのは、微かな血の香り。鼻腔に内側からせせり上がる臭いに、噎せ返る。

「おえ——」

酸味を含んだ唾液が口中に広がる。

一体僕は何をしていたのか。想像しようとする、僕自身が無意識下でそれを阻止しようとする。そのせいで、余計に頭が混乱していく。

記憶の整理を行う。分裂した脳の記録の欠片が、ガチャガチャと音を立ててピースを揃えていく。その度に小さな光景を作り出す記憶のパズルに、言いようのない不安と恐怖を感じていった。

「う、うああああ!!」

絶叫した。中途半端に伸びた爪で、容赦なく頭を掻き毟った。眼球が酷く乾いているようで痛い。この衝動に身を任せて、抉り取っても良いとも思えるくらいに、今は煩わしい痛み。でも、僅かに残った弱さという理性が、瞳の直前まで迫った爪を食い止める。もはや僕という人間が、僕の中での位置を無くしているかのような、乖離し剥奪された肉体の中で、僕はひたすらに困惑した。

ジレンマだ。僕は一体どちらに転べばより良い所へ辿り着けるのだろうか。赤黒く泥沼に嵌っていくような恐怖と、底の見えない深淵を覗き込むような不安。そのどちらにも痛みは付きまとう。もう、

どうしようもないんじゃないんだろうか。

「亮太！！」

そう諦観しようとした時、名前を呼ぶ声がした。悲痛に歪んで、僕の中を走るどの痛みよりも痛々しく感じた。

「落ち着いて。お願いだから」

背中に温度を感じる。僕は抱きしめられていた。後ろから回された手が僕を包んでいる。しかし、その回された手を、僕はどうしようもなく噛みたい衝動に駆られる。狂った動物のように力チ力チと歯を鳴らして、それを必死に抑えた。

「亮太？」

「ねえ、ちゃん」

やつのことで搾り出した言葉で、実の姉を呼んだ。僕をいつも包んでくれていたねえちゃんの温もり。忘れるわけがなかった。小さい頃からねえちゃんは僕にとってはお女神様だった。背中に後光を携えて僕を跪かせる。ねえちゃんはそのなこと少しも望んではいなかっただろうけれど、僕はそうでもしなければ、彼女の前に立てない気がしていた。

「口の中が、寂しいんだ」

「そう。ならこれを」

ねえちゃんは僕の口内に容赦なく指を突っ込んできた。付け爪が歯茎を傷つけ、血の味が広がった。

「噛んじゃ駄目よ。気が済むまで舐めていていいから」

言われたとおりはその指に舌を這わせた。強烈に、千切れてしまいうくらいに強く吸った。そうしていれば、ねえちゃんの力を得ることが出来る。僕は味覚から感じる淫靡なものにむしろぶりつく。一人の卑しい乞食になったように、我武者羅に求めることだけを続ける。

「落ち着いて話して。一体何があったのか」

囁きかけられる。聴覚までもがねえちゃんに犯され、僕は服従するしかなくなった。名残惜しかったが、指から口を離し、言った。

「分からない。僕にも何が起きていたのか、分からない」

「分からないことは無いでしょう。亮太は現に……」

ねえちゃんは言葉を濁した。きっと後ろを向いたら、つらそうな顔があるのだろうと思って、表情は確かめなかった。

「分からないんだ。僕が気付いたときには、こうなっていた」

「いつ気付いたの」

「分からない」

「何よそれ。分からないことだらけじゃないの」

少し怒った様子。僕は焦燥感に駆られたが、記憶のパズルは未完成のままで止まっている。もう誰も作ろうとはしなくなり、そこから事実を探り出すのは不可能に思えた。

「何があつたのか、記憶にないんだ……」

「……そう」

ねえちゃんが静かに締めくくった。もう追求はしてこない。僕も静かにねえちゃんの胸に抱かれていた気持ちが強かったために、気付かれないように安堵をした。

床に転がる二体の死体を見る。死後何時間とか、そういうことは良く分からなかったが、未だに止まらない流血が、それが最近のことなのだと物語っている。一人は男で一人は女だろう。髪の毛と、着ている服装からそんな気がした。エプロンを着た死体は包丁を胸に刺して横たわっている。絶命していた。顔は見えない。もう一人の男のほうも、向こう側に顔を向けて死んでいる。頭以外に傷はついていなかったが、頭部は破壊されて砕け散っている。男の横にバットが転がっている。これが凶器だろうとすぐに分かった。僕が小さい頃にはまっていた野球に使ったものだ。今は血みどろになって、僕の一ページを塗りつぶしてしまっていた。

「バット、洗わないといけないね。亮太の大切なものののに、あんなのじゃ可哀想」

「うん……」

姉ちゃんはバットを拾うと、微笑んで部屋を後にした。風呂場で

洗うつもりなのだろう。僕はその去り際の後姿が目には焼きついた。長い黒髪を靡かせて、化粧つ気のない、少し疲労で痩せこけた顔を歪にして、笑う姿を。

僕はそんな姉ちゃんの顔を思い出して、一人狂気の中に身を埋めながら興奮していた。

1、日常的邂逅(1)

翌日、起床すると、朝の日差しがまどろんでいた僕を容赦なく照り付けていた。瞼を上げると、真つ白な天井が浮かび上がる。かなり質素な部屋に身を置いているとは自覚している。僕の部屋にはベッドと勉強机を除いてほとんどのものがなかった。クローゼットもタンスもない。おかげか掃除が幾分かやり易く、部屋は埃一つないとても清掃の行き届いた清潔な状態で保たれている。未だに新築特有の家の臭いがしなくもなかった。

ベッドから身を起こすと、肌寒い冬の空気が襲った。唇と頬が乾いてカサカサになってしまっている。僕はそれらに唾を軽くつける。と、部屋にたった二つの家具のうちの一つ、勉強机に向かった。高校で配られたプリントが横に積まれている。僕の通う高校は普遍的で、特別良くも悪くもない。立地条件が良くて、たまたま偏差値も届いていたから通っているだけの学校。行きたいと思う理由は無かったが、行きたくない理由も無かった。机の横にかけてあった学校指定の鞆を取り、中身を見た。そこには何も入っていない。教科書どころか、筆記用具すら入っていない。空虚な空間だけが広がっていて、無気力な僕に加速をかけるようだった。

そのまま鞆を持って、部屋を出る。季節も冬に差し掛かったので、二回の廊下はかなり肌寒い。そのまま隣の部屋に向かう。

「姉ちゃん、起きてる?」

扉の前に立って、軽くノックしながら言った。

「起きてるわ。何か用?」

「学校の制服を取りたいんだけど」

「そう。ちょっと待ちなさい」

僕のクローゼットは姉ちゃんの部屋にある。両親には伝わっていない。姉ちゃんはそっちのほうがいいと言っていたし、僕も特に何も言わなかった。

「はいこれ」

綺麗に折りたたまれた制服が手渡される。そこからは、むっとする女性の臭いがした。少なくとも、クリーニングに出した後や、僕の部屋に置いていて匂う香りじゃない。でも僕はこの香りが好きだった。頭がぴりぴりするようで、一時の幸福に浸れる。それを胸に抱きかかえ、香りを満喫した。

「ボタン、解れていたから直しておいたわ」

「あ、本当に？　ありがとう姉ちゃん」

「気をつけなさいよ。まだ買って少ししか経ってないんだから」
「分かってるよ」

いつもより臭いが強い気がしたのは、そのせいなのかかもしれない。姉ちゃんは身支度を整え終わっている。モノトーン彩色のセーターを着て、すらつとした足を強調したジーンパンを穿いている。長い黒髪を後ろでまとめて上げている。高めの身長によく似合っていると思う。黒い翼でも生えていれば、僕は墮天使と見間違えてしまうかもしれない。姉ちゃんが腰を折り曲げて、身長の高い僕の視線に合わせてきた。漆黒の瞳が、生気を失ったように見える。それはきつと僕の幻想で、彼女の眼力に射抜かれたからだ。

「昨日のことなんだけど……」

「うん」

「その、大丈夫？」

力強かった瞳が揺れたように感じた。真っ黒で一点の曇りもなかったものが、歪んでその暗闇の形を浮き彫りにしてしまった気がした。

「大丈夫だよ」

僕は根拠もなくそう言った。そう言わない理由もなかった。

「ならいいんだけど。何か胸の中が潰れそうになるような感じがしたらすぐにあたしに言いなさい」

「分かってるよ」

「必ずよ」

僕にまた一つ、杭が打たれた。戒めとは違う。僕が僕であるようにするために、姉ちゃんが打ち込む太い杭。約束とは違う。そうなるように定める僕の中のルールだ。

「亮太のことだから心配ないと思うけれど、学校では普通にしていなさいよ」

「分かっているよ。おどおどしたり、疑心暗鬼にならないようにしろってことでしょ」

「ええ。あくまでもあたしたちは普通を装わなければならないわ。そのことだけ、心にとどめておいて頂戴」

「うん。それより早く朝ごはんを食べようよ。僕、お腹が減った」
「そうね」

姉ちゃんは頷くと、階段を降りて行った。僕は廊下に出たまま制服に着替え始める。ふと、視界の端に異質なものを捉えた。姉ちゃんの正面の部屋の扉がガムテープで隙間なく埋められている。まるで陰陽師がお札を貼っているように見える。すると、あの部屋には悪霊やその類が封印されていることになる。あそこには悪いものが住んでいる。そう思うと、背筋に悪寒が走った。夜道が恐くて走り出す小心者のように、素早く着替えを済ませて階段を降りた。

リビングに行くと、姉ちゃんが既に朝食を用意していた。食パンが一枚に、オレンジジュースが食卓に並んでいる。僕も姉ちゃんも小食なので、これで十分だった。僕は中央に設置された食卓に着く。鞆を隣の椅子に置いて、腰を下ろした。

席に着くと、姉ちゃんはさっそくといった様子でマーガリンを塗る。

「ねえ亮太。学校はどう？」

「どうって、何？」

「友達とかいるの。もうすぐ入学して一年経つけど、亮太って家に友達呼んだことないじゃない」

「それは、たまたまだよ」

「ふうん……」

姉ちゃんは興味を失ったのか、食事に意識を戻した。もしかしたら無理矢理にでも話題を作ってくれたのかもしれない。僕は少しだけ申し訳ない気持ちになった。

「排他的になつてはダメよ」

突然姉ちゃんがそう言った。視線は依然として食パンに向いたままで。

「どういうこと？」

「あたしには亮太がいる。亮太にはあたしがいる。あたしはそれだけでも十分なんだけれど、きっと亮太はダメだわ」

「意味が分からないよ」

「テレビとかで良く言うじゃない。『人』っていう漢字は、人と人が支えあつて生きていることを表しているって。でもね、文字通りに捉えちゃダメなのよ。あの漢字の通りじゃ、たった二人よ。本当の意味は人々が、つていうことなのに」

「でも僕は、それでも生きていけるよきっと」

「無理ね。その状態に入り込んでいつて、いつか『人』は『入』になつちゃう。文字通りに、ね」

「入？」

意味が掴み取れず、眉間に皺を寄せて聞いた。

「バランスが取れないのよ。どちらかが、どちらかの重荷になつてしまうことは分かりきっている。『込』も危険よ。重荷を背負つたまま、人生を歩んでいく、みたいなことになっちゃう」

「そんなもの、ただのこじつけだよ……。それを言うなら姉ちゃんの言つた友達だつてそうじゃないか。『友』っていう漢字の成り立ちは、人の手と手を取り合う様子だけど、姉ちゃんの言い分が通るなら、これもたつた二人の間での出来事だ」

「……そうね」

僕がそういうと、姉ちゃんは俯いて黙り込んだ。表情には何も映っていない。単純に、僕が理解してくれないことを悟つて、話すことを止めたようだった。

僕自身もすっかり姉ちゃんの話に興味を無くしていた。どうでもいいことなんだ。結局は、僕たちが幸せに暮らしていれば良いんだ。重荷がどうだとかという話は、そうなってからすればいい。そう思うと、姉ちゃんの話はますます馬鹿らしく思えてきた。同時に、背徳的な恐怖も感じた。本当に自分自身でそんなことを決定付けていいのかと、僕が問いかけてくる。僕はそれを首振って打ち消した。

「時間大丈夫？」

言われて僕は家の時計を見る。今日は早めに目覚めたせいか、まだ時間に余裕があった。

「大丈夫だよ。まだ少しある」

「そう……」

とにかく話題が続かない。明らかに重圧を持った空気が流れている。それはそうだ、昨日、あんなことがあったんだから。

昨晚の出来事は、フィルタリングがかかったように記憶に薄い。最後に見た死体以外の何もかもが記憶にない。ガムテープで雁字搦めにされ、封印されてしまったのは僕のほうかもしれない。こうして姉ちゃんと普通に話が出来るのもほとんどそのせいと言って良かった。対して姉ちゃんのほうは、今朝の態度から明らかな疲労困憊を隠しきれしていない。相槌を打って話題を終わらしてしまうのは、そういう時によくあることだったからだ。

こういう時、僕は行動を基本的に自粛する。姉ちゃんに何も求めたりしない。彼女には触れていい時間と、触れてはいけない時間がある。それはきちんとしたローテーションは無いけれど、僕には分かっている。女神様にだって、休息の時間が必要なんだ。

「今日はゆっくり休んだらどう？　なんだか疲れて見えるよ」

僕の労いに驚いたのか、姉ちゃんはついに食パンから視線を外した。

「馬鹿を言いなさい。普通に過ごすって言ったでしょう。それは亮太だけじゃないわ。あたしも大学に出て、講義を受けるわ」

「でも、倒れたりしたらどうするのさ」

「人間ってというのはそんなにやわに出来ていないの。人は動物の中で何よりも壊れ易いけど、その分頑丈なのよ。ダイヤモンドが硬い代わりに傷つきやすいのと一緒によ」

「だから意味が分からないよ」

「分からなくてもいいわ。とりあえず普通にするの。だからこっちに来なさい」

僕は訳が分からなかったが、言われた通りに姉ちゃんの傍による。期待した。淫靡な妄想を繰り広げた。口付けを交わす僕と姉ちゃん。炎のように迫り、求めようとする舌。意識が蹂躪され、脳髓までしゃぶり尽くされる。求めて、求められて、僕らは口内で互いを激しく犯しあう。そんなふてぶてしい想像をし、僕はそうして幸福感を得る。神への冒瀆とも感じられる。そんな高揚感が僕にはあった。

実際の姉ちゃんは僕のネクタイをいじり、「ほら、曲がっているわよ」と優しくに直してくれるだけだった。

「今日の姉ちゃんは、何かおかしい」

僕には視線を向けず、既に直っているネクタイをいじり続けている。

「何もおかしくなんかないわ」

「さっきの人の漢字の話みたいなの、僕にしたことないじゃないか」

「そういう気分だったの」

「姉ちゃんは僕のこと……」

「もういいわね、亮太」

ドンッ、と胸を押される。親が子の背中を押すのとは明らかに違う、拒絶の塊。姉ちゃんはテーブルに向き直り、ジュースを手に取り、ちびちびと飲み始める。

僕の中に何かが生まれた。それを理解する前に、僕は忘れた。

時計を見る。まだ数分とも経っていなかったが、僕はこの場に居辛さを覚えて、言った。

「行ってくるよ」

「いつてらっしゃい」

どこにでもある家庭の挨拶を済ませて、僕は家を出た。

2、日常的邂逅（2）

通っている高校は自宅から約十五分の距離にある。開発が進んでいるとはいいがたい都市部に位置しているので中途半端にコンビニや雑貨店が並んでいる。登校時間には走行する車の量も多い。クラスメイトの話では、車体のサイドミラーに肩が接触することなどは結構あるらしい。道路の幅を取っても中途半端ということだ。

登校中、コンビニで時間ギリギリまでたむろしている人を良く見かける。老若男女問わずだ。学校の生徒も何人かいるようだ。雑踏に紛れ込んで普段はよく見えないものも、こうして注目してみればなんとも滑稽なものだと思う。こういう場においては、誰しも平等で、共存出来るんだから。

通りの曲がり角に差し掛かると、違う学校の制服を見かけられるようになる。この角を境にして二つの高校がこの地区には存在している。一つは僕の通うとても普通な公立高校。もう一つは荒くれ者みたいな人たちが集まる、所謂『バカ高』と呼ばれる私立高校。治安が悪いという噂はあまり聞いたことがないが、風貌が風貌だった。金髪に染めている人は八割をこえているだろうし、ピアスなんかはそれが常識みたいに扱われている。僕のところでもそういう人種がいなわけじゃあないが、それが群がっている場所には何としても入りたくはない。わざわざ種族の違う群れの中に身を投じる必要もないだろうし。

その中、軍勢に身を隠している少女がいた。少女と呼んで違和感無い容姿。中学生と比べても変わらない身長だが、彼女はれっきとした高校生だ。その制服はバカ高のもので、似つかわしくない。まだ吹き出物を体験したことがないんじゃないかと思うくらい荒れの見つからない肌は、遠目に見ても瑞々しさが分かる。でも、彼女がかけている黒ぶちのセンスのない眼鏡がすべてを殺してしまっているように思う。僕は、古参の駄菓子屋の軒下で、直立不動で何かを睨

んでいるような彼女の横まで来た。

「御奥さん。^{みおく}おはよう」

僕が声をかけると、視線だけ僕に寄越して体制は変えずに彼女は言う。

「今日はやけに早い登校ね、亮太くん」

「姉ちゃんの機嫌を損ねちゃってね。居づらくなつて早めに出てきたんだ」

「珍しいね。いつもはそういう時でも傍にいてあげそうなのが亮太くんなのに」

そう言つて御奥さんは微笑む。

御奥さんはたまに、僕を聖人君子のように扱う時がある。僕はそんなとき、身体の中がむず痒くて仕方がない。僕なんてものが、そういう扱いを受けることに抵抗がある。ちつぽけな存在のくせに、でしゃばつてはいけない。でも彼女は、そんなことを考える僕を持ち上げる。それがあまりに不愉快で心地良い。だから僕は彼女の話に付き合つし、普通に話していられる。

「今日もおはよう。亮太くん」

「それはさつき僕が言つたよ」

「そうだったかな」

「そうだよ」

朝の時間。門が閉まる時間ギリギリまで僕は御奥さんと談義の花を咲かせることになっている。学校の違う僕らは、こういう時間を利用しなければあまり会話に時間を裂けなかつたからだ。

とは言え、僕と御奥さんの出会いは衝撃的でもなんでもない。御奥さんはどうだか知らないけれど、僕にとっては気付けばそこにいたと言つても過言ではないかもしれない。言つてしまえば、出会いのことは記憶にない。それほど小さなことだったんだろうと思う。そんな彼女とこういう状況に陥っていることは、今考えれば不思議で仕方がない。

「それに……僕は、そんなに良い人じゃないよ」

「うっん。亮太くんは良い人だよ。少なくとも私にとっては」

「どんなところが良い人なのさ」

「お姉さんを大切にするとところとか」

可愛らしく笑って御奥さんは言うが、僕は笑えなかった。その言葉は、神に信仰心を持つ熱狂信者に対して『あなたの良いところは、神を信仰している点だ』と言っているのと同じだ。それは侮蔑に値するし、僕の姉ちゃんに対する気持ちを軽く見られた気分になる。

当然だろうという言葉を飲み込んで、なんとか苦笑いに成功する。「友達の話を聞く限りじゃ、亮太くんみたいな姉弟はなかなかいないみたいだよ」

「そうなのかい？」

「普通の兄弟姉妹っていうのは、思春期とかでよくすれ違っただよ」
「なぜ？」

そう聞かれたことが以外だったのか、御奥さんは一瞬だけ目を見開いた。

「なぜって、そうだなあ、身体の発達とか、フラストレーションみたいなものじゃないかな。あと反抗期とか」

「僕は姉ちゃんの身体の発達に疑問を持ったことはないし、そういう環境で不満を溜めたこともないし、反抗期もなかったよ」

「それは普通じゃないね」

そうだね。普通じゃない。

御奥さんは、「でも……」と続ける。

「カイン・コンプレックスって知ってる？」

僕は聞き覚えのない言葉に首をかしげて答えを返した。コンプレックスという言葉はよく聞く言葉だが、カインとはなんだろうか。

「旧約聖書の話をもとにした精神分析学の一つなんだけどね、兄弟姉妹間での問題のことを言うのよ」

「へえ。僕にはまったく縁のない話だね」

「そう言い切ってしまうのも凄いきれどさ。でも確か、亮太くんの両親ってさ……」

「よく出張に出かけているね。今月も丸々いないよ」

僕の両親は仕事で忙しいとかで、ほとんど家にいない。丸々二月もないことなんてさらに、稀に両親の顔を忘れてしまうんじゃないかと思ったこともある。だから僕は普段、姉ちゃんと二人暮らし、という名目になっている。そのことにおいて、両親に帰ってきて欲しいと思ったことは一度もない。あの家はもう、僕と姉ちゃんのサンクチュアリだと言ってもいいんだ。

「そういうことじゃなくて……」

御奥さんは言葉を探しているように、視線を斜め上に彷徨わせた。亮太くんの両親って、結構、厳しかったんでしょ？」
凄く申し訳無さそうに、上目遣いで僕に聞く。触れてはいけない事情だと思っているのだろう。その態度はとても正しい。

「ああ、そうだったらいいね。実際、勉強についてはかなりだった。寝る間も惜しむって感じだったし、ご飯を抜かれたことも何度かあった気がするよ」

「不良生徒だったの？」

「そんなわけではないか。僕はそれなりには出来ていた。でも、親はそれなりじゃあ許してくれなかったただだよ」

「それってかなりだよ……」

「そうなのかな」

「多分。私も一概にそれが異常だって言えるほど、物事を知ってるわけじゃないけど」

僕の記憶の限りでは、親はドメスティックバイオレンスに値するレベルのスパルタ教育者だったらしい。近所の人が、そう噂していたのを聞いたことがある。でも、小さい頃はそれが当然だと思っていたし、仕事が忙しくなってから家は家にいないことが多かったので印象には強くはなかった。

「それで、お姉さんは凄いい頭のいい人で、自分なんかどうやっても追いつけなかったって、前に言ってたよね」

御奥さんが同意を求めるように言う。

「そうだったわけ。まあ、実際に追いつけなかったしね」

姉ちゃんとはにかく出来の良い人だった。僕はいつだって彼女の背中を見て、生きてきた気がするくらいに。

「つまりは、そういう環境で育っていると普通、姉に対して嫉妬心とか競争心とか湧くものなの。その結果が良かろうが悪かろうがね」
「それが、カイン・コンプレックス？」

「そう。兄弟で神への貢物を持ってきたんだけど、弟のほうしか受け取ってくれなくて、兄が怒って弟を殺害してしまったっていう悲しい話だね」

僕は自分がそういう状況に置かれた場合を考えてみた。もしも姉ちゃんの貢物だけが受け入れられた場合、僕は嫉妬に狂うのだろうか。ありえなかった。むしろ逆に、僕のだけが受け入れられた場合のほうがよくて怖い。悲しみ、嫉妬に狂った姉ちゃんの姿なんて見たくはなかったし、ありえてもいけなかった。

「御奥さんは、僕がそのカイン・コンプレックスに陥っていないとおかしいって、そう言うのかい？」

「おかしいってわけじゃないよ。ただ、そういう家庭環境で育ったにしては、亮太くんはシスコンだなあって思っただけ」

「僕はシスコンじゃないよ」

腹から響くような声で言う。その様子に驚いたのか、御奥さんはか細い声を上げて俯いてしまう。そんな風になるなら、言わなければいいのに、と思った。

「ごめん……。亮太くんがそういう風に言われるの嫌いだって知ってるのに」

「いいよ。君らから見たら僕がそう見えるのは、ある意味では必然といってもいいかもしれないんだから。ただ、僕の中ではそういう位置づけされるのが嫌なんだ。気をつけてくれ」

「うん……」

日の光を浴びれなくなった花のように萎む御奥さん。陰日向に咲く僕にとっては、彼女の落ち込み具合は理解出来ない。当然、慰め

るような言葉も思い浮かんでこなかった。

街の喧騒が強くなった。僕らが黙り込んだからだ。手持ち無沙汰になって駄菓子屋を覗いた。昔懐かしいといった雰囲気の商品が所狭しと並べられている。こんなに人通りの多い道に面しているのに、中に客は一人もいなかった。気の優しそうなおばあさんが一人、会計のところに座って度の強そうな眼鏡越しに新聞を読んでいる。模型のようだと思った。僕はこの場所が、到底現世に存在しているとはどうしても思えない。誰かが作って、ここに置いたんじゃないかと、そう錯覚する。でも、腰掛けにしている冷蔵庫は実際に僕の尻にじわじわと痛みを与えている。踵で蹴ってみると、鈍い音がした。「な、何？」

怒っているのと勘違いしたのか、酷く怯えたように僕を振り返った。

「いや、ぶつけちゃっただけだよ」

「そう……何かと思ってびっくりしちゃった」

どうしてだろうか。今日はやけに脳みそが冷えてしまっている気がする。照れてバツの悪そうな顔で笑う御奥さんが、とても無機物なものに感じた。色のない世界があるのだとしたら、それは僕の目が色を捉えられなくなっただけの話、そんな感じがした。

そんなとき、僕はふと思った。

「……どうして神様は弟のほうだけ受け入れて、兄はダメだったんだろうか」

「え？ あ、そうだね。色々説はあるらしいんだけど……」

その時、遠くの空で学校のチャイムが鳴る音がした。予鈴だ。朝のホームルームまで残り数分を知らせる合図に、御奥さんは「あちやあ」と頭を抱えた。

「また今度にしようか。私は遅れても大丈夫なところだけど、亮太くんは困るでしょう？」

僕は話の続きが気になって仕方がなかったが、姉ちゃんの言葉思い出して思ってもいないのに肯定した。

3、日常的邂逅(3)

御奥さんは僕らのサンクチュアリに一番近い場所にいる。それがなぜだかは分からないけれど、彼女の魅力、というやつなのだろう。サンクチュアリの訪問者なのか、それとも侵略者なのか。彼女はまだ深い森の中に身を隠して、僕らの様子を探っているだけだ。僕らはそれに気付かず、自分たちの情報をぼろぼろと落としていく。それをまるで目印のように拾って行って、御奥さんは僕に近づいてきた。

そうして僕に近づく人物は、御奥さんだけではない。僕は自身が排他的であるとは思っていないけれど、決して社交性のある人間だとも思っていない。人と話すのが苦手なのだ。彼ら彼女らが話す内容に、僕はどう返答していいのか分からなくなる。そんな様だから、僕には友達は少なかった。

僕は教室の隅で本を読みながら、黒板の正面の席で群れを成す男子学生の一団を見た。制服の着こなし方から髪の毛先の遊ばしかたまで不良としか言いようのない人たちの集団だ。僕にはそれが、眩しくて仕方がない。彼らは自分たちのことをアンダーグラウンドだとか、夜の街に生きるものだとか、そういうことを思っているらしいのだが、僕からしたら日の光を浴びて輝く海みたいに見える。彼らの世界は広い。そして汚さもない。小汚い本をいつも脇に抱えて教室で独りで過ごす僕とは、大小の差が激しかった。

そんな中、一際柄の悪そうな男子生徒が僕の視線に気付いて、群れの中を抜け出してきた。腰につけたチェーン類がジャラジャラと音を立てているけれど、教室の喧騒に掻き消されていた。

「ようリョータ。今日もクソみてえなツラしてんな」

害悪としか取れない挨拶を、僕の目の前で口にした。

「おはよう。阿形くんも、よく飽きずに御山の大將を続けているね」
「楽だからな大將は」

「猿みたいなものの上でもかい？」

「関係ねえな。俺には人徳と実力と、輝かしい過去とかがあんだよ」
そう言つて口元を吊り上げて笑う。阿形亮介は、不良一味の中で

あがたりのうすけ

も特別強く光っている男だ。雰囲気も、見た目もだ。彼こそが僕の
数少ない友人の一人であり、御奥さんと同じように僕に近づいてき
た人物の一人だ。彼が僕に声をかけたきっかけは、亮介と亮太とい
う名前が似ているから、面白そうだった、とのことだった。その程
度のこと、僕はよく話すようになった。

「輝かしい過去か。例えばどんなのがあるの？」

「ヤクをやつてた」

「嘘だろう、それ？」

「よくわかつたな。大嘘だ。どうしてわかつた」

「阿形くんは煙草を吸わないから」

「ヤクは注射でやるもんだぜ？」

「阿形くんは注射器も苦手だから」

「ご名答だな。まったくもってム力つくぜ」

言つて、僕の机に容赦なく腰掛ける。運動部でもないのに、やけ
に分厚い拳が置かれる。本人曰く、『鉄拳の阿形』と呼ばれた時期
があつたらしい。異名に違わぬ威圧感は確かにあつたが、到底信じ
られる話でもなかった。

ふと教室の前を見ると、何人かの不良生徒が僕らを見ていた。彼
らからしたら、完全なアウトローに位置している僕と、自分たちの
大将が会話している姿が気に食わないのだろう。統率感なんてまっ
たく感じられない御山だった。

「彼らのところに行かなくていいのかい？」

僕は顎で教室の前を指して言う。

「別にいいさ。あいつらとはいつだつてだべれる。お前はこつやつ
て生きている間でしか喋れない気がするからな」

「随分と不吉なことを言うね。まるで僕がもうすぐ死ぬみたいじゃ
ないか」

「馬鹿を言うんじゃないやねえよ。お前はすぐ死ぬ。そうだ、それこそ有名人とか、天才がすぐに死んじまうようなものと同じ感じで死ぬ」

拳が揺るがない。顔を上げると、阿形くんは般若の形相で僕を見つめていた。それこそ、自分で僕を殺しにかからんとするように。

「面白いよな人の命つてのは。くだらねえやつほど長く生きて、すげえやつほどすぐに死ぬもんだ。一体どうしてだと思つよ。超真面目君のリョータに是非とも意見を伺いたいもんだ」

僕はありそうでない頭で少し考えて、言う。

「脳の造りが、少し変だから、とかじゃないかな？」

「かつ。超模範的な回答ありがとうございましたと。まあ、ちょっと聞けや」

阿形くんは人差し指を僕に向けると、得意げに語りだす。

「俺が思うに、世界にはバランスがある」

「バランス？」

「そうだ。国の経済市場が需要と供給で構成されているように、世界にはバカと天才でバランスが保たれてるんだ」

「それはまた、突拍子もないくらい突出した考え方だ」

「俺は難しいことは嫌いだ、こればかりはそうとしか考えられねえんだ。もしも世界が天才だらけで、エジソンとかゴッホとか、そんなんばつかで、地球上に新たな技術が一年毎くらいに開発されていったらどう思つよ？」

「いいんじゃないのかな。発展は悪いことじゃないだろう？」

「いいや。俺は世界が滅ぶと思うね。天才が、地球を作り変えちゃうんだ。そうしてどこかの天才が何かの拍子でミスった時、世界が滅ぶんだ」

「そこまでいくのかな？」

「行くぜ。確実に。だからこそ、何も考えねえ、何もやろうとしねえバカが必要なんだ。それも、天才と割合を比べて圧倒的に多いくらいにな」

「だとしたら、僕は間違いなくバカのほうに内包されるね。惰性で

生きているような人間だし、友達少ないし」

言っと、阿形くんは苦笑いする。

「卑屈になんなよ。あと言わせてもらえば、お前は立派に天才だ」

「どの辺が？ 僕よりも、今みたいな話をした阿形くんのほうがよっぽど立派で、天才に見えるよ？」

「そういうことじゃねえよ。俺はきつと長く生きて、お前は早めに死ぬだろうって話だ」

おかしいことを言う人だと思う。阿形くんの言うことは、いつも理論的なように見えて、どこか感覚的だ。阿形くんは拳の中で親指だけを立てて、首の前でその指を横切らせる。『デッド』という意味だ。僕は首を落とされて死ぬらしい。

「お前と俺が話せるのは、きつとこのバランスのおかげだ。でなきゃ、お前みたいなヘタレでクズみたいなやつと係わり合いになろうなんて思うわけがねえ」

「言うね……」

「遠慮はしねえ性質なんだ」

かははっ、と豪快に笑い飛ばした。

僕は、阿形くんのこういう性格が嫌いじゃない。御奥さんのような扱いと比べれば、これほど楽なことはないだろう。方や僕を聖人君子として扱い、方や僕を路上のゴミクズみたく辛辣な言葉をかける。そのくせ後者は、僕のことを天才だと言い張った。

以前、阿形くんは言ったことがある。思わぬ収入が入るのは幸運だし、泥棒に入られるのも幸運だ、と。後者は普通、不運と呼ばれるものだろう。でも阿形くんは「どちらもなかなかないことだ」と言って、無理矢理幸運とした。生と死が隣り合わせであるように、幸運と不運も隣りあわせだと。そして僕は今、ナントカと天才は紙一重だという言葉思い出して、阿形くんの言うことに納得に至った。彼の性格は底なし沼のようで、どれだけ掻き出してもなくなりそうにない。太陽が燃え尽きるのがまだまだ先だと言われているように、彼の俗物としての輝きも失せることはないだろうと思った。

「ところでリョータ、先月のテストの結果はどうだった？」

今までの話を家に忘れてきました、と言わんばかりの話題の転換だった。僕は言われて、先月のテストの結果を伝えた。

「なんだよ。相変わらず生真面目くんのくせに、テストはつまらねえ結果だな」

「こういうことに努力はしない主義なんだ」

「そういうところが天才なんじゃねえのか？」

「でも、僕はきつと阿形くんに体育の成績じゃ勝てないし、喧嘩だつてボコボコだ」

「俺にとつちや天才なんてものは雑魚なんだよ。だからその辺は気にするな」

シャドーボクシングするように、固めた拳を空中に繰り出す阿形くん。シュツ、シュツと風を切る良い音がする。彼の目の前には、何か敵がいるのだろうか。それを必死に殴り倒してきて、拳を厚くしてきたのだろうか。右ストレートを放つ。ピンと伸ばされた肘の先には、誰もいなかった。

「思うに……」

阿形くんがガードのポーズを取りながら、こちらを向く。

「きつと阿形くんは、天才だと思うよ」

「どういうことだ？」

勝手に言葉が出てくるようだった。僕も阿形くんの熱弁に毒されたのか、いつの間にか本を閉じて、彼の一語一句に耳を傾けていたようだ。

彼の姿は綺麗だ。容姿も良く、思いつきもあつて、頼りがいもある。世の中の女性が放っておかないだろうと思う。彼は悪い人じゃないからそんな彼女らをぞんざいに扱わないだろう。彼の胸の中で眠れたら、どれだけ安心できるだろうか。強者の懷の中は、それはもう想像するだけでも温かいだろう。

けれども僕は、あえて阿形くんの言葉を借りることにした。

「君みたいなキャラクターは、大抵物語の序盤で死ぬものだよ」

阿形くんはそのままの態勢で時が止まったように固まった。

「だから俺は早く死ぬし、だからこそ俺は天才だと？」

「そうだね」

阿形くんは拳を解いて、僕に向き直る。身体の奥で、恐怖が疼いているのを感じた。脇の辺りに冷たい汗が伝う。無意識のうちに頬に力を込める。

「力むなよ。別に今、お前を殴ったってどうにもならない」

阿形くんはその後、「まあ……」と続ける。

「いつかは、殴るかもしれないけどな」

手の平を乾いた音を立てて殴り、阿形くんは拳を下ろした。彼が僕を殴らなかったことに、異様な威圧感を感じた。頬に痛みがない。そのことには違和感しか感じなかった。

阿形くんは直ぐに友人に呼ばれて、別れの挨拶もせずに僕の席から離れていく。御山に戻っていく。中に入ると途端に彼の表情に笑みが追加される。僕はそれを見て、阿形くんは間違いなくバカの部類だな、と思った。

授業開始のチャイムが教室に響く。洗練された軍隊のようにクラスメイトは自身の席に戻っていく。人の密度が下がったせいか、少しだけ教室の中が空虚になった気がした。扉が開いて教師が入室する。今年四十にもなるうかというベテラン教師だが、評判は良くない。それも、優等生の部類にだ。聞いていて眠くなるような授業が特技で、内容も雑談中心だ。好きな人は好きなんだろうなと思う僕は、きつと優等生側だ。

教科書の代わりに本を開く。タイトルも著者も知らない本だし、見てもいない。何故なら本を読んでもいないからだ。僕は活字の海に溺れることが好きだった。読まなくてもいい。眼前に広大な字の世界が広がっていればいい。この四方十センチ弱の媒体に、一メートルを越える僕らは吸い込まれ、溺れていく。まるで異次元感覚だ。呼吸を行う世界から離脱し、無呼吸の世界へ。瞼も開けられなければ、身体の内自由もなかなか利かない。でも、その世界に身を委ねて

いることが気持ち良い。僕は次第にトランス状態に入っていく。

まず考えたのは姉ちゃんのことだった。白い裸体を夢想する。首筋から肩の流線を描く。乳房の丸みを再現する。腰の括れを削ぎだす。尻を柔らかさを体感する。足をそつと撫で上げる。そうして僕の姉ちゃんが体現し、目の前に姿を現す。

「あたしを愛しなさい」

一糸纏わぬ姿の姉ちゃんが、僕にそう言う。言葉の甘美な響きに、僕の脳内は痺れに歓喜の声を上げる。

これはアガペーだ。そんなものを与えられて、喜ばない人がいるわけがない。言葉は『愛しなさい』という強制の願いだ。そうして与えられる愛。まるで海に温度が生まれる感覚。緩やかな流れと共に、僕は抱擁される。

浸る。産湯の中に身を沈めているようだ。僕の身体が清められていく。

姉ちゃんが僕の前に、自身の親指を差し出した。僕はそれを口に含み、舌でなぞり、しゃぶる。恐いくらいの安心感に包まれる。恐ろしくくらいの幸福感が僕を満たす。それは僕らにとって、人が愛し合う好意と等しい。口内を蹂躪される感覚は、女性のそれに良く似ているかもしれない。

しばらくそうしていると、唐突に後頭部を棒で殴られたような衝撃が走る。視界が反転する。走馬灯というよりは高速で流れるダイジェストのように場面が移り変わり、僕の前には日常的な教室の光景が広がった。頭を擦ってみたが、殴られた後はないし、教師は黒板の前、隣の席の女の子は机に突っ伏して寝息を立てていた。

変性意識状態から僕は帰ってきた。心臓がばくばくと今にも破裂しそうなほど脈動している。微かに額に汗も浮かべていた。制服の袖でそれを拭って、一度深呼吸をする。河で溺れかけたことがあったが、その時の状態に良く似ている。僕は本気で何かに溺れていたようだった。

「おい日田^{ひだ}。大丈夫か？」

教師が生徒を心配する声が聞こえた。一瞬僕のことかと思ったが、そもそも僕の苗字は日田じゃないことに気付いた。日田と呼ばれた生徒のほうを見てみると、真っ青な顔で気だるそうにしていた。明らかに熱があるか、吐き気を催しているかのどちらかだ。

「保健委員、日田を保健室に連れて行ってやってくれ」

クラスの保健委員会に属している女の子が「分かりました」と言っ
て立ち上がった。その表情は今にもため息を漏らしそうな感じだ。
「さて、授業に戻るぞう」

腑抜けた声で教師はそう言い、また下らない雑談を始めた。

僕は本を閉じて、なるべく隣の女の子と同じ態勢になるようにして、机に突っ伏した。

4、日常的邂逅（4）

そもそも、何故御奥という女の子が僕の横にいるのか。そのことにまず疑問を持つべきだったのかもしれない。僕は女性という存在に興味はあろうとも、そも御奥という存在には対して興味を抱いていない。阿形くんは学校で唯一話をしてくれる点、僕にとってはあつていい存在だけれど、御奥さんが何故ここにいるのかは到底理解出来そうに無い。

学校の帰り道、いつもの曲がり角に沿ってある駄菓子屋の前で、僕らは再会した。下校する生徒が僕らの目の前を通り過ぎて行くが、誰一人ともこの駄菓子屋の前で足を止める人はいない。僕らはいつもの通りに冷蔵庫に腰掛けて、他愛もない話をしている。

「コロンブスの卵とは、どういう意味で使われているでしょう、って今日聞かれたの。そしたら私、どう答えたと思う？」

「天才とか、発想の豊かな人の子ども、みたいな意味に捉えた？」

「ううん、違うよ。私はそもそもコロンブスの卵が故事だったってことを知らなかったですって答えた」

「なんだと思ってたの？」

「コロンブスっていうドラゴンが産んだ卵」

言って御奥さんは笑うが、僕はあまりに飛躍した考えに追いついていけなかった。コロンブスが人間であることすら前提として崩されている。今朝、カイン・コンプレックスなんて難しい言葉を語った人には思えない。

そういえば、と僕は今朝の話を思い出した。

「今朝のカイン・コンプレックスの話なんだけど……」

「ああ、そういえば途中で終わっちゃったんだっけ」

「どうして、神様は弟のほうだけを選んだのかって話」

「そうだね。でもちよっと難しい話だから、どこか落ち着いたところで話さない？」

「いいよ。どこがいい？」

「えっとねえ、私、亮太くんの家に行ってみたいんだけど、いいかな？」

断じて良くない。僕の中で重い門が粉塵を巻き上げて閉じる。それだけはあつてはならないと、防衛線が機能する。御奥さんは僕を惑わそうとしているに違いない。長いまつげも、僕を見上げる視線も、綺麗な肌も、全部嘘だ。

「それは、ちよつとまずいかな」

「どうして？」

ニヤリ、と口元がつりあがっている気がした。まるで道化だ。僕がダメな理由を知つてあえて聞いてくる。何もかもを理解していながら、遊戯の時間を楽しむ。魔性だ。

「その……姉ちゃんがいるかもしれないし」

「お姉さんは大学生なんでしょう？　ならまだ帰つてこないよ。それに私もそんなに長居はしないつもりだよ。お話が終わったら直ぐに帰るから」

確かに姉ちゃんは大学で、今日は遅くなる日だ。恐らくは午後八時を回らないと帰つてこないだろう。

僕はそれでいいのかと、自問自答した。

「ねっ、行こう。実は私、亮太くんの家がどこにあるか知ってるんだ。ほらほら」

御奥さんは僕の手を握つてを引つ張り、無理矢理歩かせる。僕は自問の答えが出ないまま、駄菓子屋の軒の下から身を出した。待つて、と声をかけようにも御奥さんの足取りは軽く、僕はどんどん引きずられていってしまう。道行く人が何事かと僕らを見ている。僕は顔が熱くなるのを感じた。同世代の女の子の手を引かれている様子は、実に頼りがいのない姿に見えるだろう。そういう意味の羞恥も、もちろんあつた。

反して御奥さんは我が道こそが正しいと言わんばかりに人ごみを掻き分けて僕を引っ張っていく。ふと、彼女は僕のような目立たな

いタイプの人間と関っていて、果たして楽しいのだろうかと疑問に思った。

ちょうど目の前の交差点で信号が赤になり、流石の御奥さんも足を止める。表情を垣間見ると、実に不快そうに眉をひそめていた。「こつこつこの嫌だよね。楽しみにしていたピクニックが雨天中止したような気分になる」

「せめて延期くらいじゃないかな。信号だし」

「でも、こうしている間に亮太くんが虎視眈々と逃げるタイミングを窺っていたらどうするの？」

「僕にそんなつもりは……」

逃げようとは思っていなかったが、彼女を家に上げる気もない。どこか良いタイミングで切り出して、帰ってもらうつもりだ。

「亮太くんにそういうつもりがなくても、私が心配なの」

何が彼女をそこまで駆り立てるのはわからないが、強くそう言い放つ彼女に従っておくことにした。掴まれた右手に入る握力が、離すまいとして僕を捕らえている。まるで駄々をこねる娘に振り回される父親の気分だ。そう思えば、この状況も微笑ましい。

中央交差点は人通りが多い。空は高速道路で覆われていて見えな。交差点に面しているのは合計八車線。いつか理化学の教科書で見た、血流の流れを思い出した。白血球、赤血球などが血管の中を流れている光景に似ている。恐らくどちらも同じように、どこかに異常が生じたら全体が乱れるのだろう。

信号待ちが長い。車両天国と歩行者天国が入れ替わりになって作動している信号は、次の青まで結構な時間があった。僕らの周りにも、いつの間にも様々な服装をした人たちが集まっていた。

「御奥さんは、どうして僕と話をしているの？」

「えっ？」

言葉が悪かったのか、首を少しだけ前に乗り出してきた。

「えっと、なんで僕みたいな人に興味を持ったのかなあ、と」

「凄い今更な質問だね」

「いやそうなんだけれどさ。よくよく考えてみたら、御奥さんみたいな元気があつて、皆に人気がありそうなタイプの人が僕とこうして話していることが、なんだかおかしく思えてきてさ」

「私と亮太くんがお話しちゃいけないの？」

「そういうわけじゃないよ。ただ、どうしてだろうなつて、単純に」

御奥さんは天を仰いで、「うーん」と漏らす。顎から首にかけての線がくつきりと目に写った。僕は唐突にそれに触れたくなつて、止めた。信号はまだ赤のままだ。

「そう。コロンブスよ」

「……えつと、御奥さんは時々だけど、本当に理解に苦しむ会話をするよね」

本当にバカ高に通っている生徒なのか怪しく思えてくる。そうして制服を見ると、やはり御奥さんがバカ高の生徒だと嫌でも認識させられる。実は僕は馬鹿で、裸の王様ではないが、馬鹿には違うように見えている仕様なんじゃないかと思い、すぐに下らなくなった。「そんなことないよ。つまりはね、新発見、ってことなの」

「僕が？」

「だね。授業で習ったけど、コロンブスの卵って本当は『誰でも出来ることを、最初にやるのは難しい』っていうらしいじゃない？」

「そうだね。逸話としては、アメリカ発見を妬んだ人たちに『卵を机に立ててみてください』といって誰も出来なくて、あとでコロンブスが卵の先を少しだけ割って立てたんだ。一見して誰でも出来そうだけれど、それを最初に行うのは難しい、っていう話だった」

そもそもの発想の基本を作るといふのは、尋常じゃない発想力が必要になるのだろう。天才というのは、そもそもそういう観念の元に偉業を成してきたのかもしれない。空を飛べないと思っていたら、ライト兄弟は飛行機を作らなかつた。電信でしていた連絡を言葉で出来ると思わなければ、ベルは電話を発明しなかつた。

「つまり私はね、普段話しかけられないんだろなあつて思う人に、初めて声をかけたの」

自信満々に言うが、結構に棘がある言葉だった。

「一体どういう動機があったの、そこには」

「ある種のひらめきじゃない？」

「そうだね、ごもつともだろうね」

「違う。赤い糸だよこれは！」

僕の方を振り向いて、拳でガッツポーズを作って言う。僕は嘆息を漏らして言った。

「知的な会話をしていたと思えば、ずいぶんとかけ離れたね」

御奥さんは高揚しているのか、物凄い剣幕で捲くし立てる。

「そう。思えばあの曲がり角、駄菓子屋の前で亮太くんを見たときに思ったの。あ、この人とはきつと楽しいことが出来そうだな、有意義な時間が過ごせそうだなって。そうだよ、きつと白馬の王子様が日本に来たらこんな感じなんだ。初めてみた日本の光景に戸惑っていて、誰から見ても迷子の外国人にしか見えないの。でも私はコロンブスだから、声をかけた。これって凄いことじゃない？」

なんだか物凄いアプローチを受けている気分になる。周りのことなんてまったく眼中に入っていないようだ。後ろにいる背広姿のサラリーマンが訝しげな目でこちらを見ている。僕は目の前すぐまで迫った御奥さんのくりくりとした丸い目よりも、そちらのほうが気になって赤面した。

「そ、そうだね。僕もそう思うよ」

「絶対思っていないでしょ」

思考を読まれた気がして、さらに恥ずかしくなった。

「ほら、信号青になったよ」

僕は歩行者信号を指差して言う。

「上手くはぐらかしたとか思っていない？」

「まさか。早くしないと姉ちゃんが帰ってくるけど、それでもいいなら」

「そうだったね」

言って、御奥さんは再び僕の腕を掴んで駆け出す。歩くという選

折肢はどうやら彼女にはないらしい。僕は上手く場を回避できたことに安堵の息をつきながら、内心ではこれからのことを考えて憂鬱に浸っていた。

■ ■ ■

帰宅すると、家の鍵はかかっていた。一度も車体が入っているとこを見たことがない車庫の中に、姉ちゃんの自転車はない。やはりまだ大学にいるようだ。

一戸建ての家は、ほとんど二人暮らしである僕にはかなり広いものだ。使っているスペースは一人暮らしのアパートとほとんど変わらないはずなのだが、外観をこうして見直してみると、僕がいかに広い場所で過ごしていたかが分かる。

制服のポケットからキーホルダーの一つもついていない地味な鍵を取り出して、扉の鍵穴に入れ、右に回す。カチツと音がして、施錠が解除された。そこで僕は制止した。本当に彼女を家に入れてしまつて良いのかとの、再三の自問自答。

「何しているの？ 早く入ろうよ」

立ち止まっているせいもあってか、御奥さんは身体を震わせている。冬の昼下がりは特に冷える。眼鏡のかかっている耳が、真っ赤になっていることに今頃気付いた。

「……その眼鏡」

「えっ？」

「前々から思っていたんだけど、眼鏡、外したほうが良いんじゃないかな」

御奥さんは黒ぶちの眼鏡をくいつと上に上げて、「うーん」と唸った。

「結構色々な人から言われるよそれ。でもね、私視力が0.1を切

つてるから」

「そんなに悪いんだ？」

「きつと、眼鏡を外したらここから亮太くんの顔が分らないくらい」

僕と御奥さんの距離は、歩数にして一步あるかないか。あまりにも想像しがたい視界に、頭を悩ませる余裕すら与えられなさそうだ。そしてあまりに似合わない、と言つては失礼かもしれないけれど、似合っていると言ひ難い眼鏡姿に、やはり僕は提案を押したくなる。

「どうしてそんなに視力が悪くなったのさ？」

「マンガとかゲームとか？」

「なんで僕に聞くのさ……」

「嘘嘘。まあ、大体は本と、あとはネットかな」

少し内容が良くなっただけで、媒体という意味では大して差のない内容だった。しかし、バカ高に通っている御奥さんが本とネット、恐らくネットといつてもぐだぐだと時間を潰すネットサーフィンではなく、調べ物の類だろうと思う、によつて、視力を悪くしたというのは考え難い話だ。そこまで知識欲がありながら、どうして成績が取れないのか、僕が疑問に思つて仕方がなかった。

「というかそんなことはどうでもいいから、早く中に入ろうよ。寒い寒い」

凍えた手で、僕が握っている扉のノブを上から包み込むようにして掴んでくる。僕も長時間外で話すには、鼻や耳が悲鳴を上げているように感じた。

無理矢理御奥さんを帰すことは諦め、姉ちゃんが帰ってくるであろう時間を頭の中で計算しながらドアノブを回し、彼女をご招待した。

玄関には当然靴は一足も置かれていない。下駄箱には、不在の父親の靴が何足か入っているが、これも日の目を見たためしがない。母親のものは、どういふわけか全て処分された。姉ちゃんが言うに

は「必要がないから」らしい。靴の数も少ないので、玄関には消臭剤は置かれていない。傘立てにビニール傘が二つある程度の、質素な玄関だ。

靴を脱いでいよいよ廊下に足を踏み出すと、フローリングのひんやりとした感覚が足の裏を襲う。後ろで御奥さんも小さく不満を漏らしていた。僕はそれに気にせず、先導してリビングに向かう。

「眼鏡が、曇っちゃう……」

「……」

リビングに到着すると、テレビの前に置かれたソファーに無造作に鞆を投げた。制服は脱がない。何といっても寒気が身に染みる。テーブルの上にあった暖房のスイッチを手に取り、強で入れる。カバか何かの吐息のように聞こえる音を立てて、暖房が回り始めた。

僕はリビングを見回して、今朝のことを思い出した。姉ちゃんは、このテーブルで、この椅子に座って僕に話をした。唐突に、「排他的になってはいけない」と僕に言った。意味は分からない。でも今、僕は排他的ではないのだろう。これが、姉ちゃんの望んだ状況なのか。そうとは考え難かった。ここは、僕と姉ちゃんの場所に違いはないはずなのだ。

「ねえ、茶葉と、急須と、ポットって借りられないかな？」

御奥さんが、暖房をつけたことを境にして上着を脱ぎ、椅子にかけながら言う。

「え、何をするつもりなの？」

「この三つで何をするのか分からないの？」

「あ、いや、うん、そうだね」

茶を入れたいということだろう。僕はその三つの場所を教え、ついでに僕も温かいものを飲みたかったので、自分で食器棚から湯飲みを二つ出した。

「……」

そのうち一つを戻し、新しくもう一つを出した。来客用に買ってたのかは知らないが、まだ未使用の湯飲みだ。二つをテーブル

に置くと、御奥さんも用意が出来たのか指定のものを持ってくる。

「正しいお茶の入れ方って、知ってる？」

「え？ いや、よく分からないけど」

テレビとかで、急須を温めるだとか、茶葉は何グラムだとかという話は小耳に挟む程度には聞いたことがあるが、その程度だった。

「知らないの？ どうしよう」

「どうしようって何さ？」

「私も知らない」

真顔でそう言う。僕は話の展開が読めず、混乱しつつ聞いた。

「じゃあどうして茶を入れようなんて思ったのさ」

「入れようなんて考えてないよ私は。聡明な亮太くんなら、美味しいお茶が作れるのかなあと思って」

「それは、とんだ勘違いじゃないのかな？」

一体何処の誰が噂をすれば、僕がお茶を入れるのが上手いなんてことになるのか。

「なら、私が入れるしかないよね」

「いや、別に僕が入れても良いけれど」

有無を言わせず、御奥さんは勝手に急須に茶葉をサッと適当分量で入れ、ポットでお湯を注ぎ、「はい完成」と言って僕の湯飲みに注いできた。その流れ作業はある意味目を見張るものがあり、日本の和の心なんてものは微塵も感じられなかった。

緑茶の独特の渋みのある香りが漂う。御奥さんの分も注ぎ終えたことを確認すると、僕は一度それを啜った。濃くも薄くもない。ただのお茶だった。

「なんか意気込んだ割りには、凄く普通だね」

「お茶の正しい入れ方、なんてのは、所詮は美味しくするだけだと思わない？」

「そこに意味があるのと違うのかな……」

「正しいことなんてのは、結局正しさの理に適っているだけで、それ以上の意味なんてなさそうじゃない。お茶なんて、文化的なもの

を除けば誰も正しきなんて重要視しないよ」

「それは、世の中の茶道やっている人に失礼じゃないかな」

「でもそんなものじゃないかな？ 勉強することだって、正当性があるだけで、それ以上に意味を求めたりはしないよ」

「ああ。だから君はバカ高なんかに通っているんだね」

「ご名答」

胸を張って言うが、自慢することでもない。御奥さんは湯飲みで冷えた手を温め始める。

「勉強は嫌いじゃないんだけどね。どうにも、興味の無いものに興味は持てないし、頭に入れようとする気も出ないんだよね私」

「分からないでもないけれど、それを我慢してやるのが学生の本分じゃないのかな」

「それが出来ないのが私んだけどね」

俯いて自嘲するような笑みを浮かべる御奥さん。僕はそれに酷く居づらさを覚えた。ただ、学校の勉強が出来ないだけなのに、酷く惨めに見えた。

「天は二物を与えず、って言うじゃない」

「そう、だね」

僕が頷くと、御奥さんは眼鏡を外して湯飲みを口元で傾けた。初めて見た裸眼に、僕の視線は釘付けになった。きらきらとしている瞳に、長い睫毛。しかしどこか憂鬱な雰囲気纏った黒目が、虚ろに湯飲みの中を覗きこんでいる。夜空に雲がかかっているようだった。眼鏡が外れたせいで顔立ちが浮き彫りになる。僕は直視できなくなつて、視線を自分の湯飲みに逸らした。緑色の液体が波打っていた。

「……そっちのほうがいいよやっぱ」

「うん？ ああ、眼鏡のこと。そんなに言うならコンタクトにしてもいいかなあ」

「それか、もっとオシャレな眼鏡でもかけたらいいよ」

「私には似合わないよそういうのは。地味だし」

「地味、なのかな」

「地味だよ。私、教室では空気みたいだし」

黒ぶちの眼鏡をかけて、バカ高に通っていればそういうこともあるのだろうか。目の前で嬉々として話す御奥さんを見て、まるで空気のように扱われている教室での彼女を想像するのは容易じゃない。「君が空気なら、僕は窒素だね」

「何それ」

裸眼の御奥さんが笑って僕を見た。笑った声が聞こえたから僕も顔を上げたが、すぐに俯く羽目になった。

「空気と呼ばれるものの中でも多くの割合を占めるはずの窒素だけれど、その存在感は数パーセントしかない二酸化炭素や、もちろん酸素よりもない。そんな感じ」

「まあ、亮太くんはなんだかそんな感じがする」

「否定しないんだ？」

「嘘はつかないよ、私」

阿形くんといい、御奥さんといい、僕には遠慮がないらしい。

ずずずつ、とお茶をすすする音がする。「さて」と、御奥さんが一

息ついて、言った。

「本題に入ろうか」

5、日常的邂逅(5)

「神様に捧げる供物と言えば何を思い浮かべる？」

御奥さんは湯飲みをテーブルの上に置き、僕を貫き通すような鋭い視線で僕にそう聞いてきた。

「えっと……人、かな」

僕が想像したのは多くの神だ。人が神から恩恵を授かるなら、神への奉公は人の身を差し出すこと。でも、御奥さんは渋い顔をして首を横に振った。

「それは供物じゃなくて生贄でしょう」

「ああ、言われてみれば」

「まあでも、あながち間違いでもないかもね。神への供物と言えば、人。それはつまり人肉のことだよな」

「魂、という説もありそうだけど」

「なら仮に魂としてもいいよ。実は、カインとアベルは神に捧げたものが違ったのよ」

「それは？」

「カインは農耕の類を。アベルは酪農の類を捧げたと言われてるんだ」

兄は畑を耕し、弟は牛を育てていたというわけだ。実に普通の農家と酪農家である。

「一つ目の説は、神は酪農のほうに偏った神で、そちらを選んだという説」

「それは随分と理不尽だね」

「理不尽。そう言っても差し支えないね。でも実際、この話の神は、宗教学で言うところのヤハウェ。つまりは世界想像の神であり、日本語に訳して『主』とされている人物なの。だからこの説はあんまり強くない」

万能であり、隣人愛を説いた神が差別など許されるわけがない。

そんなことをしたら無責任だし、傍若無人だ。

「でも……仮に、って話で出した魂のことだけど、そうしたら神は野菜とか、穀物とかには、ある種の魂が宿っていないと考えたのかな？ 良く言うじゃないか、一粒の米にも百姓の魂とかなんとか」

「うーん……。そもそもこの時代の人たちは、羊や牛を捧げるのが常識とされてたみたいだから、そういうことなんじゃないのかな」

「神の作った常識に反していた、ってこと？」

「そうなのかなあ。こういうところが良く分からないから、私もあんまりこの説は重要視してないんだけどね」

バツが悪そうに頬を書いて、御奥さんが言う。僕もそれ以上は追及しなかった。

御奥さんが一つ咳をして、話を続ける。

「神のほうに問題があるわけがないと仮定すれば、問題があるのはきつとカインとアベルのほうよね」

人差し指を上げ、そう僕に聞く。

「そうだね。でもだとすれば、内容によっては自業自得と言えるかもしれない」

「かもねえ。文章には、アベルのほうの供物の表現に『肥えた』と書かれていたらしいの。カインはただ漠然と作物と書かれていたのによ」

「それはつまり？」

「カインは供物を妥協し、それが神にバレたんじゃないかという説」
言っている本人も少し笑ってしまふ内容だった。

「昔にもズルいことを考える人がいたんだね」

「ズルいっていうか、きつと誠意の問題だったんでしょね」

しかし、それならば神が弟だけを選んだ理由として相応しくもある。僕は目の前に置かれた湯呑みを見た。もしどちらか片方が使い古しの茶葉だとしたら、僕だって新しいほうを選ぶ。そう思いながら、僕はお茶を一口にした。渋い香りと、ほのかな苦味が鼻腔をついた。御奥さんの茶は、肥えているように思えた。

「もしも」

御奥さんが、僕を覗き込むように言った。

「亮太くんが神様だとしたら、私の入れたお茶は確実に跳ね除けられていたかもね」

思ったことを見透かされ、否定されたように思えて冗談に笑えなかった。

「大丈夫だよ」

「どうして？」

「僕がもしも神様としても、美味しいお茶の味なんて知らないから」

「それは神様失格だね」

「そりゃそうだ」

そりゃそうだ。僕は神様なんかじゃないんだし。僕は御奥さんが『神様失格』だと言ってくれたことに、不思議な安堵感を覚えていた。身分相応以上のものを受け取るには心苦しい。

僕は一度考えを整理するために言った。

「でも、キリスト教の神学には運命論っていうのがあって、つまりは予定調和が存在しているんじゃないかなかったわけ？」

だとすれば、カインの供物に対する妥協も、神が定めたことになる。

「神学で言うなら予定説ね。そうなのよ。この説が本当にあるとするのであれば、カインが供物を妥協したことも、その先にある悲劇の結末も神によって定められたことになってしまふの」

僕はそれを想像して、身震いした。嫌な汗が脇の下を伝っていた。

「それは、気持ち悪いことだ」

「気持ち悪い？」

御奥さんが怪訝な顔で僕を見る。

「まるで劇場で踊る操り人形だ」

カインとアベルから伸びる五体を操る見えない糸が想像できた。

神から見たら小さな劇場。その天井で、神は白い指先で人間を動かす。その中では人死にもあれば、生命の誕生も存在する。

僕は阿修羅像を思い出した。きつと、この世界中の人間という人間を動かすには、あの像みたく六本以上の腕を持った神がいるのだろう。神は人に自らと同じ姿を与えたと記載されていたはずだ。僕はそれが今、嘘のように思えた。

「私たちも、小説っていうものを書くじゃない」

「それがどうしたって？」

「小説の世界では、執筆者こそが神なの。運命、いわゆる伏線。そう考えれば、そんなに恐ろしいものでもないと思うよ私は」

「……うん」

「誰かが、何かが生まれ たってことは、誰かが、何かが作っ たってことだ と思うの。それは何も恐ろしいことじゃないよ」

「そうだね。そう、思うよ」

まるで僕の言いようのない恐怖を見通しての発言にも思えた。僕は釈然としないまま頷き、お茶を口に含んだ。少しだけ冷めていた。「そうだとするなら、執筆者、言えば神様にとって、人を殺すことなんて容易いだろうね」

言っ て僕は寒気を感じた。リビングでは暖房が強で効いているはずなのに、身体の奥から震え上がった。

「多分、それを容易いと思う神様は、神様なんかじゃないんだと思うよ」

それだけ言っ と、御奥さんはぬるくなっ たお茶を飲み干して、もう一度急須にお湯を入れる。空気が混ざる音がし、ほのかに茶葉の香りが届く。同じ茶葉で二杯目を淹れるのは果たして正しいことな nder だろうか。僕らは正しくないことに触れているのではないだろうか。思っただけで、僕は その茶を受けよう と、残っ ていた湯飲みの中身を同じく飲み干した。

「カインとアベルの話は、聖書上、初めて人類が犯した殺人罪とさ れているんだけれど、よくよく考えてみればそんなことに意味はあ

んまりないかもしれない」

二人の湯飲みに茶を注ぎながら、御奥さんは言う。真っ白い湯気が立ち、彼女の顔が見えなくなった。僕は黙って湯飲みを取って、冷えた身体を温めた。

「私たちが小説を書くとき、人の死ってというのはぞんざいには扱われないよね。物語の中で誰かが死んだことには、大抵意味がある。神様もまた、同じだったのかもしれない」

「どういうこと？」

僕は眉をひそめた。

「冷静になって考えてみてよ。神様よ神様。会社の上司じゃないの。仕事が出来ないからリストラだとか、性格に問題があるからなんだとか、そういうレベルで計るものなのか、神様っていうのは」
「分からない。でも、言われてみれば、もっと尊大なのかもしれない」

自分の中に矛盾を感じる。一方で神を操縦者として恐れる部分があるのに、僕はどこかで近くにいる人間のような感覚で話していた気もする。大きさと小ささでの境が、少しずつれたような違和感を感じた。

「尊大、だよ。私たち人間が差し出したものの優劣を決めるだとか、そもそも選択するってこと自体が既に前提としておかしいの。受け入れる、受け入れないじゃない。アベルだけの供物が受け取られたことは、神の予定調和だったのよ」

御奥さんは語り部になったかのように、手を大きく広げ、その尊大さを表した。

……。

いかれた宗教者のように見える。僕は熱の入った御奥さんとは真逆に、酷く冷めた目をしていたのかもしれない。これだから、と僕は相手を卑下するような目をしていたのかもしれない。日本人は無宗教であるから、熱狂的に宗教について語る人は稀にしかいないと聞く。だからこそ、そういう人物を目の前にした時、日本人はその

魅力に取り付かれるか、僕のように無意識の中で疎外をしようとする二択に別れると思う。

ほとんど突然だった。そもそも僕のほうからこの話を持ちかけたというのに、途中で嫌気が差すわ興味は失せるわ、少しばかり熱が入っただけで冷淡になってしまふ。今の僕には乾いた笑い声すら出なかった。

御奥さんの話す言葉が分解され、ゲシュタルト崩壊を起こす。言葉がもし目に見えていたら、僕の視界は大量の傍線で埋まっていただろう。

その時、時計がカチツと音を立てた。

七時だ。

同時に野鳥のさえずりが耳の奥に心地良い響きをもたらす。春か、秋か、朝か、夜か。時間感覚が渦巻き、結局僕はどうでもよくなっただ。天日浴でもしようと、扉を開く。空の色は分からなかったが、青い臭いがする。瞬時にして、言葉の傍線は深緑の木々に変貌した気がした。生い茂る葉と葉の間から木漏れ日が差す。僕はそれに手を伸ばそうとして、肘に何かをぶつけた。

「あつ。大丈夫？」

ズボンの上に湯飲みを落としていた。じわり、と熱に触れた部分痛みを伝えてくる。僕は飛び上がってその場を退いた。その拍子に、湯飲みがふとももの上を転がって床へと落ち、思わず目を瞑りたくなるような音を上げて割れた。

破片が飛び散ると同時に、まるで僕の脳のほう割れてしまったんじゃないかと思うくらいの頭痛が襲った。眼球の奥から後頭部をしきりに痛みが走る。奥歯を思いっきり噛み、瞼に力を込める。鼻息が途切れ途切れに痛覚のリズムを刻み、僕はそれを抑えようと必死に深呼吸を行う。

背中に、やや冷たいものが当たった。僕はそれが御奥さんの小さな手なんだとすぐに気付いた。

「……………門限」

僕の口から出た言葉はか細く、聞こえなかったのか、御奥さんはそれを鸚鵡返しした。僕はもう一度大きく深呼吸すると、なるべく平常を装って言った。

「ごめんね。門限なんだ。七時以降、人を家に入れちゃいけないことになってて」

「それよりも、頭痛いの？ 大丈夫？」

「頭痛の持病があつてね。たまに起きるんだ。変なところ見せちゃったね」

笑えた、だろうか。

「そんなことはないよ。お話やめたほうがいいよね。ごめんね、具合悪いのに押しかけちゃって」

真顔で首を横に振って、自身の犯した何かを否定するように捲くし立てる御奥さん。そんなことはないよと、僕が言つてあげたかった。御奥さんは、何もしていない。

僕は滲んできた冷や汗を拭って、折り曲げた背中を伸ばすために立ち上がった。大袈裟に御奥さんが僕を支えようと、横に手を添えてくれる。冷え性なのだろうか、先ほども感じたとおり、御奥さんの手はやけに冷たく感じた。

「続けてくれないか」

僕の正気を疑う。御奥さんからは「は？」と、笑えるほどに簡単な疑問符が返ってきた。

「話を、続けてほしい。僕はそもそも、御奥さんにアベルの供物のみが捧げられたわけを聞くために、こうして招いたんだ。今のままじゃ、帰せない」

「あ、明日でもいいよ、私は」

「普通の学生は、七時の門限なんか守って行動するものなのかな？」
わ、分からないけど……」

「なら大丈夫だよきっと。姉ちゃんが帰って来た時に御奥さんを帰せばいい」

吐き気を催す。何を言っているのか、自分でもあまり分かってい

ないのかもしれない。混乱したまま、口だけがぺちやくちやと動いている気がした。

「でもやっぱり悪いから帰るよ。そこまでして話すような内容じゃないし、それに亮太くん、何か辛そう」

「つら、そう？」

僕は自分の頬に触れて、表情が固まっていないかを確かめる。そんな気はしない。すると御奥さんは視線を逸らして、それこそ僕よりもっと辛そうな表情で言う。

「や、やっぱり、お姉ちゃんと一緒に住んでいるところに来るべきじゃなかったよね。ごめんね……」

申し訳無さそうに言う御奥さんを見て、僕の中で頭一つ出ていた衝動がゆっくりと戻っていく感じがした。そうして、先ほどとは違う意味で、冷めあがっていく。諦観にも似た落ち着きが、僕の肩を降ろした。

やけに軽くなった頭で考える。考えて考えて、僕はやっぱり御奥さんに言った。

「そろそろ暗いし、お開きにしようか」

「うん……」

僕は一步も動こうとしない御奥さんの横を通り、彼女のバックと上着を取って、渡した。部屋の温度が高かったせいか、どちらもほのかな熱を持っていた。そうして彼女の手の平を思い出して、なんだか虚しくなった。

御奥さんを玄関まで案内すると、夜の寒気で冷えた廊下に足裏を冷やされた。僕は靴箱の横の踵入れを渡した。御奥さんは使い方が分からなかったのか、杖みたいに玄関の床に立てて靴を履いた。なんだか滑稽で、僕は自然と笑ってしまった。

「ど、どうして笑うの？」

「なんでもないよ」

「なんでもないことはないでしょう？ 気になるじゃん」

「いや、慣れないことはするもんじゃないなあって」

本当に、そう思う。

「最後にちよつと、聞いていいかな？」

靴を履き終えた御奥さんに、僕はそう声をかけた。

「どうしたの？」

「さっきの話の最後。アベルの供物を選んだのは、神の予定調和だったつて。つまり、神はアベルの供物を選ぶことによって、カインがアベルを殺害することを知っていた。そうだよね」

「うん。まあ、これもまだある説の一つなんだけどね」

「これには、意味があるつて、御奥さんは言いたかったんだよね？」
「そうだね。そういう話だった」

「なら、その意味だけ聞かせてくれないかな」

知りたいことなんて、つまり言えばそれだけだった。神がカインにアベルを殺させたのだとしたら、一体そこにはどんな意図があったのか。それだけだった。

僕が、ぼくが……。

「神様はね、カインを『悪』の象徴として定めたの。これを神学で、予定説、つていうの」

恐らく、御奥さんは忘れられないだろう。僕はきつと、とんでもない顔をしていたに違いなかったからだ。

彼女が扉の向こうに消えてから、僕は深夜二時まで起きていた。姉ちゃんはその日、帰宅しなかった。

5、日常的邂逅（5）（後書き）

今回は少し苦勞したためか、読みにくい内容かもしれないです。
申し訳ありません。

6、非日常的発展(1)

インターフォンの音を聞いたとき、僕は僕が死んでいたことによ
うやく気付いた。瞳を虚ろにして口からだらしなく涎を垂らしてい
る醜悪な姿が見える。頬は痩せこけ、髪の毛は油でギトギトになっ
てしまっている。そうした光景を見ている僕もまた、同じ姿をして
いるように思えた。

十日が経過した。姉ちゃんがいなくなってからというもの、僕は
生きている心地がなく、ひたすらにそれだけを求めた。ある種の宗
教的な断食も行った。しかし、飲まず食わずでいようが一日一歩す
ら身を動かさなかるうが、僕の身体と違うところにある姉ちゃんの
身体は動かせない。そういう諦めを感じた、直後の現状だ。

僕は目を覚ます。目脂で固まった睫を無理矢理開いて、すっかり
冷え切ってしまったている部屋の温度に身を震わせた。インターフォ
ンが忙しなく鳴り続けている。僕は出向こうと足に力を入れたが、
まったく動かなかった。栄養失調か水分不足か分からないが、ひた
すらに身体が重い。何かが圧し掛かっている重さというよりは、身
体の中に鉛を埋め込まれたような内部的な硬直がある。意識を失う
直前の感覚に良く似ている。僕はまだ眠っているんじゃないかと思
ったけれど、インターフォンが激しいノック音に変わったとき、驚
いて身を起こした。

ようやく意識が覚醒したのを認識する。頭から足の指先にかけて、
一気に寒気が電流のように走る。肩と首を適当に慣らすように回す
と、幾分か動き易くなる。指先が凍ってしまったように冷たい。手
をそのまま脇の下に入れて、僕は玄関に出る。

玄関の扉を開けると、マフラーで顔半分を包んだ御奥さんが立っ
ていた。その向こう側に銀色の空が見える。何日かぶりの外気に、
すぐに耳が痛くなった。

「あ、亮太くん」

僕の姿に気付いた御奥さんが、上目遣いに僕を見る。マフラーから顔を離したくないようだった。

「何か、用かな」

久しく声も出していなかったせいかな、どもった声になる。一度僕は咳き込んで、痰を飲み込んだ。

「何か用か、じゃないよもう。一週間以上も来てくれなかった」

「一週間……。そうだね、一週間経ったんだね」

「何を呆けているのか分からないけど、どうしたの？ まさか、亮太くんに限って不登校、なんてことは」

言ってその可能性を考えたのか、失言したとでもいうように口を閉ざした。僕はそれに首を横に振って答えた。

「気分じゃなかったんだ」

「気分って……そんなのでいいの？」

「そんなのってどんなのだよ」

「なんていうか……亮太くんらしくない、不真面目な感じがする」
目線を下げて、御奥さんがそう言う。

彼女は僕を一体どういう目で見ていたのかが気になった。僕は確かに、傍目には真面目くんに映っているのかもしれない。でも、教室中で静かにしていることが、どうして真面目くんに繋がるのだろうか。いや、そもそも御奥さんは僕が教室でどのように過ごしているかを知らないはずだ。彼女にとつての『僕らしさ』は、まだ二十にも満たない曲がり角での対談で決められたことだということ、なのだろうか。

「僕が不真面目で、君に何の不利益が生まれるのかが分からない」
自然と、そんな辛辣な言葉が出てきた。

「利益、不利益で考えるなら、凄く不利益だよ。朝からテンション凄く下がる」

「何だよ。君は僕と話すことによって、一日のモチベーションを上げているっていいのか？」

「過言じゃない」

下げた目線を上げて、僕を射抜いてくる。その視線に、僕は頭を抱えたくなった。どうやら、本当にその理由でここまで来てくれたらしい。僕は白い息を大きく吐き出して言う。

「君のモチベーションが僕のせいで下がってしまったことに関しては、素直に謝るよ。そんなに僕との対談を大切にしてくれているなんて思わなかった。でも、僕にだって気分はあるんだ。理解してほしい」

捲し上げるように言うと、しばらく御奥さんは間を置いて、唐突にこう返した。

「それは、亮太くんらしくない」

「……」

僕は目を細めて目の前の『女』を見た。懐疑的な視線で彼女を見て、同じような意味合いを持った色をした瞳に辿り着く。

君は、僕の何が分かるのか——と、そう言葉に出そうになつて、それがチープな言い訳なのだとは知っていて止める。僕が彼女がこの一週間、どのような思いで過ごしていたかが分からなかったように、彼女だつて分からない。そんな当然の事を、わざわざ口に出す必要性も感じない。そう考えると、沸騰寸前まで来ていた苛立ちはゆっくりと冷えていつている気がした。

「亮太くん、ご飯はちゃんと食べてた？」

顔を窺うように、御奥さんが覗き込んでくる。

「それなりに。しっかりは食べてない」

「どうして？」

「どうしてって、そりゃ、そういう気分じゃなかったからさ」

「理由がないって言うの？」

「そうだね」

「どうして？」

僕はキツと眉を引き締めて、御奥さんの肩に掴みかかった。流石の僕も、この禅問答は限界だ。ある種の狂氣的な問いかけに、気持ち悪さも覚える。僕が指に力を入れると、御奥さんの瞳の色が、一

気に弱弱しいものへと変貌を遂げた。凶獣の前の子犬のように、細かい声で泣きそうな表情をしている。

「前も言ったじゃないか。そういう顔をするくらいなら、どうしてそんなことを言うんだ」

「私、何も、言ってない」

「理由がないことに理由を求めるのは理不尽だよ。君はとつくに破綻していることに気付くべきだった。そうすれば、僕を不快にさせることもなかった」

「ごめんなさい。本当に、ごめんなさい」

このしおらしさが、また一段と僕の疑念を燃え上がらせる。

ピエロの厚化粧を思い出す。真っ白な、それこそ意味は違えども雪化粧とも言える顔面に、図形が描かれている。その中に、涙のマークが目にしたに描かれていることが多い。顔は笑っているのに、涙を流しているのだ。不気味だ。彼女は落ち込んでいるはずなのに、どこか計略的なものを感じずにはいられない。それが女性としての魔性なのか、それとも御奥さん特有のものなのかは、女性経験に疎い僕には到底理解しがたいことだ。

「とにかく心配をかけたなら謝るよ。でも、それ以上は御奥さんには関係のないことだ」

「……」

ほら、また。

御奥さんは薄ら笑いを浮かべていない。劇場で本当の素顔なんて見せる人はいないのだ。誰もが演義をして、客を沸かせるために必死になっている。御奥さんは俯かせた顔から上目遣いをして、僕に言った。

「お姉さん、帰ってこなかったんでしょ？」

「……どうして、知っている」

むしろ、僕のほうが疑心暗鬼になっているのかもしれない。でも、それでも恐る恐ると言った感じで聞かすにはいられなかった。

「今の時間、何時か分かる？」

「時間？ いや、分からないけれど。それがどうしたっていうんだ」
「現在時刻は六時半。そして、亮太くんのお姉さんは大学生で、自転車登校なんだよ」

僕は車庫を思い出す。車庫にはいつも姉ちゃんの自転車が入っていた。しかし、もちろん大学に行っている際にはその自転車はない。僕が車庫を一瞥すると、そこには自転車はない。

「それが、どうしたんだ。姉ちゃんは大学に泊り込みなのかもしれない」

「私、今週一週間、全部ここに来てるんだよ」

戦慄した。それじゃあ、まるでストーカーみたいじゃないかと。ぞわりと腕に鳥肌が立った気がした。

「一度も自転車が車庫にあった日はなかったよ。お姉さんが一週間丸まるどこかに泊まりに行っているって解釈してもいいけど……亮太くんの様子から、それは想像できない」

そうだ。そもそもこの問答は、御奥さんが僕にしたように無意味なものだ。そう、言わせれば、

「お姉さんがいないから亮太くんのおかしくなったんじゃないか、っていう推理じゃないの。亮太くんのおかしい理由はお姉さんじゃないかってこと」

僕は妙に納得してしまった。

しかし……。

彼女は知りすぎているな、と僕はふと思った。そこの市井の方々よりはもちろん、外出が多く、滅多に家にいない両親よりも知っているかもしれない。僕が一体どのような人間なのかということ。御奥さんはヘビになるかもしれない。それは僕にとって、樂園の追放を意味する。樂園の追放とは、実質上の死に近い。僕は自分の慣れ親しんだ地面の上以外で寝れるほど、器用な人間じゃない。

……。

「そうだよ。姉ちゃんが君と話をした日を境にして、家に帰ってき

ていない。だから僕は落ち込んでいたんだ」

そう自白する。自身でも首を振って嘆息を漏らしたくなるような情けないものだ。

「学校、行こう？」

まるで不肖の息子を持った母親のような言い草で、そう言う。多少の苛立ちを覚えたのは、僕がまだ子どもだからだろうか。御奥さんが僕の着替えてもいない寝巻きの裾を掴む。

「行つて、どうなるんだ」

「行かなくて、どうなるの？」

何か言葉を返そうとしたが、行き場を失った反論は喉の奥に嚥下されていった。胃の中までいつて消化されて、結局どうしようもなくなつた。

「君は、行つたほうがいいっていうのか」

「少なくとも、こんなところで引きこもってるよりは」

次の瞬間、僕の腕が御奥さんに伸びて激昂しているイメージが湧いた。現実では、握り拳を作つて抑える。君に何が分かる。君に何が分かる、自問するたびに惨めになる。そうして僕は振り返つて、自分の質素で何の変哲も無い家を見た。玄関からは外気よりも冷たい空気が僕の素肌を打っている。もうここには、冷えた空気しかないのだろうか。

アダムとイヴのエデンの園があつた。神は彼らの罪に憤つて二人を追放したけれど、もしも、片方だけが追放されたならば、イヴのほうだけが追放されていたならば、そこは果たして楽園と呼ばたのだろうか。アダムの一人で、罪のない人間を演じ切れたのだろうか。考えれば考えるほど、頬が垂れ下がっていく気がした。

「まだ間に合うからさ。一緒に行こう？」

「……分かつたよ」

あつさりと折れた。御奥さんのほうに向き変えると、彼女は酷く嬉しそうに顔を輝かせて、今にも飛び跳ねそうだった。

「荷物とつてくる。あと、着替えも」

「ここで待っていていいよね」

「ああ。十分もかからないで戻ってくるよ」

頷いた御奥さんを玄関に残して、僕は家の中に戻った。フロアリングをぎゅっと踏みしめる音がする。いつもは聞こえない音が、今はやけに耳に残るような気がした。階段を上がって、姉ちゃんの部屋の前に立つ。僕の制服はここの中にある。持ち主帰還を待つ寂しい部屋がそこにはあり、触れたら腐って崩れ落ちてしまいそうな危うさを感じた。ドアノブを回すと全然そんなことはなく、木の軋む音を立てて扉が開いた。質素で簡素な部屋が視界に飛び込んでくる。年頃の女性のものとは思えないほどに、部屋の白さが露出した部分が多い。僕は別世界に足を踏み入れるような気持ちで一步を踏み出した。姉ちゃんの残り香がかすかに香る。まだ、主がいた記憶は持っているようだ。そのまま何も無い部屋を進んで、壁に収納されたクローゼットを開ける。中には僕のものばかりが並んでいた。綺麗にクリーニングもされているらしく、皺一つ無い。その中から学校の制服を取り出す。寒気に晒されていたせいか、乾いた臭いがする。冷えてしまっている僕の指先よりも冷たい気がした。僕は出来るだけ無感情に部屋を出る。すると、目の前にガムテープで硬く閉じられた扉が飛び込んできた。

悪寒が走った。同時に、両目を釘で刺されて固定された。そして唐突に思った。この扉は、開けなければならぬと。

半ば引き寄せられるようにして扉の前に立つ。ガムテープに手を這わしてみると、一筋縄では行きそうに無い雰囲気を感じた。かじかんだ指で一枚一枚剥がしていくのは骨が折れそうだ。今は諦めたほうが良さそうだ。

御奥さんを待たせるのは悪い。僕は廊下で、急いで服を着替え始めた。

7、非日常的発展(2)

耳を劈くような悲鳴が家に響き渡った。着替え終わってリビングで水を喉に流し込んでいた僕は、咽て咳き込んだ。まだ中身の残っているグラスをステンレスのキッチンに投げ込んで、急いで玄関のほうに向かう。

「どうしたんだ！」

性に合わない大声で叫んだ。あの悲鳴の持ち主は用意に想像できなかったからだ。僕が玄関に駆けつけると、御奥さんは玄関に身を横たえて頬を押さえていた。そしてその視線の先を追って、僕は二度驚いた。

「阿形、くん」

そこにいたのは正真正銘、毎朝学校で声をかけてくる阿形亮介そのものだった。まるで小汚いカラスでも見たかのように、阿形くんは御奥さんに向けて明らかな嫌悪の視線を送っている。僕はその異様な光景に息が詰まるようだった。様々なことに理解が追いつかない。とりあえず僕は御奥さんを抱き起こし、肩を貸した。

「おうりョータ。随分とご無沙汰だったと思えば、オンナと遊んでいたのか？」

「待つてくれ阿形くん。君は一体御奥さんに何をしたんだ」

阿形くんは学校の制服を着ている。登校途中で寄ったのだろうか。それにしたって、どうして僕の家を知っているのかも分からない。そして、何故御奥さんが倒れていたのかも分からない。僕は睨みつけるようにして阿形くんの反応を伺った。

「殴ってやったただけだ」

「殴った？」

御奥さんの頬を見ると、かすかに腫れている気がする。手の平ではない、明らかな拳で殴られた傷だ。女性の顔にあるまじき痛々しい傷痕に、憤りを感じる。

「どうしてこんなことをしたんだ」

「そのオンナから聞けよ」

僕は横目に御奥さんを見る。悲痛に歪んだ表情で、何かを耐えるようにして歯を食いしばっているのが分かる。語れそうな様子じゃ無い。

「説明してくれないか、阿形くん」

「……ったく。意味も無く一般人ぶるてめえも嫌いじゃねえぜ」

微笑とも取れない曖昧な笑顔を浮かべ、すかしたように言う。

「俺が心配して調べてここまで来てやったら、家の前に知らねえオンナがいるじゃねえかと。そんで、そいつに「ここはリョータの家か？」と聞いたら、突然般若みたいな形相で襲い掛かってきやがったんだ」

「なんだって……？」

にわかには信じがたい話だったが、御奥さんは先ほどから黙ったまままで否定もしようとしない。僕はそのまま阿形くんの話に耳を傾ける。

「最初は所詮ガキのオンナの力だからって軽く跳ね飛ばしてやろうと思ったんだけどな、こいつ、途中でカッターナイフ持ち出してきやがった」

「……待つてくれないか。御奥さん、それは本当かい？」

カッターナイフとなると、洒落で済む話じゃない。下手したら傷害事件だ。僕の肩の下で相変わらず俯いている御奥さんに問いかけるが、答えは返ってこない。ぶらりと垂れ下がった腕が、人形のようで恐ろしい。僕は恐くなって軽く御奥さんを揺すってみた。すると、今まで頬を覆っていた腕が、もう一本同様にだらりと糸の切れた操り人形のように垂れ下がる。そして、今まで見えなかった彼女の顔を見たとき、僕は戦慄した。

「……どうしたんだよ、なんなんだよ」

揺れた身体とリズムを同じくして揺れる瞳は、もう紛うことなき作り物の目だった。その瞳が僕の声の境にして、ぎょろりと僕のほ

うに回る。

「私、恐いかな」

抑揚の効いていない声で、僕にそう問うた。

「なんだよ。テレビから出てきたサダコみてえなツラして恐いかどうかだと？　クソアマぶるのも大概にしゃがるんだな」

僕が答えに詰まると、阿形くんが代弁してやると言わんばかりに辛辣な言葉を投げかける。しかし、僕はそれを強く咎めることが出来なかった。僕の感じたイメージと、阿形くんの言葉はほとんど一致してしまったからだ。

「……」

「御奥さん？」

すっと僕の肩から抜けて、御奥さんが立ち上がる。ふらふらと揺れ、足元はおぼつかない。一体なんなんだ。僕は思考に亀裂が入ってずれてしまったような、どうしようもない混乱に駆られる。

「学校に行こうよ、亮太くん。学校に行こうよ」

まるで機械がしゃべっているような棒読みの言葉。うわ言みたく、何度も何度もそのワードを繰り返す。流石の阿形くんも君が悪くなつたのか、立ち上がって距離の近づいた御奥さんから距離を取るように後ずさった。

「御奥さん。聞いてくれ。そして答えてくれ。どうしてカッターナイフなんて」

「やってない！！」

突然の叫びに、凍っていた空気が割れる音がした。

「そんなことやってるわけないじゃんか亮太くん。私がカッターナイフ？　英雄に箒と塵取を持たせたほうがまだ信憑性があるよ。私が殺害未遂？　ナチスの慈善事業のほうがまだ荒唐無稽じゃないよ。そう言うが、彼女は背中を向けて僕の方を見ようとはしない。」

「あ？　ボケたのかてめえ。額に上げた眼鏡がないってほざいてたじじいのなら許せても、そりゃねえよ」

「今日の朝ごはん思い出せる？　出せないでしょ？」

「てめえ、なめてんのか？」

阿形くんが激昂して青筋を立てて、御奥さんに掴みかかった。

同時に、御奥さんの左手が上がり、勢いよく乾いた音を立てた。

気持ちいいくらいの快音を境にして、聴覚が色を失ったかのように、静寂が広がる。当人たちよりも、僕のほうがびくびくしていた。止めに入るべきだろうか、それとも保身に走るべきなんだろうかと焦燥にも似た鼓動に悩まされる。

「教えてやろうかクズ」

「……」

阿形くんの氷柱のような言葉にも屈せず、視線を叩きつける御奥さん。僕にはもう、目の前の光景がどうなっているのか理解出来なかった。

「人に痛みを与えたければ、拳で殴りな。そんなんじゃ、何も壊せねえよ」

言って、阿形くんは目にも留まらぬ速さで御奥さんの顔面のどこかを殴りつけた。彼女の細い身体は軽く飛んで、玄関の外に叩きつけられた。苦痛の声一つも出さず、強い拳で壊されてしまった人形のように、ガチャリと音を立てて彼女は崩れ落ちた。

「っ、阿形くん。僕にはなんだか良く分からないけれど、女性を殴るのはやめるんだ。それは、良い男がやることじゃない」

僕は言いつつ、御奥さんのほうに駆ける。御奥さんはじつと何かを耐えるようにして瞳を閉じていた。僕は構わず彼女を抱きかかえて起こす。

「リョータ。お前にも教えてやるよ」

「なんだい」

「本当の良い男ってのは、女子供だろうが容赦なく殴りつけるんだよ」

以前僕に見せたように、シャドーボクシングをする。そしてそれを見て、僕はどうしてか妙に納得してしまった。けれども僕にはきつとそれが出来ない。僕はこうして、殴られたあとの始末をするく

らい。視線では敵意をむき出しにしつつ、僕は卑怯にも御奥さんに優しい言葉をかけて、送り出そうとするんだろう。その行動は両方とも僕の本心の真逆なのかもしれない。

だって僕は、御奥さんという人物がそこまで好きではないんだから。

「御奥さん。僕のことはいいから、君だけでも学校にいつてきてくれないか。流石にこんな状況でのりくらしと学校に行くわけにもいかないだろう?」

「……」

「君を信じていないわけじゃないんだ。もっと平等にするために、阿形くんから話を聞こうと……」

「かつこよくないよ」

唐突に言われたことに、僕は言葉を詰まらせる。

「そんなの、最悪にかつこよくないよ、亮太くん……」

酷く息が詰まる。手を胸に押し付けて、僕は鼓動を聞いた。無音だった気がした。

御奥さんはそのあとは何も言わずに、玄関を抜けて去って行った。取り残された僕と阿形くんはしばらく互いに黙り込んだ。

かつこよくないって、何なんだ。ならかつこいいって何なんだ。それは僕のかつこよさなのか、御奥さんにとってのかつこよさなのか。それはジョハリの窓だ。四つある窓のうち、彼女はどの僕を見てかつこ悪いと発言し、どの僕を見てそうじゃない僕だったのか。少なくとも、それはきつと僕から見える窓じゃない。僕が覗き込む窓はいつだって暗雲が立ち込めているんだ。あのグロテスクで醜悪な姿、まるで吐き捨てられた路上のゴミみたいな汚らしさに、かつこよさなんて微塵も感じられない。いや、唯一僕の窓にヒカリが差すとするならば、それは姉ちゃんがいる場だけだ。それは隠された窓で、御奥さんには見えない僕。なら彼女は僕にとっての盲点の窓を見ているのだろうか。それは、とても気持ち悪い。ズボンのチャックが開けっ放しなのを気付かないで笑われているみたいだ。言っ

てくれればいいのに、面白がって誰も言ってくれない。僕にどうしろっていうんだ。

「リョータ。女の言うことなんか気にすんじゃねえよ。あいつらの言うことはいつだってあいつらの事情だ。俺らには関係ねえよ」

阿形くんに言われて、僕は首を振って思考を掻き消した。どうしようもないんだ。どうでもいい。

「それより、阿形くんはここに何をしにきたんだい。まさか、君が僕を心配してきてくれたとは考えがたいんだけれど」

「おいおい酷えな。鬼の目にも涙だぜ。俺だって入院中のダチを見舞うことくらいする」

「引きこもり中の男をわざわざ気にかけるほど、涙腺脆くないだろう?」

「間違いねえな。まあいい、別に用事なんてねえよ。暇だったからぶらりと来てみたただけだ」

「そうかい。ところで、カッターナイフで怪我はしなかったかい?」
「ああ。女に負けるほど柔じゃねえよ」

そりやそうだと納得して、僕は御奥さんが去って行ったあとのドアを閉めた。鍵を閉めて、カチツという音に安心する。

「それはそうと聞けよりョータ。俺ってば、関東黒羽連合隊に追われてんだよ」

「はあ? なんだって、関東黒羽?」

あまりに荒唐無稽な言葉に、激しく語尾を上げる口調になる。

「知らねえのか、あの有名な暴力団だ」

「あのがどこを指すのか分からないけれど、少なくとも僕は聞いたこと無い」

そもそも暴力団で『隊』なんてつけるところは聞いたことが無い。

「お前、関東黒羽連合隊と言えば、首都東京を牛耳る恐ろしい……」

「ま、待って。東京だって? 黒羽は栃木県だよ」

「あ。そうなの」

分かった。これはお得意の嘘だ。何の意味があつたか知らないが、

今ので真相が見えた。

「ふう……。何があったのか知らないけれど、なんだいその見え見えの嘘は」

「何故嘘だと言い切れる？　俺は不良だぞ、暴力団に追われてたっ
ておかしくない」

「そこまでしてその嘘を貫き通したい理由が分からないよ」

「……それもそうだ」

阿形くんは肩をすくめて、仕切りなおしといったように言葉を切
って、続けた。

「関西、っていうか大阪に行こうと思ってる」

「だから関東の暴力団に追われている設定だったのか……」

「なんだか笑ってしまうような嘘だ。」

「忘れるよそれは」

阿形くんがそう笑って言う。

「それで、どうしてまた大阪なんかに」

僕らが住んでいるのはいわゆる東京の近郊だ。関西まで行くとな
ると、軽い旅行になる。僕も何度かいったことがあるが、帰ってき
た頃には関西弁が移ってしまっただけの不便だった記憶がある。

「悪さをしようと思ってる」

「また訳の分からないことを」

思わず頭を抱えなくなる。

「何、人様に迷惑かけてまでやらなきゃならんことでもないからな
ー 大阪がやり易いんだよ」

「なんでまた大阪？」

「行けば分かる」

「うん。……ん？」

セリフになんだかズレを感じて、僕は首をかしげる。

「僕は行かないよ？」

「いや行くぜ」

こいつは何を言っているんだと、自身の目と耳を疑いたくなった。

しかし、当の阿形くんはどこも隠すところがないくらい本気らしく、口元を不気味に吊り上げてにやけていた。

「学校はどうするのさ？」

無駄だと思いつつも、そう聞く。

「もう二週間近くも休んでる野郎が今更気にすることか？」

「いや、それにはやむをえない事情が……」

「なら、尚更だろ？」

何が？ と聞き返そうとして、僕は阿形くんの険しい表情に気付く。彼は笑ってなんかいなかった。ずっと、僕を見ていただけだった。

「……阿形くん。君は何かを知っているのか」

「……」

どうして何も言わない。またそうなのか。御奥さんのように、僕には見えない僕の窓を見て嘲笑っているっていうのか。僕にはどうしようもない部分を見て、僕にどうにかしてもらおうと目論んでいるのか。

「俺たちの門出の祝いの日だぜ。しけた話するより、コンビニでつまみでも買ってこようぜ」

はぐらかしたつもりなんて毛頭も無いんだろう。彼はそもそも言うつもりも、知っていたつもりもなかったんだろう。阿形くんは玄関を出て、寒空の下に身体を晒した。僕はしばらくその背中を見ていたが、結局提案に折れてコートを持ってくる羽目になった。

8、非日常的発展(3)

コンビニに入ると、気だるそうな店員の挨拶が僕と阿形くんを出迎えた。阿形くんは流れるような動作で雑誌コーナーに向かうと、週間少年誌を手にとつて、まるで僕を無視したように読み始めた。僕は手持ち無沙汰になって雑誌コーナーを通り過ぎ、飲料コーナーの前まで来る。相変わらず代わり映えない品揃えに目を走らせると、たまに新作が混じっているのが面白いところだ。コカコーラの横に、銀色のラベルのコカコーラがあつた。また減量に成功したらしい。扉を開くと、かすかな冷気が肌に突き刺さつた。構わず適当な炭酸飲料に手を伸ばして、僕はすぐに扉を閉じた。この間には数十秒しかなかった。もちろん阿形くんはまだ雑誌に目を奪われたままで、僕のことには気付きはしない。菓子のコーナーに移動すると、更に代わり映えない品揃えが僕を迎える。いざこうして見比べてみると、どれもこれも魅力に欠けた。仕方がないので、棒付き飴玉の味を漁ることで暇を潰すことにした。

御奥さんには悪いことをしたかもしれないと、今更後悔していた。いくらなんでもそつけなさすぎたかもしれない。いや、僕の状態を知つていて訪問してきた御奥さんが悪いのかもしれない。どちらにせよ、あの対応は良くなかつた。いちご味の飴玉を手にとつて眺めていると、まるで笑つた御奥さんみたいだ、と思おうとしたが、流石に無理だつた。

「リョータ、何してんだよ」

左肩を叩かれる感触のあとに、阿形くんの馬鹿にしたような声が降つてきた。飴玉を元に戻すと、膝に力を入れて立ち上がる。

「何つて、阿形くんが何も買おうとしないから色々選んでたんだよ」
「いや、俺が買うものは決まつてるから良いんだよ。お前が食いたいのをさっさと決めちまいな」

なら先に言つてくれればいいのに、と言葉を飲み込んで、僕は言

う。

「ちなみに阿形くんは何を買うの？」

「酒と、適当なつまみ」

思わず吹き出しそうになった。

「まるつきりオヤジじゃないか」

阿形くんは不服そうに口を尖らせた。

「んだよ。門出には酒がつきものだろ」

「僕らは未成年だろ？ 買えるの？」

「どうにでもなる」

言つと阿形くんはさつさと目的のものを取りに行ってしまった。

僕もさつさと適当なものを選びに行こう。

■ ■ ■

コンビニから帰ると、部屋の空気はすっかり冷えていて、乾燥した肌には突き刺すような痛みが走った。唇をひと舐めして、暖房のスイッチを入れる。後ろには阿形くんがついてきて、コンビニの袋を無造作に机の上に投げた。

先週のことを思い出す。こうして御奥さんも僕の家に入った。今回は望む望まないじゃないく、成り行きでそうなってしまった。どこからおかしくなったのかは分からないけれど、僕はどうしてか、人を家にいることに抵抗を感じなかった。それはなんだか、すつきりとした感じがした。

「おっしやリョータ。酒を開けるぞ」

さつそくといった様子で阿形くんがコンビニの袋から、合計十缶はあるうかという酒を取り出す。缶チユーハイからビールまで色々

取り揃っている。僕はどれも飲めないの、ジンジャエールで気分だけ味わうことにしている。

僕が席に着くと、阿形くんは乾杯を待たずに缶を開けた。プシュ、と気持ちの良い音が鳴る。なんだか大人な感じがして羨ましくなつたが、酒に酔つた人間を思い出すと飲みたいとは思えなかった。阿形くんはそのままそれを口元に持つていつて喉に流し込んだ。豪快に喉が鳴ると、僕はその威勢の良さに呆氣にとられた。これで高校生かよ、と突っ込みを入れたい気持ちにも駆られた。

「さて、と」

缶を机の上に置き、口元を袖で拭うと、いたって真面目な表情で僕を見た。

「一体何でここ最近学校を休んでいたのか、理由を聞かせてもらおうじゃねえか」

僕は買つてきたコンビニの袋から、柿ピーを取つて口に放り込みながらそれを聞いた。

「気分だよ。学校に行く気分じゃなかった。それだけだ」

御奥さんにも言つた、まるで定型分を読んでいるかのように同じことを阿形くんにも返す。

「まるで俺みたいだな」

「心外な、と言いたい所だけど否定はしない」

「いま、柿とピーナツどっちを食つた？」

「ピーナツ」

口の中を確かめながら言う。

「嘘つくんじゃないよ。お前は柿を食つた」

そんな覚えは微塵もない。僕は指を差され、眉をひそめる。

「阿形くん。酔つてるだろ」

「酔つてねえよ」

「嘘だろう、それ？」

「どうしてそう言える」

「僕は柿じゃなくてピーナツを食べているからだ」

「かつ」

言葉通り僕の反応を吐き捨てた。

「なあ、それは俺には分からねえことだ」

机に頬杖をついて、依然似合わない真面目な表情でそう言った。

どこか不機嫌そうにも見えて、僕は段々と恐くなる。

「分からねえことだが、調べることは出来んだよ。口ん中手突っ込んで広げて中身見れば、齒に詰まってるものでも見てすぐ分かるんだよ」

「それは、まあ……」

どう反応していいのか分からず、適当な返事を返す。

「だからさ、もう一回聞け」

その一瞬で、僕は息を飲む。

「どうして学校に来なかった。理由を聞かせろ」

今度の問いには明らかな威圧感が宿っていた。いや、彼のイントネーションは変わっていないが、僕の心理状態が明らかに変わった。阿形くんは、「嘘はすぐにバレる」と幼稚園児でも分かるようなことを僕に言ったのだ。子供だ、と思った。僕は阿形くんの前に、とても小さかった。分かっていたことだけれど、突きつけられると恥ずかしさがこみ上げてくる。

僕は口を開く。

「家族が帰ってこなかったから、僕が家にいた。それだけだよ」

「そうか。姉ちゃんか」

僕は今度こそ阿形くんを驚愕の視線で捉えた。心拍数が一気に上がる。阿形くんには自分の家族の話をしたことは記憶の限りない。僕と姉ちゃんの話はほとんど誰にも話していない。どうしてか御奥さんには話したが、それくらいだ。僕の重い扉は、僕自身だって容易に開けることが出来ないというのに、どうしてその中身を彼が知っているのか。

「んだよ。俺が知ってたらおかしいっていつのか？」

「……おかしい、と思う。僕が話した覚えはない」

「それは大きな間違いだぜリョータ。お前は俺に何度も話してる」

「い、いつ？」

「そんなの覚えてねえくらいには」

錯乱する。覚えのないことが現実として在るのは、非常に不愉快だ。相手を疑念をたつぷり込めた目で見てしまう。言っている事が嘘だと言って信じれなくなってしまう。そんな自分が不愉快になっ
てしまう。僕は阿形くんに嘘だと言って欲しいと心の中で願う。

「しかし姉ちゃんか。そうかそうか」

酒を嗜むようにちびちびと啜りながら、何か感慨深さを感じているようにそう呟いた。彼が何を思っているのか、それはまさにさっき阿形くんの言ったように僕には知る事の出来ないことだ。でも僕は意味深な台詞にもどかしさを感じ、思わず身を乗り出した。

「何を……知ってるんだ」

襟首でも掴まんとする勢いで、僕は阿形くんに迫った。自分でも異様だと思う光景にも阿形くんはまったく動じない。ギリッ、と齒軋りの音がした。自分のものと気付くのに数秒を要した。

「うぜえよ。顔を退ける」

「……」

アルコールも入った強烈な眼光で僕を睨みつけてきた。僕は自分が出すぎた行為をしたことに更に数秒経って気付いた。ゆっくりと席に腰を落とし、しかし阿形くんに対する言及の態勢は崩さない。

「けっ。何も知らねえよ。その存在と、お前とちょっとばかり仲が良いつてことくらいだ」

「……そうかい」

僕も飲んでもいないアルコールが入っていたのだろうか。酔いが冷めたように冷静になる。なんだか悪いことをした気がして、段々と罪悪感も積もってきた。

「まあいいや。お前が学校に来なかったわけには納得した。で、次だ」

立場の逆転。今度は僕が聞かれる立場になる。

「あの女は誰だ」

その代名詞を聞いて頭に浮かぶのは御奥さんの姿だ。先ほどの寸劇とも言える場面を思い出して、僕は更に罪悪感を積んだ。

「彼女は友達だ。あのバカ高に通ってる変な女の子だよ」

「仲良いのか？」

「どう、だろうね。少なくとも険悪じゃない」

「そうだろうな。だが、家にまで押しかけてくる女は大抵クソだ。覚えとけ」

何の経験談なのか分からないが、僕は心に留めておくことにした。
「女つてのは、何の利益ももたらさねえよ」

指先でビールの缶を遊びながら、少しだけ哀愁を漂わせながら阿形くんが言った。過去を勘ぐらせてしまうような仕草だった。

「何の得があつて、男と女つてやつは愛だの恋だのするんだろうな」

「分からないよ、僕には」

「お前はそういうことを体験したことがあるか？」

修学旅行の就寝前の話題だろうか。急に俗っぽい話題になった。

僕はそれに首を横に振った。

「あるわけないだろう。僕に浮いた話なんて……」

「悲観するなよ。そのツラでモテなかったわけじゃねえだろ」

「そういう意味じゃない。そういう意味じゃないんだけれど」

ほとんどまったくと言って良いほど興味が無い。僕がそういう立場にいたときのことを考えるだけで、寒気がする。いや、寒気とは違う。明らかな畏怖だ。今が変わってしまふことが恐いなんて言えば綺麗に聞こえるかもしれないけれど、僕のそれは明らかな裏切り行為だ。男女が一時の気の迷いで付き合ったとか、別れたとか、そんな青い話じゃ済まない。

「まあいいよ。とにかく僕には無いんだ」

「ふうん。まあ言いたくねえならいいけどさ。ちなみに、俺はあるぜ」

僕は阿形くんの外見を見た。肉付きのいい身体に精悍な顔立ち、

眉毛も髪の毛もしっかりセットされている。何よりもどつしりと構えたその佇まいが、数多の女性関係を想像させる。

「中学の頃、すげえ好きなやつがいた」

「へえ……」

僕は気の抜けた返事をしてしまっただろうか。それも仕方ない。

あまりにも阿形くんが、つまらなそうに惚気話をするからだ。まるで本当に過去というゴミ箱に思い出を放り込んでしまつて、既に袋も閉じてしまつたようだ。

「何、俺もまだガキだつた頃だ。そりやもう手に入れるために色々な手を尽くしたさ。気を惹くためなら何でもした。それこそ中学の頃だつたから恐ええものなんて何もなかった」

今の阿形くんを見て過去を想像してみても、普通に納得のいく光景が浮かんだ。けれど、最後の一言にだけはどうにも同意出来そうにはなかったが。僕の中学の頃は、それこそ毎日が恐かつたものだ。あまりにも幸せすぎて。

「まあでも初恋なんてのは大抵実らないのがセオリーってやつで、俺もそんな感じだつたわけよ」

「振られたのかい？」

「いや、振る振られる以前の問題だつた。俺は告白する前に諦めた」
意外な言葉に、僕は驚いた。手に入れるためならばなんでもすると言つた阿形くんが、告白する前に諦めた。なんだか矛盾しているような展開に、多少の混乱もした。

「どうして？」

「義妹なんだよ、そいつ」

「……」

言葉が出なかった。今どき現実で義妹なんて言葉を聞くとは思わなかつたし、そういう関係にある人物を好きになるなんていうものが現実にあることも信じられなかつた。

「里子っていうんだっけか。小学卒業間際に妹と姉が出来てな、最初は鬱陶しかつたんだが、結末にやこれよ」

そして何より、初恋の話をしているはずなのに、何か違う疎ましいものを語っているかのような重苦しさだ、僕には信じられなかった。

「……僕は、君に姉妹がいたことを初めて聞いたよ」

「そりゃそうだ。今まで誰にも話したことは無かったからな」

「見たことも無い」

「それもそうだ。あいつらは大阪にいるからな」

「大阪……？」

カチリ、と何かがはまった気がした。

「なんとなく見えてきたか、聡明なりョータ君よ」

不気味に微笑む阿形くんを見て、僕は頭を抱えた。なんということだ、僕は変な痴話話に巻き込まれたらしい。なんだか僕も不気味に顔を歪めてしまいそうだった。笑えてくる。なんて可愛い展開だろうか。僕はどこか漫画の世界に迷い込んでしまったらしい。

「まあただ、そんな面白い話は期待しないほうがいいぜ。話を戻して考えろよ。俺はな、あいつを好きになったことをとにかく後悔しているんだ」

「女性との関係には利益がない、って話しかい？」

「そうだ。だって考えてみるよ、面倒くせえ話ばつかじゃねえか。

何で俺はそんなことのために、わざわざ自分の人生の時間を費やさなきゃならねえんだ。あいつがいなかったからって俺は死ぬわけじゃねえし、損するわけでもねえのに」

「……生物学的には、そういう風に人間が出来ているかららしいよ。遺伝子っていうか、感情の源となっている成分、みたいなものがあるらしいし」

「くだらねえな。生存本能ってやつか？」

「多分。僕も専門的なことは分からないけれど」

「それは相手が妹でもか？」

「……」

禁忌を恐れているのだろうか。禁忌じゃないのに。僕は目の奥が

酷く冷たく乾いていくのを感じた。顔を伏せ、阿形くんには考え込んでるように見える仕草を取った。そうして視線が眼前の机の木目を捉えたとき、僕はここで起きたことを思い出した。

二週間前、姉ちゃんを最後に見た朝の出来事。

「……人つていうのは、一人では生きていけないし、二人でも生きていけないらしい」

「何……？」

阿形くんが低く響くような声で言った。僕は曖昧な二週間前を思い出しながら言う。

「互いに必要とし合っている二人だけでもダメなんだって。もっと多くの、友達とか、仲間とかが必要なんだって」

「だからなんだよ」

僕は苛付いた。何か理不尽な壁に阻まれたようで、とにかく腹が立った。

「——大切な何かよりも、世界に融合することを選べ、ってことだよ」

阿形くんは僕を冷めた目で見ていた。しかし僕の中はもっと冷たく、痛くも痒くもなかった。

「それは、結局やっぱり女はいらねえってことでいいのか」

「それだけを手に入れるために、それ以外を捨てなければならぬのなら、僕はそれを捨てるしかない」

そういうことなんだろう、姉ちゃん。だから姉ちゃんは僕が手放せないならと、僕の前を発ったんだろう。理解したくなかったことを理解してしまった。首の皮一枚じゃない。地獄に垂らされたクモの糸に縋るような希望も、僕は捨てた。それが世界と融合するために、姉ちゃんが望んだであろうことに必要なことなんだと漠然に思った。

「踏ん切りがついたぜ、リョータ」

阿形くんが言って、酒の缶を一気に呷る。豪快にそれを握り潰すと、何かを吹っ切ったように涼やかな顔をして笑った。

「酒じゃなくてお前の力を借りれば無駄金使わずに済んだな」

「君ともあるう人が、迷ってたのか？」

「ふん、俺は凡人なんだよ」

「よく言うよ……」

呆れて僕もジューズを呷った。酒とは違う感覚で、喉が焼けるようだった。

「リョータ。お前にこれ、渡しておくぜ」

僕は阿形くんが差し出してきた、薄い紙切れを受け取った。なんだろうと思って紙面を見ると、実に見慣れた固有名詞が書かれていた。

「……言っておくけれど、これは用意周到とは言わないよ」

「当たり前だろ。これは親切っていうんだ」

がはは、と豪快に笑い飛ばした阿形くんから受け取ったのは、大阪までの新幹線の切符だった。それも、出発は明日らしい。

9、非日常的発展(4)

一息ついて壁にかけられた時計を見ると、既に十二時を回っていた。部屋の中には秒針が時を刻む音だけが響き、おまけに阿形くんのどでかいびきもついてきた。酔いつぶれた阿形くんは、先ほど深い眠りについた。机の上には彼が飲み散らかした酒の缶が幾つも転がっている。僕はそれを一つ一つ拾って腕に収め、キッチンにあるゴミ箱に放り込んでいく。何往復かすると、机の上は元の状態に戻った。ただし、やけにその机に対して親近感が湧いてしまうような名残を残した。自分の感情が不思議だった。どうして机なんかに親近感を感じなければならぬのだろう。僕がそれに触れると、なんだか温かい気がした。気がしただけで、実際は手の平が冷たかっただけだった。

急に尿意を催す。僕は身を一度震わせて、便所に向かう。夜の便所は特別冷える。その途中にある廊下も然りだ。かじかんだまを用を足し、便所を出ると階段が僕を迎えた。そういえば制服に着替えたままだったことを思い出す。阿形くんも寝てしまったことだし、僕も着替えて寝てしまおうと思った。階段に足をかけると、廊下よりも一層冷たいフローリングの温度が足裏を襲った。足の指先が凍えて少量の痛みを訴えている。僕は気持ち早めに階段を登りきる。

「あ……」

再三の遭遇。部屋に入ろうとした時、視界にガムテープで封じられた部屋の扉が飛び込んできた。僕はドアノブに伸ばしかけた手を引っ込めて、そちらのほうに向かう。扉の前まで立つと、暗闇と静寂が視覚と聴覚を支配した。心臓の音は一定、僕は自分でも驚くくらいに落ち着いていた。今朝感じた未知の寒気はない。ガムテープに手を触れてみると、扉よりは冷たくなかった。

僕はその瞬間、激しい使命感に駆られた。この扉を開けなければならぬ、そんなものが再び訪れた。何重にも張り巡らされたガム

テープの隙間に爪を差し込んで、思いっきり引つ張った。しかしびくともしない。

今回の僕は、それで諦めなかった。階段を早足で駆け下り、キッチンから包丁を取り出す。にび色の刀身が闇の中で不気味に輝いた。こういう光を見ると、僕はなんとなく高揚してくる。武器を持った人間は、いつもよりも傲慢で、強くなれる。口元がにやけている気がして、僕は頬を引き締めた。当初の目的を忘れてしまいそうになるくらい、銀色の光は僕にとっての麻薬だった。

扉の前まで戻ってくると、ガムテープにそっと包丁を差し込んだ。爪ではがれなかったものが、たった一本の武器によって呆気ないくらい簡単に剥がれていく。そう思ったら、高揚していた気分が一気に冷めあがった。

不甲斐無さじゃない。理不尽さを感じた。僕が一人で出来なかったことが、手の平にあるこいつでは簡単に出来てしまう。知性も能力もある人間が、わずか千円にも満たなそうな安物の刃物に敗北を期した。

僕は首を振って邪念を振り払った。無機物なんかにコンプレックスを抱いている暇があったら作業をしようと思ったからだ。僕は再び包丁を差し込んで、ガムテープとの奮闘を再開した。

すべて剥がし終わると、部分部分が色褪せた扉が姿を現した。僕がこの姿を見たのは一体いつぶりだろうと考え、その底がまったく見えないことに気付いて考えるのを止めた。ドアノブに手を伸ばすと、やはり鍵がかかっていた。しかし、この扉はプラスチック製の鍵穴で、爪を差し込むだけでも簡単に開く様になっているのを知っている。指を近付けて鍵穴に宛がう。しかし、鍵穴は潰れているらしく、まったく爪がひっかかってくれなかった。僕は持っている刃物を見た。またこいつに頼るのかと思うと、気分はどんどん下降していく。致し方なくプラスチック部分に刃物を突き刺し、強引に開錠した。

空気が、凍りついた気がした。一体この部屋はどのくらいの間、

外気に触れずにこの場所に存在していたのだろうか。外された鍵。そのわずか数ミリにも満たない隙間から、僕は言いようのない冷たさを感じた。これは冬の冷たさじゃない。闇の冷たさだ。そう思った瞬間から、僕の鼓動は一気に間隔を狭めた。

はあっ、と深呼吸をすると、真っ黒な空間に白い靄がかかる。寒い。でもかたかたと震えている手は、そのせいじゃないと分かっている。僕はドアノブをそつと回そうとして、思い留まった。

是非を問いたい。けれど、回答者は見当たらない。ここまで来てまた逃げるのか？ と僕が問えば、答える側の僕は黙ったままで、結局何も回答は出ない。そもそもここで立ち向かえば何を得られてここで逃げてしまったら何を失ってしまうのだろう。何も分からない無限の禅問答が繰り返されて、優柔不断な心はいつか諦めに向かう。何も変わらないなら、何も変わらないほうがいい。そう自分に言い聞かせるようにして、僕はドアノブから手の平を遠ざけようとした。

「気になることを後回しにすんなよ」

腕を横から伸びてきた手に掴まれ、僕は飛び上がって跳ねた。しかし掴んだ手は僕を逃がしてはくれず、一気にこみ上げてきた恐怖心に僕は押しつぶされそうになる。

「俺だ俺。そんなにビビるなよ」

暗闇に目を凝らしてみると、そこには下で寝ていたはずの阿形くんが神妙な顔をして立っていた。

「な、なんだ。驚かさないでくれよ」

「はん。俺が何もなくなっただけビクビクしてたクセによ。よくいうぜ」

僕は気になって聞いた。

「……一体いつから見ていたんだい」

「お前が上に上がったときからつけてた。どうにもただ事っぽい雰囲気してなかったからな」

「……」

ただ事つばい雰囲気ではなかったと語る阿形くんの目には、一体僕の挙動はどう見えていたのか心配だった。恥ずかしいわけでもないのに頬をかいてそつぽを向いた。

「で、この部屋に何があるってんだ。あれか、姉ちゃんの部屋か？」

「い、いや、姉ちゃんの部屋はあつちだよ」

僕は姉ちゃんの部屋を指差した。阿形くんは納得したように頷くと、じゃあ、と続ける。

「この部屋は誰の部屋だ？」

消去法なんて使う必要もない。この家には僕と、姉ちゃんと、そして両親がいた。僕には記憶も記録も残っていない、その人の足跡がそこにはあるはずだった。

「父さんか、母さんのだよ」

「……へえ」

それだけ言う和阿形くんは有無を問わずに勝手にドアノブに手をかけ、僕が必死に悩んだものをいとも簡単にこじ開けてしまった。その瞬間、僕はきつく目を瞑った。何か見てはいけないものがあるような気がして、何か触れてはならないようなものがあるような気がして、とにかく恐ろしかった。まるで冬の空気とは違う冷たい風が素肌を刺す。瞼によって遮られた全ての光が恐ろしくて、僕は背を向けた。

「なんだ、これ」

消えてしまいそうな声が聞こえる。ギシ、と床が軋む音が続いて聞こえる。それが何度も続いて、僕は頭を抱えた。

「……何も、ねえじゃねえか」

「……え？」

ふつ、と目を開いた。依然として闇が視界を支配していたが、僕は構わず振り返った。光景は、圧倒的な漆黒の空間にぽつんと立つ阿形くんの姿だった。吸い込まれそうな黒の奥行きに、僕は自然と歩を進めた。

ドアの境界線を越えると、そこには白紙の虚構が広がっていた。

家具は一切なく、絨毯はもちろんのこと、カーテンも無ければ、電灯には電球もはまっていなかった。暗闇に広がった真っ白な空間。頭がどうにかなくなってしまいそんな矛盾。ここには、何も無い。

ここには、なにも、ない。

「そんなはずは、ない」

自分でも声が震えているのが分かった。ガチツと奥歯を噛むと、その音に気付いたのか阿形くんがこちらを見て、表情を歪めた。

「ここに何も無かったら、じゃあここはどこで、なんだったっていいんだ。どうして僕はここを恐れた？ どうしてだれもこの部屋に触れなかった？ ここには何かがあったからだろうか……！」

ありえない。じゃあ僕の両親の軌跡は一体どこに存在する。僕と姉ちゃんと母さんと父さんがいたっていう記録はどこに存在する。僕が、姉ちゃんといった日々の記憶はどこに存在する。

「リョータ。一体ここには、何があった」

「言っただろう！ ここは僕の両親の部屋だ、ならここには――」
僕の、両親が。

「――ここには、てめえと姉ちゃん以外のほかには、何もねえよ」
言葉は遮られた。同時に、僕の思考も遮られた。

なんだって？ 阿形くんが、何を知ってそんな言葉を吐いた。僕はからからに乾ききった瞳を限界まで開いて、阿形くんを射抜くように睨んだ。

「それがリョータ、お前の望んだ楽園の形だったんだろうが。もうボロボロに犯されちまって、どうしようもねえだろうけれどな」

「……なんなのさ。ここは、僕の両親の部屋だろう？ どうして何も無いんだ。父さんと母さんは引越しちゃったっていうのかい？」

酷く落胆したような声が出る。言葉の意味も意図も脆く、阿形くんに届く前に崩れ去ってしまいそうだった。

「……リョータ。大阪に行くんだ。お前の楽園は犯されて、お前はさしずめ楽園を追放されたもんだ。お前は、ここにはいられない」
「君は一体何を知っているんだ。一体誰なんだ」

頭を垂れて、僕はそう聞いた。

「お前は知らないだろうけれどな、俺は本当は」

先を聞くのが恐かった。阿形くんまで、失いたくない。そう願った。

「お前の一番の親友で、共犯者なんだよ」

僕は頭を上げて、彼を見た。哀れむような、哀しむような、強者には似合わない弱弱い瞳で僕を見下ろしていた。

何かに合点がいった。僕はようやく樂園を追放されたことを理解したらしく、自分が知らない土地に放り出されていたことを今更気付いた。周りを見渡した。ここがどこだか分からなかった。ただ、一つだけ分かったことがあった。

「阿形くん、僕は、ようやく思い出すことが出来たみたいだよ……」

なんて、狂った話だ。笑えるほどに、可笑的い。

「言ってみろ、何を思い出したのか」

僕は自然に笑えただろうか。それは分からなかったけれど、目の前で阿形くんが微笑んでくれたから、僕はそれでよしとした。

「僕は、君を知らない」

一瞬驚いたような表情を阿形くんはしたが、すぐに豪快な笑顔に変わった。

「ご名答だな。まったくもってム力つくぜ」

僕の知っている阿形亮介は、どうやら阿形亮介ではなかったらしかった。けれども僕は何も感じなかった。少なくとも、目の前にいるのは阿形亮介だと確信が持てるからだ。

「もう、反対しねえよな」

「ああ、大阪に行こう。どうなるのかは全然分からないけれど、君がそういうなら僕はそうするしかなさそうだ」

「期待してる。きつと何も起きないぜ」

けれども、どうにも、今は笑えなかった。

10、神の存在(1)

昨晚の夜が明け、僕は準備もほどほどに家を出た。持ち物といえ、リュックの中に数日分の着替えと洗面具、そして学生証明書くらいだ。それでも普通のサイズのリュックにはパンパンに収まり、これ以上ものを入れることが出来なかったのも事実だ。本当に軽い旅行に行く気分だった。向こうでは阿形くんの家族が泊めてくれることを了承してくれたらしいし、学生二人で新幹線に乗るというのも新鮮味があった。わくわくはしなかったが、決して心が躍らなかったわけでもなかった。

その新幹線に乗って既に一時間弱の時間が流れようとしていた。昼食を取ってすぐに寝てしまった阿形くんを横に、僕は窓際の席から外を眺めていた。乗り物に乗って外を眺めると、毎回不思議な気分になる。遠近感の法則だと分かっているけど、遠くの景色が流れるのが、前方のほうよりもゆっくりになるのはどうにも空間的な差異を感じずにはいられない。家宅やビルは早く流れていき、遠くの緑は変わらぬまま背景を勤めている。一体何が変わって、何が変わらないのか。段々と分からなくなっていく感覚が、僕は好きだった。

景色を頬杖をつきながら眺め、僕は考える。そう、僕の周りは目まぐるしく変わっていても、決して世界は変わらない。そんな壮大でちっぽけなことを考えて、思わず笑みを漏らした。

「ご名答だ。まったくもってムカつくぜ」

昨晚の阿形くんの答えを思い出した。僕は阿形くんを知らなかった。いや、正確にするならば僕は僕を知っている阿形くんを覚えていないということになる。原因は記憶の錯乱。僕の中にある記憶とやらは、どこかバラバラになってしまったパズルに似ている。そのものがあるのは確かなのに、全体が掴めない。見本はあるのに、作り出すのが難しい。僕はどこからどこまでが『その時』と呼ばれる部分なのか、まったく自信がもてなくなっていた。

そうだった。思えば、御奥さんと出会ったのがいつなのかも曖昧だった。僕は女の子に対して特別な苦手意識も欲も無いが、かといって現状として仲のいい子との出会いを忘れるほど無情な人間になったつもりもない。まずはそのことから順を追って思い出してみることにした。

彼女は僕とは違う学校に通っていて、恐らく偶然あの交差点の角で出会った。

……ダメだ。まず走り出しから僕の記憶は自信を持ってないようだった。僕は一体どうして彼女と知り合えて、どうして毎日のように会話するだけの仲を手に入れたのか。まったく想像も付かない。

ふう、と軽いため息をつく。考えても仕方が無いことだ。

横で大きくいびきをかいて寝ている阿形くんを見る。実に不可思議な感覚だった。こうして誰かと一緒に長時間いるのは、姉ちゃんを除いて初めてかもしれない。

どうして僕はここにいるのだろうか、と少しだけ不安になる。時の流れとやらに身を任せているだけで、僕は何も知らずに浮いている。ここがどこなのかも分からないし、辿り着いた場所で何をすればいいのかも分からない。全部、分からない。それでも、浮いているだけよりはどこかに流されてしまったほうがいい。例えその先が地獄に繋がっていたとしても、大海原の中心で浮いているだけなんて、耐えられるわけ無い。

窓の外の景色に視線を戻す。捉えた景色はすぐに消えてしまう、そんな速さの流れの中に僕はいる。僕がいた場所はどんどん遠ざかり、もうどんなに望んでも、自分では帰って来られない。心臓がドクドクと激しい鼓動を鳴らしていたことに気付く。これは期待なのか、不安なのか、僕にも分からないし、どうしようもなかった。

それからもう一時間ほどの時が流れた。僕らは新大阪の駅で新幹線を下車した。初めて踏み入れる土地に足を踏み鳴らし、背中で見送った新幹線はそんな僕を押してくれたように思えた。駅員に切符を渡し、駅から出て、タクシー乗り場の近くまでやってくる。隣で

阿形くんが大きな欠伸を漏らし、公衆電話で自宅に連絡を取ると言
ってその場を後にした。残された僕は、知らない光景を目の前にし
て、ただただ呆然と立ち尽くしていた。同じ都会でも空気が違う。
道行く人の外見も、立ち並ぶ町並みも、東京と違ったところは大き
く見えないが、街の喧騒からは微かに関西弁が聞こえてきたりして
新鮮だった。雲ひとつない空を仰ぎ、僕は改めて大阪に着てしまっ
たんだと、漠然とその事実を認めた。

数分もしないうちに阿形くんは戻ってきた。顔面には眠気が垣間
見られる。昨晚の酒が抜けきっていないのだろうか。

「親父が車で迎えに来るから、少し待ってろ」

「うん、分かった」

僕は適当なところに移動して、壁に背をかけた。

「それにしても、まだ登校日は終わってないのに、よく許してくれ
たね」

「帰省のことか？」

僕は頷いた。

「そうだな。俺の家は基本的に自由なんだよ。いや、自由とはちと
違うか。親の性格が温和なもんだから、あーだこーだ言われたこと
があんまねえんだよ」

「それにしたって、阿形くんは東京で一人暮らしだろう？ 関西か
ら関東によく行かせてくれたもんだね」

「まあ、姉のほう働いていて三人働きだから、仕送りする金があ
ったんだろう。俺もバイトしてたから許されたもんだ」

姉というワードを聞いて、胸が締め付けられる。口元が歪みそう
になるのを抑えるために、必死に言葉を紡ぎだす。

「お、お姉さんは何歳なんだい？」

「じゅう……十八だったか。今年で十九かもしれない」

ちょうど僕の姉ちゃんと同期くらいだ。そのことに言いよつものな
不安を感じた。

「なんだよ、びびってんのか？」

僕の顔色に気付いたのか、阿形くんが顔を覗き込むように身を屈めてきた。

「安心しろ。お前の姉ちゃんとは全然違うやつだよ。いや、どこと比較たつておかしいやつだから」

苦笑いして阿形くんはそう言った。僕も愛想笑いを返して、安心を装ったが、内心ぐら付いていた。僕だって十九歳前後の姉と呼ばれる女性全てに姉ちゃんの陰を追うわけではない。けれども、時期が時期だった。僕はほとんど関西に姉ちゃんがいるのではないかという希望的観測だけを芯に立てて今行動していると言っても過言ではない。僕は、阿形くんの姉を見て、何かを求めてしまつかもしれないことに恐れを抱いていた。

「まあ夜中に帰ってきて、朝に出て行くから、お前と会うことはないかもしれねえな」

「そ、そうなんだ」

「とは言え何日か同居するんだから、挨拶くらいは強要されるかもな。嫌だつたら別に構わねえが」

「いや、大丈夫だよ」

そう気丈に振舞う自分が、一番ぐらついていた。

僕らの会話はそこで途切れた。僕が相当きつそうに見えたのか、阿形くんは何も言わず携帯電話を開いておもむろに力チ力チと音を立て始めた。僕は携帯電話を持っていない。必要なかつとか持たされなかったとかじゃなくて、単純に持たなかった。実際は、電話越しに姉ちゃんの声を聞くのはあまり好きではないからという理由もあった。加えて、僕には恐らくその嫌がること以外に用途がないだろうと思ったからだ。しかし、こうして手持ち無沙汰になってみると、その便利性に気が付く。掴むものがない僕の手は、ポケットの中で拳を作っていた。せめてもの強がりみたいに思えて、段々と惨めに思えてきていた。

ちらりと阿形くんを一瞥した。ごつごつした手が携帯のキーを打っている。誰かにメールを送っているのか、それとも空虚な文字を

打ち込んでいるのかは、僕の察せるところじゃない。けれども、微動だにしない眼球の黒目が、どこか虚しさを感じさせた。

目の前のタクシー乗り場から、タクシーが客を乗せて出て行った数を数えるのに飽き飽きしていた頃、阿形くんの携帯電話から着信音が鳴った。流行の音楽なのかそうでないのかは分からないが、僕の知らないメロディだった。阿形くんが携帯電話と話しているのを横目に見て、僕は壁から背を離れた。背負ったリュックの重みが、やけに重く感じた。

「移動するぜ」

僕は無言のまま、阿形くんのあとについて行った。

駅から少し出たところにある大きな交差点のところで、黒い軽自動車が駐車していた。阿形くんがそれに向かってずんずん進んで行くので、あれが阿形くんの父親の車だと分かった。横まで来て中を覗いてみると、人当たりの良さそうな男がシートにどっしりと座っていた。味気のない眼鏡をかけていて、目尻が垂れ下がった様がその僕に思わせた。温和という言葉が、実にしっくりくるような人だ。阿形くんがその車の窓をノックで鳴らした。中に入る男はそれに気付いて、窓の開閉スイッチを押してその音を迎え入れた。

「親父、連れてきた」

僕はその時、自己紹介が何かをすべきかに迷った。しどろもどろしながら一歩前に出て、とりあえず頭を下げておく。言すべき言葉も見当たらなかったのも、僕はなんとも気まずい雰囲気を感じていた。

「君は、宗教が何かに入信しとったりする？」

唐突に男がそう聞いてきた。僕は一瞬何のことか分からず、え？と小さく疑問詞を零した。関西弁独特のなまりに、頭が少し遅れてついてきている。

「おい」

横で阿形くんが凄みの入った声で男をにらみつけた。そこに険悪な空気が流れた気がして、僕は急いで答えを用意した。

「え、えつと、無宗教です」

「無宗教。そう、ならええわ」

「はあ……」

「まあ話は家についてからでもええやろ。後ろの席に乗つといて」
「分かりました」

僕は言われた通り、後部座席のドアを開けて中に身を入れた。車の中はよく清潔に保たれていて、若干香る煙草の臭いだけが残念だった。阿形くんは助手席に乗るらしく、僕が乗ったあとのドアを閉めて、前の席に入った。僕は後部座席のどこに座ろうかに悩んだ。真ん中が一番良さそうな気もしたが、バックミラーに写る自分の顔が見たくなかったので、助手席の後ろの位置に座ることにした。

ほどなくして車は発進した。背負っていたリュックを隣において、出来るだけこの空気に馴染めるようにでしゃばらずにいた。しかし、聞こえてくるのはタイヤがアスファルトを削る音のみで、人の会話を聞こえてくるのはタイヤがアスファルトを削る音のみで、人の会話らしきものは駅を出てから数十分はなかった。僕はその間、幾度か前の席を盗み見した。運転している父親は無言のまま、フロントガラスの向こう側に注意を払っている。阿形くんも、会うのは久々だろう父親に向かって、会話の一つも投げずに窓の外をじつと見ている。

このチグハグだらけの空間はなんだろうか。僕がいるせいで、彼らは黙りこんでいるのだろうか。信号機が赤になり、車が止まった時が一番苦しい時間だった。三つに割れてしまった空間が浮き彫りになって、静寂の撫で風が容赦なく吹き付ける。ごくり、と唾を飲み込む音さえタブーに思われる時に、僕は呼吸すら静かに行った。

何か、何か違うことを考えよう。僕は目を閉じて、そのひび割れた時間から目をそらすことにした。

僕がそうする時、考えることは常に同じだ。いつもの手順で僕は姉ちゃんの輪郭を作っていく。夢想する光景の中で、泡が広がった。それは生誕だ。人が広大な母体の海から生まれた様を想像する。その中から手探りに姉ちゃんの姿を探し、魅惑的な肌色を見つけ出す。

最初に見つけ出すのは決まって指だった。そして手の全景が現れ、姉ちゃんの神々しいほどの母性に満ちた肉体が僕に晒される。

ああ、これに触れていいものだろうか。身体の内奥に湧き上がってきた熱を抑えきれない。そっと、壊れものを扱うような手つきで姉ちゃんの繊細な指に触れる。その輪郭を指先でなぞるだけで、僕は言いようのない快感に襲われる。飢えた獣のように僕はそれにかぶりつき、舌先から感じる甘美な感触に感覚を委ねる。果実のような甘さを感じれば、香辛料のような辛さも感じる。次第に僕の吐息は荒くなっていき、段々と物事を考えられなくなってくる。脳裏が真っ白な光に包まれ、痺れに似た快感が走る。このまま、昇天してしまおうだ。

「亮太君」

眉間に妄想が収縮し、一気に消え去った。閉じられていた瞼を開くと、座席の背中が僕の前に莫大な現実を突きつけてきた。そのあまりの誤差に驚いた僕は、慌てて自分を繕った。

「は、はい？」

「どんくらい滞在予定や」

「え、えつと……」

そういえば、阿形くんに言われるがままついてきたのでその辺りのことをまったく決めていなかった。僕は助けを求めるように座席に視線を送った。

「一週間くらい。俺がその頃に帰る」

その願いが届いたのかどうかは知らないが、阿形くんがそう短く答えた。

「ほんまかいな。お前、前もそう言って一ヶ月くらい帰らんかったやろ」

「今回は色々あんだよ」

「色々って何や」

「親父には関係ねえことだろ？ 一週間で帰るっつってんだから、いいじゃねえか」

「まあ……ええけど」

父親のほうが小さくなって、萎縮してしまった。弱い父親だなとは思わなかったが、一家の大黒柱にしては権威が感じられなかった。僕の父親は僕に対して圧倒的な権威を振りかざし、まるで出来損ないを調教するような扱いをしていた。どちらがいかと聞かれれば、僕は阿形くんの父親を選ぶだろう。ただ、だからと言って阿形くんが羨ましいとは思わなかった。僕が阿形くんだったら、きっと同じ事になっていたと思うからだ。

「ごめんな亮太君。うちの亮介がこんなんで困つとるやろ？」

「い、いえ。いつも良くさせてもらってます」

「お世辞も上手いなあ君は。亮介も見習ったらええねん」

気まずい。彼に悪意がないのはもちろんだけれど、僕が阿形くんよりも良い人間だなんておこがましいにもほどがある。僕は必死に笑いを繕う。出来るだけどちらにも悪印象を与えないように、全力で。

「学校の成績とかはどうなんや。去年より上がつとるんか？」

「知らねえよ」

「はあ、まあ言いとうないんやつたら別にええけど」

阿形くんの頑なな態度に気を悪くしたのか、若干皮肉を込めたようなイントネーションで彼はフロントガラスのほうに意識を戻した。険悪な雰囲気は依然として存在していたけれど、静寂の風が止んだだけ僕は救われた。常に愛想笑いを浮かべているのも疲れたが、彼の気さくな性格が居心地だけを良くした。その間、終始阿形くんは黙ったままで、僕はそんな彼に何度も視線を移していた。

一体阿形くんは、僕に何を与えるためにここに連れてきたのだろうか。このツギハギの家族間に置かれて、僕は何を得ようとしているのか。僕は家についてしまうのが不安で溜まらなかった。何かをするために来たはずなのに、何も起きずに一週間が過ぎることを、心の底で願った。

僕の大阪生活の初日は、こんなことを思いながら始まった。

10、神の存在(1)(後書き)

遅れて申し訳ないです。次からは早めに投稿出来るように頑張ります。

11、神の存在(2)

夕飯は阿形くんの父親が振舞ってくれたが、正直味なんて覚えていなかった。それもそのはずだ。昼間車内で感じた気まずさは夕餉の時間まで延ばされ、用意されたカレーは米に水をかけたような味にしか感じれないほどに、その尖りきった空気に神経を払わなければならなかったからだ。

阿形くんからの話題に出た姉妹はまだ外出中らしく、食事の場には姿を現さなかった。母親のほうは働きに出ているらしく、こちらも帰宅していない。正直、僕ら以外に誰かがいれば、この険悪な雰囲気も打開できると思っていたが、僕に味方はいないようだった。

僕は今、今晚から寢床とする阿形くんの部屋に通されている。意外に広い構造をしていて、ベッドではなく布団で寝ているせいなのか、僕の部屋と間取りは変わらないはずなのに数段広く感じる。部屋が玄関正面の階段を上ったところにある点も僕の部屋と同じだ。強いて違ふところを述べるなら、漫画やCDケースが足の踏み場もないくらい散乱しているところだ。男の一人暮らしだってここまで酷くならないだろう。家主がいる家で、この有様はどうなんだと思っただ。

阿形くんは適当にケースや漫画を蹴っ飛ばして端に寄せ、家にある押入れから持ってきたという寝袋のスペースを確保する。現物は初めて見たが、意外にも厚くて寝心地は悪く無さそうだった。

「自由人だつて言っただろ？ それは同時に、あんまりこういう面倒は見えてくれねえってことだ」

僕の視線に気付いたのか、阿形くんがそう漏らした。

「まあ、勝手に片付けられるよりは分かり易くて良いんだけどな。去年の夏に来た時、こんなに散らかしたっけなあ……」

落ちているCDを何枚か拾って、端に物置と化した机の上に適当に積み上げる。タワーか何かを作っているのかと思うほどだ。既に

その高さは目線辺りまで来ていた。ぐらついたら土台に僕はそわそわしながら、阿形くんの片づけを見守った。

「何か聴くか？ ポップスとヒップホップくらいしかねえけど。お前なんかクラシックとか聴きそうだからなあ」

「いや大丈夫だよ。そもそも音楽にあまり興味を持ったことが無いんだ」

「はあ？ 本気かよ。人生損してるぜ」

「何かに浸るなら、音より文字のほうが良いんだ僕は。どちらかというと、本が欲しいかもしれない」

とは言ったものの、部屋を見渡して、僕の暇つぶしになりそうなその手の類の「本」は見当たらない。阿形くんがその中の一冊を拾って、僕に差し出して言った。

「読むか？」

「冗談だろう？」

「なんだよ。少年誌はお気に召さないってか。流石お堅いリョータ君なこと。親父の部屋から西洋哲学のぶっとい本でも持ってきてやるつか」

「流石にそこまでは僕も……」

と、遠慮はしたものの、ちよつとだけ読んでみたい気もした。

散らばっていた本はすべて漫画で、ほとんどが少年誌らしいバトルものに見えた。面の濃いヤング系のもも混じっていたが、そっちのほうに僕はもつと読みたくない。読まず嫌いだけれど、視覚をやけにリアルで隆々としたものに侵食されるのは嫌だった。どちらかといえば、まだ少女漫画のほうを読める。あちらはあちらで嫌気が差すが、無駄に現実をかつこつけたものよりかは、想像の産物のほうが僕は好きだった。

「まあ、さつさと寝ても良いぜ。俺は……まだ十時だし、適当にそこの読み漁ってから寝るわ」

「僕は……どうしようかな」

阿形くん提案を求めたつもりだったけれど、既に手元にあった

漫画を取って、読み始めていた。もちろん返答は帰って来ず、僕は手持ち無沙汰になった。

なにかないものかと部屋を見渡していると、入り口ドアの正面にある窓の奥に、ベランダらしきものが見えた。闇夜に隠れて分かり難いが、ガラスの向こう側にかすかな灰色を見た。手すりの色だろうか。ぼけていて良く分からない。

「阿形くん、窓の外はベランダなの？」

「ああ、出たいなら出ていいぞ。寒いから窓は閉めてくれよ」

僕は窓に手を掛けて開けた。冬の空気がステンレスを冷やしていて、窓ガラスは少し結露していた。外に出ると、冷え切った風が肌を撫で上げた。僕はそれにぶるりと震え、思わず身を肩で抱いた。景色に目をやると、窮屈な世界が視界を埋めた。隙間もないほど詰まった四角い建設物がぎゅうぎゅうと押し合っているように見える。家宅の二階から街を見下ろしたことは、意外にも経験がなかった。こうしてしてみると、存外綺麗なものだった。塗りつぶされたような黒色に煌々と灯る明かりが良い感じにグレイエーションを利かせている。夜の乾いた空気の臭いと共に、その灯火の香りまで伝わってきた。たった十メートルにも満たない俯瞰の光景で、僕は世界の広さを思い知った。

「……馬鹿らしい」

悦に入っていた思考を、そう呟いて蹴散らした。すつ、と目を凝らしてみれば、ただの下らない夜景が広がった。面白くもなんともない。どこにいたって見られるものだ。僕は凍えた手を吐息で温めながら、手すりに肘を掛けた。服越しにも冷たさが伝わり、僕はそれをやせ我慢した。

「姉ちゃん……」

永遠と続いていそうな路上に目を走らせた。この道のどこかに、姉ちゃんはいるのだろうか。この大阪という地に来て、少しはその距離が縮まったのだろうか。不安に潰れそうな胸の奥を抱えて、僕は白い息を吐き出した。

しばらくそうして考えに浸っていると、突然家の中が騒がしくなった。閉め切った窓越しから、ドタドタと物音が聞こえてくる。何事かと思つて戻ろうとしたけれど、僕が行つてもどうしようもないことに気付いてやめることにした。家族の誰かが帰つてきたのかもしれない。わざわざ挨拶に行くのも億劫で、もしもそうならば阿形くんと呼ばれるのを待つことにした。

しかし、そうして待っていても、いつになつても声はかからなかった。こつそりと窓の中を覗いてみると、阿形くんは依然として漫画を読んでいる。おかしいな、と思いつつも、僕は元の位置に戻った。

「あれ、こんなところで何しとるん？」

「えっ？」

突然声がして、僕は肩を跳ねた。反射神経で右側に首を向けると、同じくベランダに一人の女の子が出てきていた。

「あ、もしかしてキミがリョータ君？」

「え、あ、そ、そうですけど……」

あまりのパニックで、どう考えても同年代の子に敬語になつてしまった。

「ああ、なんか聞いていた通りやな。イケメンとは思つとつてなかったけど、ふうん、これはこれでなかなかやね」

「えっと、何がですか？」

「なんで敬語やねん。リョータ君高一やる確か。ならあたしと一緒にそう気さくに彼女は僕に笑いかけた。良く見ると、暗闇の中なのに良く映える綺麗な肌をしていた。ただ、全体を今一度見てみると髪は染髪で毛先がボロボロになっているし、服装は学校指定の青いジャージを着ている。着け爪らしきものもしていて、ジャラジャラとした印象が残る。目尻の下の辺りに黒いほくろがあり、笑つた姿はその部分が特に印象的だった。

スリッパの音を鳴らして、彼女が僕に一步半ほど近づいた。

「あたし、兄貴の妹……えっと、亮介兄ちゃんまひるの妹の真陽留まひるや。よ

ろしゅう」

「あ、うん」

どう声をかけていいかわからず、僕はつまらない相槌で返した。
「まあ兄貴って言うとっても、数ヶ月誕生日がちゃうだけやけどな」
「そうなんだ」

「兄貴は東京のほうでよおやつとった？ アイツアホやからクラスとか全然付いていけなかったやろ？」

「い、いや、阿形くんは友達も多いし、よくやってるんじゃないかな」

「へえ、そうなんや。ちゅうか、なんで君付けなん？ 呼び捨てでええやん」

「えっと、なんか癖だから」

「はあ、真面目君なんやね。兄貴からたまに話聞いとったけど、ほんとまんまやね」

良く喋る子だ。そして、何が面白いのか知らないけれど、とにかく笑顔を崩さない。僕はそんな表情に顔向け出来るほど、綺麗な人間である自信がない。顔をそらすことに必死で、彼女の話なんか少しも耳に入らなかった。

そして何より、彼女が阿形くんの恋愛対象だったあの子であることに、僕は居づらさを感じる。逃げ出したい。素直にそう思う。

「どんくらしいの間ここにいるん？ 兄貴と一緒に学校ふけてきたんやろ？ 真面目君がそんなことしてええん？」

「いや、なんていうんだろ。僕はここに……」

ここに、何をしに来たのだろうか。目的なんて一つしかないのに、言葉に出来なかった。

「えっと、とにかく一週間くらいって阿形くんは言ってた」

「結構短いんやね。前なんか一ヶ月以上サボってたから、またそんくらいかと思ったわ」

彼女はそう言うと、ジャージのポケットから箱状の何かを取り出した。テープを剥がして開け、その中から棒状のものを一本取り出

す。

「吸う？」

それを向けて、僕に言った。見覚えがあるそれは、煙草だった。僕はその時露骨に嫌な顔をしたと思う。僕は依存症のあるものが兎角嫌いだ。ニコチン、タールがどんなものかは知らないけれど、そんなものに依存する奴らは馬鹿だと心の中では罵っているほどに嫌いだ。

「遠慮するよ。というか、えっと、君は未成年だろう？　まずいんじゃないかな」

「別に死にはせんよ？　あと、名前は真陽留でええよ」

「そりゃ死にはしないけれど……そういう問題じゃないと思うよ。

えっと、真陽留、さん」

ぷつ、と真陽留さんが吹き出した。僕も顔が熱くなるのを感じた。「ま、ええけどねそれでも」

もう片方のポケットからライターを出し、ついに火をつけてしまった。一体どういう風に煙草は吸うものなのか分からない。真陽留さんは僕の吐く白い息とは違う煙を口から天に向かって吹きつけた。「副流煙とか気にするタイプ？」

「好んで吸う馬鹿はいないと思うけれど」

「ふうん、大分嫌いみたいやね」

言つと、手すりに煙草を擦り付けて火を消し、吸殻をその向こう側に放り投げた。ゆるやかな速度でそれは落ちていき、路上で誰のものとも知らぬゴミになった。僕はきつと、明日それを踏みつけていくんだろつなと、漠然と思った。

「ほんで、ここで何してたん？　結構寒いでここ」

「なんとなくだよ。特に理由は無い」

「なんやねん、面白くないな。あれか、ミステリアスタイプっちゅうやつ？」

「そんな大層な人間じゃないよ僕は。真陽留さんこそ、ここで何をしようとしてたんだい？」

段々と普通に喋れていることに安堵しつつ、僕はそう訊いた。

真陽留さんは天を仰ぎ見た。パサついた髪の毛が風に乗り、細かな線となって空間に靡く。街灯に歪に照らされた茶髪が煌いて、ああ、これは街の明かりと同じようなものなんだと思った。まるで作られたもの。決して、夜闇に似合う美しさは感じない。

「お星様が見たいうちゅうたらロマンチックやけど、あたしのはもつと子どもやな」

「へえ、何？」

「天井の無いところに行きたかっただけやねん」

その台詞に、意識が遠のいた。僕は彼女に視点を定めたまま、瞬き一つしたくなくなった。

「恥ずかしいねんけど、神様にお祈りしてんねんあたし。だから、一番届きそうで、近い場所がここ。空と繋がってる、ここがええと思ってる」

僕は空を仰いだ。星ひとつ見えない夜空には、暗黒に染まった雲で満ち欠けする黄色い月が浮いている。いつだったか、僕はその場所に手を伸ばせるのだと信じて止まなかった時期があった。けれども今より若い頃、唐突にそれが無理だと気付いた。あまりに空想的な考えは、どこからともなくやってきた現実には打ち砕かれて、僕は大人になったのだと、柄にも無く気取っていた。

彼女はこの空のどこかに、神という存在を見ているのだろうか。僕はそれを探してみても、数秒で無駄なことに気付いた。けれどもどうしてか、あの頃のように、自分を気取ってみることなんて出来なかった。この大空を否定するには、僕はあまりに小さな存在だった。そして、少なくとも横にいる彼女は僕より大きくて、とてもじゃないけれど反論する気にはなれなかった。

「あつはは、アホやなー。初対面の人に何言つとるんやろあたし」
「恥ずかしそうに顔を赤らめてそう言う彼女を、僕は今度こそ、顔を逸らさずに見ることが出来た。」

「馬鹿になんて出来ないよ。きつと、僕も似たようなものだ」

「さっきなんとなくって言ってたやん」

「気付いたんだ。きつと僕も、この空の下で繋がっていることを信じているから、ここに来たのかもしれない」

「なんや、随分恥ずかしい台詞言いよるなあ。カノジヨでも探しに来たん？」

にやにやして言う真陽留さん。でも、僕はいたって真面目に返す。
「僕は、姉ちゃんを探しに来たんだ」

そうだ。僕の中に燦っていた曖昧な気持ちが明確になった。阿形くんがどういふつもりで連れてきたかは知らない。でも、僕は探さなくたってしまった姉ちゃんの手がかりを探す。阿形くんの行動が無為だとは思わない。手がかりは、きつとある。僕は心の底でどこか、自分が強くなったような気がした。迷いなんて簡単に断ち切れるんだと、自信がついた気がした。

ふと真陽留さんのほうを見ると、彼女は笑っていないかった。

まるで能面を被ったような無表情で、僕をじっと見ていた。その視線は、僕が今さっきまで彼女に送っていたものに似ている。凝視だ。彼女は、何かを考えている。

そんな中で、真陽留さんはこう言った。

「——姉ちゃんなんて、いらんやろ？」

頭が鈍器で殴られたような衝撃と共に、何かが割れる音がした。

1 2 , 神の存在 (3) (前書き)

1 1 部からサブタイトル変更しました。

12、神の存在(3)

「なんだって？」

夜闇がざわつと蠢いた気がした。腹の底から、自分でも信じられないくらい低い声が響いた。その声に怯えたように街の明かりが揺らめいた。彼女がどんなつもりで言ったのかは知らない。でも僕には到底許しがたい発言だった。胃袋の中身が何か良くないもので埋め尽くされ、無理矢理かき回されているように気持ち悪い。思わず服の上から腹を押さえてしまうほどだ。

「姉妹なんておったって、得することなんてなんもあらへんかったよ」

そんな僕なんて何処吹く風で、彼女は話を進める。

「中学どころか高校まで制服はお下がりがやし、しょっちゅう姉ちゃんとは比べられたりしとった。リョータ君もそんな経験あるやる？」

僕は黙る。問いに答えるならばもちろんある。僕は姉ちゃんの背中を見て育ってきた。姉ちゃんの背中を追えと言われて育てられてきた。けれども、僕にとってはそれは誇りだ。決して損得勘定で語られるべきことじゃない。

「あたしはあたし。真陽留っちゅう一人の人間やのに、いつつも深夜^よちゃんは自慢のお姉ちゃんねえ、とか言われとって、腹立ってばっかや」

深夜というのは姉の名前だろうか。真陽留さんの表情からは、明らかに嫌悪を感じ取れる。瞼は知らない間にきりつと細くなって、遠くの何かを見ていた。

「……僕はそんなことはなかった」

「そうなん？」

「そうだ。姉ちゃんは自慢だった。自慢なんかしたくなかったくらいに、自慢の姉だよ」

「ふうん。何や、リョータ君で、シスコンの気でもあるように見え

るで？」

悪戯っぽく笑いながら、真陽留さんはそう言った。

不快感が積った。先ほどの発言といい、噴火しそうな感情の山を抑えるのに兎に角必死になった。怒るな、頭を冷やせ、彼女は何も知らないんだ、誰のせいでもない。一つ一つ言葉を暗示していき、煮えたぎる脳内に文字を埋め込んで無理矢理冷ましていく。

「シスコンって呼ばれるのは、嫌いなんだ僕」

「シスコンとちゃうん？」

「違う。そんな低俗なものと比べるなよ」

思わず口が悪くなる。すぐに気付いて訂正しようかと思ったけれど、真陽留さんは御奥さんと違って俯きも驚きせず、弱らなかつたので、そのまま貫き通した。ただ、居心地だけが悪くなって、僕のほうに俯いてしまった。

「何や、真面目君かと思うたら意外とキレ症やね。まあでもそつちのほうがええよ、人間ストレス溜めたらあかんってオヤジも言うつつたし」

「う、ごめん」

僕のほうが怒っていたはずなのに、何故か頭を下げてしまった。なんだろうこの子は、遠慮なんて微塵も無ければ、人の心に土足で踏み入ってきそうなのに、不思議と不快感がない。なんだか負けた気分だ。真陽留さんはきつと、子どもの面倒を見るのが得意だろうなとも思った。

「見つかると思えな」

肩に手が置かれる。身が震えそうになるのを感じて、僕は必死に耐えた。この手の優しさは、得意じゃない。目線を伏せたまま、僕は小さく頷いた。

「ほな、あたしと一緒に星様に祈っとく？」

「御利益あるの？」

「さあ？ あるって信じとつたら、あるんとかやうかな。無いと決め付けるよりはましやろ」

「そうだね。うん、そうだ」

神は信じる性質じゃないけれど、今だけは荒唐無稽な話に付き合っても良いかな、と思えた。

いつの間にか沸騰していた気持ちは泡立つのを止め、すっかり緩やかな水面を揺らめかせていた。真陽留さんが再び空を仰いだものだから、僕も一緒になって夜空を見上げてみた。さっき見た空とは、若干違う色をしていた気がした。

僕は手馴れない動きで手を組んで、祈りのポーズを取った。様になっているだろうか。そう真陽留さんに訊こうとしたけれど、真陽留さんは静かに瞳を閉じていて、声をかけられるような状態じゃなかった。だから僕は、方法も知らないし、どう願えばいいのかも分からないまま、神という存在に少しだけ縋ってみた。

■ ■ ■

朝から人の喧騒で起こされたのは今日が初めてだ。寝袋から出ると、阿形くんは既に漫画を手にとっていた。昨晚僕のほうが早く寝たはずだ。まさか徹夜したわけじゃないだろうな、と思いながら眠い目を擦った。

「よう、けたたましい朝に乾杯」

「……乾杯」

寝ぼけているのか、変なノリで返した。

「姉が帰ってきた。ご立派な大人らしく、朝帰りだとき。挨拶しに行くか？」

「この状態で？ 冗談だろう？」

そりゃそうだ、と阿形くんは笑って見せた。

下の階からは、罵声に怒声、耳を劈く破壊音も聞こえる。一つが男の声で、一つは女の声だ。男の音量でほとんど消されてしまっているように思えるが、どうしてか女の声のほうに凄みがあった。喧嘩の内容までは聞き取れないが、少なくとも間に入って自己紹介が出来る穏かさは無かった。

「一人は深夜さん？」

「深夜？　なんだリョータ、あいつと会ったのか？」

阿形くんは本を閉じて、僕に向き直る。

「いや、昨日真陽留さんに聞いた」

「ああ、ベランダで話してたって言うてたな」

昨晚のことは秘密にしておく必要も感じなかったから、すべて阿形くんに話している。その時、阿形くんは然程興味もなさそうに「そうか」と返したので、僕もその判断が間違っていなかったとほっとした。阿形くんと真陽留さんには変な因縁がありそうで、少しだけ話すのは恐かったからだ。

「そう、深夜だ。オヤジとは真っ向から考え方が合わないらしくてな、帰ってくると毎朝あんな感じだ。聞いてるこっちが参るってんだ」

確かに、近所の騒音よりも耳に近い分、覚醒状態に入っていない脳内を無理矢理叩かれた感じだ。酔ったことなんてないのに、頭がそんな感じにガンガンする。

「さしずめ、朝帰りのことで怒られてんだろ。馬鹿らしい」

「阿形くんは深夜さんの肩を持つんだ？」

「肩を持つ？　それこそ馬鹿を言うんじゃないよ。俺はあいつの顔を見るたびに反吐を撒き散らしちまうくらい好きじゃねえ」

驚くくらいに憎悪の念を明らかにして、そう吐き捨てた。

「ゲロだゲロ。くそったれが」

「朝っぱらから汚いこと連呼しないでよ……」

「ところで朝飯はどうする？　あの分だと到底終わりそうにないぜ」
「阿形くん、狙って言うてるでしょ」

「当たり前だろ」

かははっ、とわざとらしい豪快な笑い声を飛ばした。

「昼まで寝てれば良い。どうせ今日は出かける予定もねえし」

「予定、無いの？」

今日は土曜日だ。ほとんどの家庭はまだ寝静まっていて、緩やかな朝の時間を過ごしていることだろう。土曜日と言えば、普通の家庭では休日。大阪まで来たものだから、てっきりどこかに出かけるのかと思っていた。

「出かけたければ出かけても良いぜ。俺は今日は一日中家にいる」

「僕一人で移動してもなあ……」

「真陽留を誘えばいいじゃねえか。どうせ暇だろあいつ」

「えっ、いや、昨日会ったばかりの人とは流石に……」

言いつつ、昨日のことを思い出す。僕は彼女が嫌いなわけではないけれど、女性の押しに強くない僕は多少の苦手意識はある。彼女に街案内を頼めばそれは楽しいだろうけれど、同時に酷く疲れそう。それに、僕はそんなことをしに来たわけじゃない。

「隣の部屋で寝てるだろうから声かけてこいよ」

「この騒がしさの中で寝てられるのかい？」

まだ収まらない騒ぎを耳にしながら、しかめっ面になって言った。

「図太いんだろ。繊細な俺らには無理な話だ」

「どちらにせよ、流石に悪いよ。僕も今日はおとなしくしていることにする」

「そうかい」

僕に興味を失ったのか、再び漫画を手にとって読み始める。そんなに面白いのだろうか。気になって後ろからタイトルを見てみたが、それこそ興味も湧かない三流作家らしいタイトルの本だった。なんだかげんなりして、僕も喧騒を背中にして座り込んだ。尻の下には寝袋を敷く。顔を上げると、ちょうど目線の先にベランダがあった。朝の穏かな陽光がガラス窓を突き抜けて、淡い照明になっている。昨日は目視出来なかった銀色の手すりも陽の光を浴びて眩しく輝い

ている。鳥の声は生憎聞こえないが、視界は爽やかな早朝の空気に満たされていた。

そうしていると、不意に尿意を催した。扉越しに意識で外を探ってみると、どうやら親子喧嘩は収まっているようだ。変にうとうとしていたせいか、怒声も気になつていなかったようだ。阿形くんを見ると、まだ漫画に熱中している。便所くらいは探せばすぐにあるだろうと思い、一声かけてから部屋の扉に手をかけた。

しかし、僕の手は空を切った。扉が向こう側から開けられたからだ。掴むものが無くなった手は空中を彷徨い、僕はそれを戻してから視線を上げた。

「あ……」

言葉を失った。飛び込んできた光景が喉に詰まり、思考を埋め、心臓の鼓動を早くした。

「あら、初めまして、よね」

目の前に女の子が立っていた。女の子、ではない。れっきとした社会人女性だ。スーツを着込んで、足は黒いストッキングに包まれている。薄くブラウンに染められた髪がセミロングの長さで纏められている。どこもかしこも、違う。なのに僕は思った。

姉ちゃんに、似ている。

「亮介の友達ね？」

「あ、はい」

「私は阿形深夜。『しんや』と書いて『みよ』と読むわ」

「ぼ、僕は……」

上手く言葉が紡げない。視線がその姿から外せない。思考が上手く定まらない。何もかもが完遂されなくて、もどかしい。

「聞いてるわ。亮太君ね。初めまして」

「はじめ、まして……」

「今朝はうるさかったでしょう。ごめんなさいね、お父さんとは良く喧嘩になっちゃうから、きつと泊まってる間は良くあると思うから、先に謝っておくわ」

昨晚の真陽留さんとは全然違う、大人っぽい口調に僕はついていけない。そしてその顔面に張り付いた笑顔に僕は震える。どこにいてもやっていけそうな立派な仮面。まるでどうでも良さそうな社交辞令だ。僕は漠然と、彼女との歳の差を感じ取った。

「亮介、帰ってたなら一言くらい言いなさいよ」

「ああ、そうだな。ただいま」

邪魔な野良犬をしつしと追い払うような、投げやりな返事。しかし、深夜さんも文句も言わずに「ええ」と、負けないくらい淡泊に返した。

仲の良い姉弟には見えない。昨日のギスギスとした親子間にいた時の感覚を思い出した。明らかに噛合っていない人と人との歯車がギチギチと嫌な音を立てている。明らかに場違い。ここが大阪でなければ、今すぐにでも帰りたい気分には駆られる。どうしてこんなにもこの場所はバラバラなんだろう。これが、家族なのだろうか。

頭が痛い。少なくとも姉しかいない僕には理解しがたい話だ。父親と母親と過ごした記憶は薄く、僕の中では常に姉ちゃんが中心にあつて、それ以外をほとんど排してきたからだ。もしかしたら、阿形くんの家族も僕と同様なのかもしれない。

「亮太君、大阪はどう？」

「え、あ、えつと」

威圧されているわけでもないのに萎縮して、上手くしゃべれない。「近くを案内してあげましょうか？」

どくん、と心臓が鳴った。それは嫌だ。今こうしている間でさえ、僕は逃げ出したいというのに。

「待てよ深夜。なんででめえが出てくる」

僕の考えを汲み取ってくれたのか、阿形くんが怒気を含んだ声でそう言った。

「どうして出てきちゃいけないの。あなたがそうして漫画ばかり読んで、友達を構ってないから私が街でも案内しようかって思ったのに」

「てめえには関係ねえことだろ？」

「……怒ったわね、亮介」

ぞわりと鳥肌が立った。深夜さんの、まるでゲームの敗者を見下して晒うような小さくて、酷く気分の悪い笑みが阿形くんに向けられた。

「あの人が今の亮介を見たらどう言うんでしょうね。サタンが宿った、とも言うんでしょうかね」

「今のてめえを見たらあいつはどう言うんだろ。きっと下らない、の一言で切り捨てるぜ」

分からない。僕には彼らが何の話をしているのかが分からない。けれども、感じた。噛合わない歯車は、決して違うものではなかった。バラバラに動いていた各々は、やはり最初は噛み合わさっていたのかもしれない。

そんな、どうしようもないことを考えることで、僕はこのやりきれない感情を隠そうとする。

「出て行けよ」

「そうさせてもらうわ。ごめんなさいね亮太君、また機会があったら案内してあげるわ」

深夜さんは、最後にまた能面の笑みを浮かべて扉の向こうに消えて行った。

尿意が失せてしまった僕は、ただそこに立ち尽くしていた。阿形くんは漫画に目を戻して、何事もなかったかのように読書が続いている。扉を見た。規則正しく走っている木目に思わず眩暈がした。透視がしたいわけでもないのに、僕はずっと目を凝らしてその奥を見ようとした。もしかしたら深夜さんがいるかもしれない、なんて恐怖に怯えていた。

サタンというものがどんなものかは知らない。けれども、その悪魔的な響きから、僕は深夜さんの笑みを思い浮かべてしまった。

13、神の存在(4)

一日が終わる。この日は一步も外には出ず、太陽が家宅の屋根の向こう側に消えていく様も、それから街明かりが滔々と灯っていく様も、この部屋で見届けた。阿形くんは終始一貫して漫画から目を離さなかった。僕はその横で目を瞑って暇という圧倒的な恐怖と戦っていた。結局一日何もしなかった。このことに僕は言いようのない怖さを感じる。阿形くんが意図して僕の焦燥感を煽っているのか、そうでないのかは分からない。けれども、この生殺しの状況に僕は一日目にして狂ってしまいそうだ。

夕飯は阿形くんの粹な計らいによって部屋で取ることになった。いや、彼が単純に深夜さんや真陽留さんたちと食事を取りたくなかっただけだろうが、僕もあの険悪な空気の中で食事をするのは御免被りたかったので助かったと言っている。しかしその代償として、食事はインスタントラーメンになった。僕のは塩味で、阿形くんのはしょうゆ味だ。美味しかったとは言えないが、不味くはなかった。八分ほど埋まったお腹をさすりながら、僕はなんとなく窓の外に視線を流した。昨日と同じように、塗りつぶしたような黒の空間が広がっている。その中に点々と灯る街灯の明かりが奇妙な斑目模様を作っていた。

「ねえ阿形くん、今日もベランダに出ていいかな？」

「構わねえぜ。窓はきっちり閉めるよ、寒いから」

僕はそれに頷いて、窓に手をかけた。

ベランダに出ると、凍えた風が肌を容赦なく吹き付けた。何か羽織るものはないかと部屋を振り返ったが、漫画とCDが散乱しているだけの部屋にそんなものがあるとは思えず、震える肩を抱いて外気に身をさらすことにした。

昨日とまったく変わらない光景。僕はそれ見て、また怖くなる。今日と昨日で何が変わったのだろうか。視界に写るものは何も変わ

らなかったし、姉ちゃんに関すること何もなかった。強いて言うならば悪魔のような女性と出会っただけだ。

何も、変わってなんていない。それとも、一日やそこらで変化を求めている僕が傲慢だとも言うのだろうか。いや、そうかもしれない。阿形くんだって一週間の時期をかけて何かをするらしいし、僕もそれくらいの余裕を持ったほうがいいのだろうか。そう考えると今日の無意味な時間の過ごし方も許せそうな気がした。

今日は真陽留さんは来ないのだろうか。そんな淡い思いを持ちながら、ベランダが繋がっている隣の部屋の窓を見る。昨晩はあそこから出てきたのだろう。もしかしたら過去、阿形くんはここで真陽留さんと会って話していたのかもしれない。今そんな場に僕がいると考えたら、なんだか申し訳なくなった。

しかし、何分寒気に肌を晒せど真陽留さんは現れない。昨日の出来事は単なる気まぐれだったのだろうか。思えば仲が良くなっただけでもない相手に、それも約束も取り付けていないのに待っているのは馬鹿らしい。彼女に何かある種の期待のようなものでも抱いているとでもいうのだろうか。昨晩のちょっとした出来事だけで。

思わず乾いた笑いが漏れてしまった。自分自身を嘲笑う声だ。もうわけが分からない。一体僕は何がしたいんだろうか。一寸先さえ見えない闇の中を暗中模索するわけでもないのに、しっかりと地道しるべも目標もあって進んでいるはずなのに、いつまでも同じ位置から動けない自分に腹さえ立つてくる。それとも、この闇夜が僕を惑わしているとも言うのか。僕の進行を防ごうとする質量も無ければ、人間がひとつボタンを押せば容易に消えてしまうような弱い力ちか持っていないというのに、僕はそれを前にして膝を抱えて立ち止まっているのか。

そうして自分を卑下するように言葉を並べることには何の意味があるのかも分からずに、僕は寒空の下で膝を抱え込んでうめき声を漏らした。

「人にそういう不安があるのは、どうしてだと思う？」

突如、僕の頭の上から声がした。勢いよく振り返ると、そこには暗闇に漆黒の髪を溶かした深夜さんの姿があった。その向こう側ではちょうど月が雲に隠れたところだった。

「男の子なんだから泣くな、なんて酷なことは言わないわ。けれども、そうして泣いてしまった理由を有耶無耶にして、解決したつもりで次に進もうとする人は嫌い。亮太君もそう思わない？」

僕は泣いてなんかいない、そう言おうとすると、背中に柔らかい感触が伝った。後ろから深夜さんが腕を回してきた。肌の密着度が増し、冷たくなっていた身体がもどかしいくらいに仄かな温かみに包まれる。僕は驚いて声が出せなくなった。風呂上りなのか、シャンプーや石鹸の香りが風に乗って鼻腔をつく。細い髪の毛が頬の位置まで来て、僕をくすぐる。

「どうしたの？」

囁くような響きに、背筋に寒気が走った。ペルソナで塗り固められた問い。一体僕に誰が話しかけた。横を向いてそれを確認すると、女性の綺麗な横顔が入ってきた。

「どうしたも……ないです。ただ風に当たってただけです」

「嘘。とても寂しそうな背中をしていたわ」

「風が冷たいから、身を丸めていただけですよ」

「今は暖かい？」

「……」

肯定してしまうのは悔しかったから、答えなかった。けれども深夜さんはすべてを理解したように深く頷いて、益々僕の方に顔を近づめてきた。

「私ね、カウンセラーの資格を取ろうとしているの。だからもしかしたら亮太君の力になれるかもしれない。話せない？」

「話せることなんて無いですよ。本当に、ただ涼みに来ただけです」

「それはベランダに、でしょう。大阪に来た理由は何？」

あくまで声調は変わらず安心感を与えてくる優しいものだ。しかし、カウンセラーという職業に対して僕は良い印象を持っていない。

人の感情を分かったように分析して、僕らの機敏で繊細なものを言葉にしてしまう。それも決定的外れじゃないから悪質だ。僕は否応無しに答えたくなくなった。

「私ね、一度だけ東京に行ったことがあるのよ」

突然彼女はそんな話を始めた。その口が動く顔は、まだ僕の肩の上に置かれたままだ。

「亮介が東京にいるから、訪問ついでに旅行につてね。大阪も人数が多い都会だけれど、東京はもっと凄かったわ。駅は混雑していて身動きが取りにくいし、ファミリーレストランは行列作って待っている人がいた。新鮮な光景だった」

僕は地元からあまり出たことが無い。家族旅行になんてほとんど行かなかったし、個人でどこかに遊びに行くほど交流的な人生を送ってこなかった。一人旅なんて通なことも出来なかった。だから、深夜さんの言う感覚は漠然としか捉えられない。

「どの人も忙しそうに動き回っていた。街中を疾走するスーツの女の人もいた。ティッシュ配りなんて嫌っていうほどいたわね。でもそのティッシュを貰ってくれる人はあんまりいなかった。どうしてかしらね？」

「知らないじゃないですか。そんな使うわけじゃないですし」

「でもあつて不便なものじゃないでしょう？　かさ張るわけじゃないし」

「それは……まあ」

要領を得ない質問に生返事をする。

「もしかしたら使う機会があるかもしれないのに、持って行かない。それで結果、やっぱりあつたほうが良かった、なんてことは良くあると思わない？」

「でも使わないことのほうが多い」

例えば僕は学校に無駄に必要なものを持っていくけれど、それが利用されたことなんてほとんどない。体育の時間が無いのに運動靴を持って行ったり、現代文の授業は無いけれど国語辞書を持っ

ていたり。

「じゃあ、ティッシュ配りはいらんのかしらね」

「随分と極端な話になりましたね」

「だって、そう言つて貰わない人が多いんじゃない」「必要とする人がいるかもしれない限りは、いるんじゃないんですか」

深夜さんは黙った。僕には一度も視線を向けないまま、肩に顔を埋めてじつとしている。心なしか、僕を抱く腕の力が強まった気がした。一層身体が押し付けられて、僕は顔に血が上るのを感じた。「『あつてもいい』つていう認識が、人の世の中には多いと思わない？」

声色が変わった。僕は言葉を返さず、次の言葉を待った。

「亮太君は言つたわ。ティッシュはいらんいつて。使う機会なんてめつたにないつて。でもその一方で、もしかしたら使う人がいるかもしれない。だから必要だと。片方では『いらん』と主張する亮太君がいて、片方では『必要だ』と唱える亮太君がいる。一体、どっち？」

「いや……えつと、僕はいらんいけれど、ほかの人は必要かもしれないし……」

口ごもつて、そう答えた。どっちと聞かれても、僕にはどちらの答えもあつて選択出来るものじゃない。まず天秤にかけられるものでもない。

「主観と達観の違い。凄く正しい答えだわ」

深夜さんの体温がようやく僕から離れた。今まで温まっていた部分に風が吹きつけ、すぐに冷たくなった。

「でも、その答えは『必要だ』と言っているのと何も変わらない。そこに『自分は』なんて聞いてもない自己主張を加えただけ。そんな曖昧な答え方が、人を弱くしているの」

今まで熱を分け合っていた僕らの間には、一気に冷たい風が吹きぬけた。まるで氷の壁に阻まれてしまった様に、明らかな境界線が

生じた。その壁から飛び出た刃を僕の首筋につきつけている。有無を言わせない、言葉の結論。タイミングを見計らったように、彼女の後ろからは月が雲の間から顔を出していた。あんな大きい星を味方につけられたんじゃ、僕には手の出しようがないじゃないか。

「……なんて、冗談よ。形から入れば亮太君も折れるかな、と思っただけ。気を悪くさせちゃったみたいね。ごめんなさい」

そう言っただけで彼女は素直に頭を下げた。僕は何も言わずに彼女をただ睨み続けた。

「そんな怖い顔しないで。悪気はなかったの。私がカウンセラーを目指しているのは本当だし、だから亮太君がどこかさびしそうに見えたのは本当なの」

そう言う彼女の瞳は微かに揺れ、嘘は無いように見える。けれども僕にはどうしてか、それすらも彼女の計算のうちに入っているんじゃないかと疑ってかかった。僕が疑心暗鬼になってしまったのかもしれない自己嫌悪と、そうではないかもしれないという不安が同時に襲い掛かってきて、息が詰まりそうになった。

「その、亮介からあなたの話は色々聞いてるわ……」

「僕の話？」

「そう。例えば、学校ではいつも一人で本を読んでいるとか」

確かな情報だ。阿形くんが僕のことなんかをほかの人に話しているとは思ってもよらなかったけれど、決して悪い気はしなかった。

「あと、凄いお姉さん子だとか……」

そう思ったのに、僕の気分は酷く害された。深夜さんがビクツと身を震わした。僕には理由は分からないが、僕が彼女を見た途端だった。でも一瞬のことだったから、僕はその反応を無視した。

「いなくなっただけでしょう、お姉さん」

「それも、阿形くんから？」

深夜さんはゆっくりとうなずいた。どうしたことだろうか、僕の個人情報とやらが知らない人にまで伝わっているというのは、腹立たしさより前に、頭を抱えなくなった。阿形くんの口が堅いとは思

っていなかったけれど、こうして彼の愚公を目の当たりにするとがっかりする。

「亮太君、あなたはここにお姉さんを探しに来たの？」

「違う」

僕はそう咄嗟に答えていた。自分でもどうしてかわからない。僕は彼女に必死に抵抗したがっているのかもしれない。真陽留さんが僕の内側を掬いだしてくるように話しかけてくれるのに対して、深夜さんは決り取るようにして来る。氷の壁は、僕のほうからだつて作り上げることができる。

しかし、深夜さんは僕の答えなんて聞いてもいないように話を続けた。

「一つだけ言うけれど、亮介はあなたのことを考えて大阪に連れてきたわけじゃないわ。よく考えても見て、東京の人が失踪したからって、大阪になんて来るはずないでしょう。それとも、何か手がかりでもあるの？」

そんなものがあつたら、僕が欲しかった。僕だつて大阪に姉ちゃんがいてそくだなんて、微塵も思っていない。ただし、僕は昨晚願ったんだ。真陽留さんの言う「信じる」という行為に、なすすべもない僕は賭けるしかなかった。

「亮介の下らない興に付き合うことはないわ。東京に帰って、警察に搜索届けを出したほうがよほど賢明よ」

「警察？」

「そう、警察。自分なんかで探すより、そつちのほうがいいわ」

この人は、一体何を言っているんだ……？

激しい眩暈を感じた。おかしい、同じ日本語で、同じ標準語で、同じ生物の身体で会話しているはずなのに、超えようの無い壁を感じる。何もわかつちやいない。カウンセラーなんて上辺ばかりの称号で、人の気持ちなんて何もわかつちやいない。

「ふざけないでください」

「ふざけているように見える？」

「見えます。警察なんか任せてどうにかなると思ってる貴女のほうか、どうにかしている」

「……」

深夜さんは黙りこくった。僕の言葉を待っているのか、それとも態度が変わってしまった僕に困惑しているかはわからない。しかし、気丈に定まったままの視線は僕を依然として貫いていて、優勢に立ったと思った僕の驕りは一瞬にして消え去った。ギリ、と奥歯を鳴らした。彼女の視線が痛いのだ。いや、不安なのかもしれない。僕は胸に手を置いた。その視線から、どうにかして心を隠したかったから。心臓がばくばくと鼓動を鳴らしている。これじゃあ、隠し切れない。収まれ、収まれと念を送ったって無駄なことはわかっていた。それでもやはり僕は、そんなことしか出来なかった。

「じゃあ亮太君、あなたは一体何に頼っていかうとしているの。亮介、なんて馬鹿なこととは言わないでね。さっきも言っただけけど、あの子はあなたのことなんて考えてないわ」

「どうしてそう言い切れるんですか」

「あの子は、優しくなんてないもの」

どこか、遠くを見るような目。乾いて、冷たくて、まるで石造みたいな瞳。僕は有無を言えなくなった。変わりにごくり、と唾を飲む音がした。

「もしも大きな問題を抱えていて、何かの間違いでここにきてしまったのなら帰りなさい。お金なら出してあげるから。それが正しい行動と、判断よ」

納得なんて、いかない。身を翻して自室に戻ろうとした深夜さんの細い腕を掴んだ。今まで僕を突き刺していた視線の持ち主とは思えないほどに華奢で、ほのかに暖かくて、月光のように真っ白だった。

「ここまで来て、無駄足ってわけにもいかないじゃないですか」

それは彼女の問いに対する敗北宣言だった。僕は確かに、姉ちゃんを探しに着ているという告白。彼女に届いてはならなかった自白

だった。

「昨晚、妹の真陽留さんが言っていました。「無いと決め付けるよりは、あると信じていたほうがいい」って。だから僕は……」

「黙りなさい」

真っ白な腕が凍り付いてしまったのか、冷たさが身体全体に伝わって、僕は氷塊になってしまった。腕が振り払われ、深夜さんが見下す。

彼女はきつと綺麗な人なんだろうと思う。けれども、今さっき雲に隠れた月や星は、恥らって隠れたんじゃない。恐れおののいたんだ。街灯の明かりすら彼女には届かず、真っ暗闇の中から彼女は僕に語りかけた。

「こういう格言を知っているかしら。——『神は死んだ』」

私が殺した、とでも言わんばかりに、彼女はそう呟くように言った。

「そう、神様は死んでしまったのよ亮太君。だから、私たちの願い事は誰にも届かない。排気ガスに埋もれて誰かに吸って吐かれてどんどん薄くなって消えるだけ。そんなものにあなたは頼っているの？」

激流が押し流すかのように僕に言葉を投げかける。僕は必死になつて足場を踏み、なんとかそこに留まっている。

「ち、違う。頼るんじゃないくて、どうせならって……」

「それがあなたの弱さだって、言っているでしょう」

誰なんだよ、こいつは。どうして初対面の人に、こんなにまで言われなきゃならないんだ。カウンセラーなんじゃないのか。どうして僕を、追い詰めるんだ。

一步深夜さんが踏み出すと、僕は一步下がった。どんどん流されていく。泳ぐことも何かに縋ることも出来ず、僕は流されていく。

「どうせなら信じたほうがいい。いるかいけないか分からないけれど、いたら損だから信じる。そんなこと誰も聞いてないわ。問題なのは『いるかいけないか』だけ。あなたにとって、神様はいるの？ いな

いの？」

「う……」

「『う』だなんて返答は求めてないわ。いるの？　いないの？」

冷や汗が滝のように流れてくる。ぐっと握った手のひらからはその雫が滴り落ちる。吐息は熱に犯されたんじゃないかというほど熱く口内を蹂躪する。目は意識とは無関係に逃げ道を探し、頭の中には答えを考える余裕なんてどこにもなかった。

どうしてこんなことに答えを窮しているのか自分でもわからない。それでも、この場は逃げてやり過ごさなければならぬような気がした。左を見た。阿形くんの待つ部屋の明かりが零れている。しかし窓は閉まっており、僕を迎え入れてくれそうにない。右を見る。ベランダの手すりが僕を阻んでいた。飛び降りる勇気なんてどこにもない。後ろを見る。僕を囲むようにして柵が張ってある。正面を見る。僕を射抜こうとする視線がある。八方塞だ。どうしたって、逃げられない。

極め付けに、深夜さんが僕の背中に手を回し、抱きつくようにして僕を締めめた。僕から熱を奪い取るように、その冷えた身体を一心に押し当ててくる。僕は何も感じない。身動きが取れなくなった身体で、唯一動く首を動かして空を見た。あそこに行くことが出来れば逃げられるだろうか。どうせ無理だって分かっているのに、僕は伸ばせない手の代わりに必死になって背伸びした。

「ほんと、あの子の言うとおりまるで病気みたいね。一体何があなたをこうしてしまったのか分からないけれど、とても可哀想」

可哀想。僕は可哀想なんだろうか。惨めで、救いようのない人間なんだろうか。

「でも答えて。あなたにとって、神は存在しうるのかどうなのか。答えられないんじゃない、神がいるかどうかの以前に、あなたがいないことになる」

「神様は……」

届かない。昨晚真陽留さんと見た夜空にはどこか親近感を覚えた

というのに、今僕の前に広がるものは全くの別物だ。あれはなんだ。あんなどす黒いものが神の居城だというのか。

まさに、そんな感じがした。

「いる」

やっと出て来た言葉は、信仰やロマンチックさを包含しない、敗北宣言のようなものだった。激しい後悔に僕の中は夜空がそのまま降りてきたように暗くなった。奥歯をガリツと噛んで、それに抗った。

「そう……」

音色はやさしげに、しかし緩んだ腕からは諦観したような物悲しさを感じた。

「私が『神は死んだ』と言ったのに、あなたは『いる』と答えるのね」

「僕があなたの考えに従わなきゃならない理由がないです」

「ふうん……」

品定めをするような目。この目も嫌いだ。また僕は何かを見透かされるっていうのか。

「ねえ、亮太君の考えはよくわかったわ。でも、やっぱり神は死んでいると思うわ」

「変なところで強情なんですネ」

「事実よ。ニーチェの唱えた永劫回帰の理論とは全く違うところで、神は死んでいるの。死んでいる、とは御幣がありそうね。正確には、殺された」

「こ、殺された？」

笑ってしまいそうな言葉だ。

「そう、殺された。ねえ、誰に殺されたと思う？」

そもそも神はいると断言してしまった僕に、神が殺された可能性を考えさせるのは酷というものじゃないだろうか。僕は持てる知識で考えてみたけれど、思い浮かぶのは神の戦争だとか、そんな空想的なものばかりだ。

「そもそも神ってなんなの？　どこの宗教のどの神が本物なの？」

「それは……」

「わからないでしょう。そりゃそうよ、とうの昔に殺されてしまった神の代わりに、影武者みたいにいくつもの神が創造されて信仰されてきたんだから。馬鹿な話だと思わない？　キリスト教では創造主たる神が、『創造されて』なんて言葉を使われるのよ」

それは酷く皮肉の利いた台詞だった。深夜さんの強烈な爆弾のような言葉から逃げるように、夜空が曇っていく。

「誰が創造したと思う？　人間よ、私とあなたも含んだ、人間」

「僕らの神は、僕らが作り出した虚像だって言うんですか」

「そう、良い事言うわね。でもそうね、作り出したというのにも御幣があるかもしれないわ。もっと物心のつかないころから根付いていた、とも言える」

すると深夜さんは、悪戯好きな子どもが何かを思いついたような残酷な表情をして、続けて言った。

「さながら神は、人間の中に根付いたとても便利な虚像よ」

「……」

反論なんてできるわけがない。流されるように断定を行った僕に、確固たる無神論を唱える彼女に対して何か物申せるわけがない。

「なんとなく、わかってきたんじゃない。神が誰に殺されたのか」でも、思う。

「人間が殺したの。私やあなた、ほかの人たちもみんな『共犯』で調子に、乗るんじゃない、と。」

僕は深夜さんに背を向けた。それでもしないと、変になってしまいそうだったからだ。

「深夜さんの言うことはわからないでもないです。でも、そこに僕を巻き込まないでください。僕は神の存在を信じていて、その希望に縋っている。それであなたに迷惑はかけないでしょう。僕が神を殺した一味だなんて言わないでください。そんなこと、僕に言ったってどうしようもないでしょう。カウンセリングするのも持論をぶ

つけるのも勝手ですけど、僕をこれ以上苦しませないでください。事情は知っているんでしょう、ならどうして追い込むようなことを言うんですか。探すのを手伝ってくれるならまだしも、東京に帰れだとか、阿形くんは優しくないだとか、どうして僕を追い込むんですか」

思っていたことをぶちまけるように言葉を並べる。溜まっていた泥が掃き出され水路が開いたように、次々と僕の口から出たものは思えないものが流れ出す。

「神様がいるかどうかなんて些細な問題じゃないですか。人それぞれでいいじゃないですか。どうして決め付けなきゃならないんですか。もう、いいじゃないですか……僕は可哀想な子で、それでいいじゃないですか」

「あなたのお姉さん、探すの手伝おうか？」

突然そんなことを言い出した。どういうことだよ、今の今まで深夜さんは僕に帰れだとか色々非協力的だったのに、なぜ突然。気が変わったのか、それともまだ僕を馬鹿にしているのか。僕が驚嘆していると、彼女は僕の正面に回りこんで顔を覗き込んできた。

「いまさら何を……」

「亮太君はよく思っていないみたいだけれど、私はこれでも本気で心配しているの。目の前に辛そうな人がいたら、助けたくなくてしょう?」

なるのだろうか。わからない。この人がわからない。氷の切っ先が尖っていたり、解けて柔らかくなっていたり、僕にはどちらが本当なのか判断がつかない。

「どうせ亮介は漫画本ばかり読んで役に立たないんだから、私と街でも歩いたほうが手がかりが見つかると思うんだけど」

「いや、でも……」

「はいはい、決まりね。明後日から午後四時過ぎくらいにでかけるわよ」

強引に決められてしまった。とはいえ、こうして目的ができるの

は素直に嬉しいことだった。相手が深夜さんでなければもつと良かった。僕はこの人が得意じゃない。今回でよくわかった。

ただそう、その理由として強いてあげるならば、やはり姉ちゃんに酷似しているのが辛くて堪らなかった。

「亮太君、ごめんなさいね、結果的に気分悪くさせちゃったみたいで。そのお詫び、みたいなもので提案したんだけど」

「い、いえ。助かります……」

「そう？　なら良かった。じゃあ今日はそろそろ」

深夜さんが戻っていく。僕は彼女が正面に来てから一度も顔を上げなかった。もちろん見送るときも、後ろを向いたままで。

「後悔、しないようにね」

そう最後に深夜さんが呟いた言葉を、僕は一生忘れないだろう。

14、神の存在(5)

翌日、僕は教会にいた。キリスト教の宣教師、つまりは牧師がいる教会だ。阿形一家は日曜日は教会に礼拝に行くのが習慣らしく、今日が日曜日だった。阿形一家といっても、実際僕と一緒に連れてこられたのは真陽留さんだけで、父親と合わせて三人しかない。今朝起きるとすぐに深夜さんがやってきて、僕に教会に行くように言ったのだ。昨晚の出来事から、神様云々についての関連だろうと僕だって気づいた。だからこうして他人の車に乗せられて興味もない教会とやらに来てみた。

教会というのはアニメや漫画で見るよりもずっと質素なもので、もつとステンドグラスだとかシャンデリアだとか無駄に高い屋根だとか、色々想像していたのとはまったく違っていた。一軒家を改装して小さな礼拝堂を作ったような、本当に庶民的な場所だ。もちろんステンドグラスのような豪勢な装飾なんてどこにもない。家宅の一室にしては微妙に広い部屋の中に、およそ四十前後の椅子が並べられているだけだ。ただ、正面の教壇の壁には十字架が描かれており、その部分だけはやけに浮いて教会ぽかった。

朝十時半から始まる礼拝に出席した僕だったが、中学の社会の先生よりもずっと眠たくなるような話に半分虚ろの状態だった。賛美歌なんて聴いたこともないし、暗唱聖句だって言えるわけがない。本当に聞いて、見ているだけだ。説教と題されて牧師が何かを語っていたようだが、それもほとんど聞いていなかった。借りた聖書を開く気すら起きなかった。隣で熱心に話を聴いている真陽留さんに感心したくらいだ。

僕は目を閉じた。牧師の語る声が次第に雑音になっていき、閉ざされた視界の暗闇に溶けていく。水滴の落ちる音がする。そうして僕の暗闇は完成した。真っ黒な無地の世界に、手馴れた方法で姉ちゃんの輪郭を描いていく。色は肌色、それも人魚のように瑞々しく、

世界最高の人形師が作った仏蘭西人形のように滑らかなもの。そして赤。その色合いは禁断の林檎か、それとも流された血か。そうして出来る限りのリアルを求めて彩っていく。

「神は死んだ」

突如、静寂を裂くように声が僕の耳に飛び込んだ。今まで描いてきたものが一瞬にして音によって滲んでいく。慌ててそれをもう一度描きなおし、ようやく形が整ってきたところで僕は声の主を探した。

暗闇を掻き分けるようにして探す。感触のないその質量は、未知の存在に対して僕にいい層不安を抱かせる。そうしてしばらく探してみたけれど、声の主は見つからなかった。軽い息切れも起こしながら、元の場所まで戻ってくると、また姉ちゃんが滲んでいた。急いでそれを描きなおし、もう二度と滲まないようにしっかりとそれを焼き付けた。

姉ちゃんは僕に手を伸ばしてくる。とても血が通っているとは思えない白さに、僕は嬉しくなる。糸のようにすぐ切れてしまいそうなその細く華奢な指に、僕は舌を蛇のように絡ませる。舌先で爪を弾くように舐め上げる。唇にすっぽりと収まるように口を窄めて小さな幸福を吸う。歯を当てるときと姉ちゃんは怒るだろう。僕だって嫌なことはしたくない。慎重に、敬愛するように、穢れを取るように、陶醉するように舌を這わす。

姉ちゃんはこのにいる。探さなくたってここにいる。その存在を確かめるために、僕はいつだって同じ行動を繰り返す。目を瞑ればいつでも僕は姉ちゃんを確かめられる。不安な時は、ここに来れば僕は救われる。

「では、お祈りします」

この世界じゃないところから声が聞こえる。僕はそれに従って、一度姉ちゃんの指から口を離して祈りの姿勢を取った。真陽留さんとした時と同じように、手を合わせる。

——どうか、僕の姉ちゃんが消えてしまいませんように。

言ってしまったえば、礼拝中僕は寝ていただけだった。真陽留さんは「初めてやから仕方ない」といつて笑って許してくれたが、礼拝中寝ていたのは僕だけだったことを父親から聞いて少し恥ずかしくなった。

「これからどうするんだい？」

礼拝に参加していた人たちが解散している中、真陽留さんにそう訊いた。

「これから子どもの教会があんねん。それに出てから帰る」

「ふうん、高校生とかが沢山来るの？」

「ちやう。子どももうちゅうても小学生とか幼稚園児や」

顔を綻ばせてそう言った。真陽留さんは子どもが好きなんだろうな、とすぐに分かった。

「そんな小さい頃から教会に？ 神様がどうのこうのとか分かるの？」

「もつと簡単なことしかやらんよ。イエス様がどれどれこういうこしてしてきたんやでー、つてくらの、紙芝居みたいなもんや」

言つてた通り、大人たちが帰っていくのと入れ替わりに、小さい子どもたちが教会に入ってくる。本当にまだ小学生低学年くらいの子たちしかいない。真陽留さんは彼らに寄っていつて一人一人にこやかな笑顔を振りまいていた。そしてその子どもたちもお返しといわんばかりに元気な声で挨拶をしていた。僕にはできない芸当だ。あんな綺麗なところに入っていく勇氣なんて微塵も出ない。

遠いところでそれを見ていると、一人の男の子がこちらにやってきた。僕の座っている席をじつと物ほしそうに見つめだした。

「こ、ここ君の椅子なのかな？」

「……そこ、姉ちゃんの父ちゃんの椅子やで」

「姉ちゃん？」

この男の子にも姉ちゃんがいるのだろうか。僕は何故か少し顔がこわばるのを感じながら、そう聞き返した。

「真陽留姉ちゃん」

さっきまでの元気はどうしたのか、静かな声色で僕にそう言った。

「そ、そうなんだ。ごめんね、すぐにどくよ」

父親はどうしているのだろうかとうと部屋を見渡すと、玄關あたりのところで年老いた女性と何か話していた。よく考えてみれば車で来たのに、真陽留さんがこの教会に出席して父親が出ない理由がない。

席から立ってひとつ前の席に移ったが、男の子は依然として僕に視線を向けたままじっとしている。

「こ、こども？」

「……兄ちゃん、新入りかいな」

「あ、うん」

そうと分かった途端、男の子は腕を組んで僕の前で仁王立ちした。自慢げに鼻を鳴らして、微妙に鼻水が垂れていることにも気づかずに荒い息を吐き出して言った。

「よし、弟子にしたる！」

「弟子？ 君のかい？」

あまりに突拍子もない話についていけず、思わず笑ってしまいそうになったのをこらえて訊いた。

「そうや。ここやとオレが一番大きい声で歌うし、お祈りも一番上手やからな」

すると、真陽留さんの周りにいた子どもたちがそれを聞きつけて声を上げた。

「嘘や。歌やて下手つくそで音痴やし、お祈りもふざけてるやん」

「何言うとるんや。オレは先生に褒められたんやで。一番元気でええねーって」

「聞いたるこっちは耳が痛いっちゅうねん」

なんだか喧嘩が始まってしまったようだ。つかみ合いじゃなくて、「アホ」だとか「ウンコ」だとか低レベルな言い合いなだけ、

見えて微笑ましい。真陽留さんがその間に入って、やめるように促した。

「何言うとるんやあんたら。あたしが一番に決まっとるやん」

胸を張って、真陽留さんがそう高らかに名乗りを上げた。すると子どもたちは最初こそ大口を開けて呆然としていたが、次第にざわざわと「姉ちゃんが一番元気やったね」と認める声が大きくなり、最後に真陽留さんを讃えるような声も聞こえてきた。

「ずいぶんと慕われているんだね」

「まあこの子らがまだ幼稚園に入って間もない頃から面倒みたってたからね。人懐っこくてええやろ？」

「僕は苦手だけどね。それにしても、妹である真陽留さんが『姉ちゃん』だなんて慕われ方をすると、複雑じゃない？」

真陽留さんは考え込むように一瞬俯いてから言った。

「正直、ね。あたしが妹っていうより、『姉ちゃん』って呼ばれるのはつまり、あの人と同じ扱いを受けているような気がするやん。だから複雑ゆうたら複雑やね」

苦い顔をしてそう言う真陽留さん。そうだった、真陽留さんはお姉さんが嫌いだった。同一のものと扱われるのが嫌なのは仕方ないのか。僕だって、ある意味では同一のものとして扱われたくはない。軽い冗談のつもりで言ったのに、なんだか気まずい空気になってしまった。

「真陽留姉ちゃん、その人誰なん？」

一人の女の子がそう真陽留さんに訊いた。

「ああ、あたしの友達や。リョータ君っていうんや。みんな仲良くしたってや」

子どもの無垢で興味津々な視線が僕に集まる。その多さに多少たじろぎながらも、なんとか笑い顔を繕って軽く手を振った。

「姉ちゃんの彼氏やこいつ！」

「えっ、ほんまかいな！」

「何や、こんなひ弱なのが好きなんかいな姉ちゃん！」

誰かがそう言ってから、水面の波紋のように広がっていく。僕は慌ててそれを訂正しようとしたが、その間に真陽留さんが立って、表情に焦りなんて一つも見せずに説明した。

「ちやうよ。この人はあたしの兄貴の友達で、東京から来た人や」
そう言ったところで、真陽留さんはしまったというように口元を押さえた。どうしたんだろうと思ってみていると、子どもたちの間で晴れていた空が曇ってしまったかのようなどんよりした空気が流れ始めた。

「あの兄ちゃんの友達かいな。なんか信用ならんな」

誰かがそう呟いた。周りの子どもたちもそれになんとか頷き、真陽留さんは苦虫をかみ殺したような表情でそれを聞いていた。

「兄ちゃん」

先ほど一番最初に僕に声をかけてきた男の子が言う。

「悪い人やないよね？」

「僕は……」

一瞬考える。果たしてこの世の中に悪くない人なんているのだろうか、なんて無駄なところまで思考が回る。その中で、僕が一般模範解答として良し悪しを定められたならば、どこに位置するのだろうかと考える。

「僕は、悪い人じゃないよ」

誰かがそう喋った。気づけば目の前では安堵の息を大げさに漏らす子たちがいた。何にそんなに安心したのか、どうして彼らの間で朗らかな笑顔が戻ってきたのか分からない。今の答えにどうして満足できたのか。

横を見ると、真陽留さんが同じような顔を僕に向けていた。ペルソナでもなんでもない、本心から出たものだと思っ取れた。同時に、どうしてそんな顔が出来るのかと問いたくなった。誰も僕が本当にそうなのか、という点に突っ込まない。漠然と与えられた答えに満足して、誰も彼もが笑っている。輝かしい光景だった。足元ががくがくするくらいに綺麗で、残酷な世界だった。

狼少年を思い出した。嘘をつき続けた結果、本当のことを信じてもらえずに惨劇を巻き起こした一人の少年の話。けれども、人に信用してもらえないかなんてのは僕にとっては些細な問題だった。昔その話を読んだとき、僕はどうしても不思議でならないことが存在していた。どうして、狼少年は「嘘をつき続ける」なんてことが出来たのだろうか、と。

僕は生涯で嘘をついたことは、最近を除けばほとんどない。何故ならそれは心苦しいし、それが許されるようなところで育ってきていないからだ。最近になって嘘を覚えたのは、嘘は必ず摘発され、裁かれるという絶対的な確信を持てたからだ。

けれども目の前の光景はどうだろうか。狼少年の前半の村の人々だって、信じやしない。そんなことを、彼らは平気で受け入れる。

「愚かだよ、こんなの……」

独り言で、小さく呟いた。誰にもそれは届いていないようで、子どもたちや真陽留さんは最初に戻ってわいわいとやっていた。居心地が悪く、僕は逃げ出すようにして後ろの席へと移った。ちょうど父親が帰ってきて、僕に向かって「まあ適当にくつろいでればええよ」と、気を遣ってくれた。

牧師がやってきて、朝とはまったく違う楽しい合図とともに、午後の教会は始まっていた。

15、神の存在(6)

「居心地、よおなかった？」

帰りの車の中で、突然真陽留さんがそう僕に訊いてきた。

「え、いや、そんなことはなかったと思うよ」

「世辞はいらんよ。やっぱなんだかんだで宗教やし、肌に合わん人もある」

思い当たりがあるのか、静かな表情でそう言った。

「えっと、イエスキリストがどうのこうのじゃなくて、単純にやっぱ子どもは苦手だなあって、そう思ったただけだから」

「そうなん？ 可愛いやんガキンちょ」

「うん、まあそうなんだろうけれどね。僕にはちよつと純粹すぎてみていられないというか何というか」

後ろで見えていても気持ちのいい状況じゃなかった。大人が何かを吐き出すように歌っているわけでもないし、辛い悩みがあつて話を聞いているわけでもない。ただ、本当に純粹に楽しんで、聞いている。そのくせお祈りの時はしっかりとやっていて、言葉こそ拙いものだったけれども、どこか本気なんだろうな、というのを感じた。宗教心なんてものはないんだろう。まだそんなものが分かる歳じゃない。けれどもきつと、彼らに「神様を信じていますか？」と訊いたら、「もちろん」と返つてきそうな気がして怖かった。それは本当に無心で、純粹なだけな言葉なんだ。中身が無いように見えて本当は詰まっている、そんな存在を目の当たりにして、僕は正気でいられる自信がなかった。

「子どもたちにさ、『僕は悪い人じゃない』って言つたろう。そりや確かに罪人なんてご立派な肩書きは持つちゃいけないけれど、少なくとも自分を『悪人じゃない』なんて言い切れるほど僕は正しく生きてきてはないんだ。なのに、君も含めてみんな信用しきつたような顔でそれに安心して、なんだか居場所が見あたらなかった」

「ふうん。リョータ君はむっちゃ難しいこと考えとるんやね」

「難しいかな」

「そりやあたしやって自分を善人やなんて思つたらんけど、でも相手は子どもやで。そんな難しい話は抜きして話してやるんが一番ええよ」

そういうことじゃない。僕だってそう思つたからそう言った。そんな風に不満足そうな顔をしていたのか、真陽留さんは言葉を続けた。

「リョータ君。人を信じることと、神様を信じることって同じような気がせえへん？」

「え、いや、どうなんだろう……」

考えてみたが、あまりに漠然としているし、差が大きすぎて受け取りにくかった。

「同じ見えないものを信じとるやろ。人の心も、神様の存在も」

「でも、人はこうして目の前で実態を持つてみる事が出来るじゃないか。心を想像して信じることが出来る。今までの行動とか、そういうものが見られるじゃないか」

「神様がしてきた逸話を聞いて信用するのと変わらないんとちゃうか。相手のことを想像して信用するんやったら、神様も人も変わらへん。どっちも不確かなものやけど、どこか確かなものも存在してる」

本当にそうなんだろうか。方や現実到现在存在する形のあるものに対して、方やもしかしたら想像上の人物かもしれないという存在同じものとして括って構わないのだろうか。

「子どもたちは難しいこと考えられへん。神様は人の悩みを救うために作られた架空の人物、なんてこと、考えられへんねん。それにそれも同んなじや。学者つちゅう人が、変な理屈こねくり回して『もしかしたら』を想像しとる。でも、神様信用しとるあたしが言うのも変やけど、そっち側の言い分も分からんでもないねん。そりやどっちも不確かなものがあるやん。断定、つちゅうもんは出来へんね

ん。その中で、どうして子どもたちやあたしが神様を信じとるのか、リョータ君には分かる？」

僕は首を横に振った。僕はどうしても理屈派だから、宗教学的な観点からしかものを見られないかもしれない。今の話を聞いていても、学者が変に理屈をこねくり回したもののほうがよほどに信用に値するような気がしていた。

「僕は、信用には下地みたいなのが必要だと思ってる。そして、それが硬ければ硬いほど信用に値するんじゃないかって。純粹に何かを信じるっていうのは、難しいことだ。僕が神様を信じてみようと思ったのだって、取引みたいなものだ。神様がもし助けくれるならば、僕は神様を信用してみよう、って」

自分で言っているけど、神様なんて尊大な存在に対して失礼なことをしていると思う。子どもたちと比べて、なんて醜いんだろうと自虐にも陥れる。

「ええねん、リョータ君みたいなので。難しいことはないんや。あたしや子どもたちが神様を信じる理由やって、言葉にしたら汚いけれど、ただ「信じるに値する」ってだけなんや、多分」

「信じるに、値する……」

言葉にしながら頭の中で反芻する。確かに難しいことじゃない。

「ああ、この人信じとったらええことあるんやないかなーって。きっと、ただそれだけや」

すとん、とても分かりやすくて柔らかいものが僕の中に落ちてきた気がする。あの無邪気な笑顔も無垢な言葉も、そんな単純な理由から来ていたとするならば、納得できた。神を『父』と呼ぶキリスト教のように、子どもたちもまるで頼りになるお父さんのような感覚で信じているのかもしれない。

そして、それに釣られるようにしてひとつの考えが浮かんだ。

「でも、それなら深夜さん……えっと、真陽留さんのお姉さんは『神様は信じるに値しない』って考えてるのかな」

姉の名が出た瞬間、真陽留さんの表情が曇ったのを見た。信仰の

違いからなのか、彼女らは本当に仲がよくなさそうに思える。

「それは、どうなんやろうな。姉ちゃんのことなんか分からん。あたしとかお父さんが神様の話をする度に、何かと突っかかってきおる。しまいにやあたしに神様なんておらんのよ、とか変に諭してきおるようになった」

「諭す？ そんな無理矢理みたいなことをしたの？」

「無理矢理っちゅうか、きつとあたしの内面変えようとしとんねん。姉ちゃんはいつも言うんや。神様なんか頼りつつたらいつか後悔するで、って」

「後悔……」

昨晩の出来事が思い出される。深夜さんは確かに、去り際にその言葉を残していった。どういうことなのかはまったく分からない。けれども頭に貼り付いて離れない。僕が神を信じることで、何か後悔するなんてのは想像でできなかった。そして、同じことを真陽留さんにも言っている。僕から見ても、真陽留さんがそれで後悔しそうなことは見当たらない。子どもの教会が開かれているとき、彼女は生き生きとしていた。僕の周りにはこういう人がいなかったせいとか、その光景には杭を打たれたように視線を離せなかった。そこまで惹きつける何かを発生させるものだというのに、それによって後悔する、だなんて考えられない。

「あいつのことは放っておいたらええねん」

前方から、父親の声が挟まってきた。信号が赤になったのか、車体は停車している。顔をまっすぐ前に向けたまま、どこか荒んだ瞳をしながら言った。

「あいつは昔っから自立自立ってやかましかったわ。亮太君は信じられへんかもしれんけど、あいつ高校ん頃から一人暮らし始めとったんや。それに感化されたんか知らんけど、亮介も東京に出るとか言いおって、仕送りするこつちとしては迷惑極まりないわ」

「でも、結局東京に進学することは止めなかったんですね」

僕がそう遠慮気味に言うと、父親は大きくため息を吐いた。

「うちの家族は見ての通りあんまり兄弟仲がよろしくなくてなあ、俺も離れたほうがあいつらにとっても楽でええんちゃうかって思ったんやけど、それが逆に溝をさらに作ってしまったかもしれん。昔は真陽留と良介は仲よかったはずなんやけどなあ、失敗したか？」首を少し後ろに曲げて、父親がそう真陽留さんに訊いた。

「そんなことあらへんよ。感謝しとる」

「感謝？ 阿形くんがいなくなってよかったの？」

僕がそう言くと、彼女は一瞬凍った。しかし、それもすぐに溶け、にこりと笑った。

「思春期やし」

それ以上は何も語らなかった。兄がいると、妹としては気まずいのだろうか。異性が兄弟にいる僕だけど、いまいち理解はできない。別に一緒にお風呂に入らなければならぬわけでもないし、家を見る限りでは部屋割りもきちんとされていた。思春期、とやらの感情はいまいち理解に苦しむ。

そうでないにしたって、阿形くんのような兄は誇りに思っている。と僕は思った。高校では彼は烏合の衆を束ねる小さな親玉だったけれど、最近近くにいてよくわかった。彼の突破力というのは凄まじい。開けられなかったドアを開けたり、平気で人を殴る。僕はそれが一端の不良としてではなく、しっかりとした自意識に基づいて行われている行為だと知っている。だからこそ、目の前で御奥さんが殴られたとき、僕はどこか爽快感を覚えたのだろう。けれども、それを口には出さない。きっとそれを知っているのは僕だけだ。この場の誰しもが、阿形くんを誤解したままにいる。でもそのことを知らせるのは、今は得策じゃないと流石の僕にも想像がつく。

「亮太君は、お姉さんと喧嘩とかしよらんかったんか？」

バックミラー越しに父親を見た。その次に流し目で真陽留さんを見る。疑問詞を瞳の中に浮かべている。彼女が話したわけじゃないさ。そうだ。

「いえ……僕は別に」

「ほんまかいな？ お姉さんと仲よかったんか」

「まあ……」

「ははっ、なんや齒切れ悪いなあ。恥ずかしがらんでもええで。別に珍しゅうはないから」

そういう問題じゃない。僕と姉ちゃんが仲が良かったなんて、口が裂けても言っちゃいけないんだ。誰も彼もが僕のことをシスコンと呼んだり、中睦まじい姉弟と呼んだり、本心では馬鹿にしているのか？ と訊きたくなる。車の微かな揺れが僕の激情をぐらつかせて、熱い部分と冷たい部分をかき混ぜて中和していてくれるような気がする。喋りたくはない。けれども、父親は何に興味を持ったのか、僕と姉ちゃんの関係について色々聞いてきた。僕はそのたびにまあ、とかはあ、とか適当な返事をした。横にいる真陽留さんは初めのほうこそ話に耳を傾けていたけれど、今はもう窓の外の光景に目を移していて、どうにかしてこの話を止めてくれる、なんて親切心は期待できそうになかった。

「ええなあ。なあ真陽留、お前も亮介と仲良おしよったらどうや」

「あたしはええわ……」

物思いに耽るように手すりに肘を置いて、ゆっくりと息を吐くように彼女はそう言った。

「なんでや。同じ異性兄弟の亮太君がこうなんやから、お前も出来ないこっちゃないやろ」

「出来へんよ。リョータ君のお姉さんは大学生やろ？ 兄貴は同い年やで。年の差あらへんのって、案外めんどいねん」

「はあ、若い子の考えはわからへんわ」

あからさまに疎ましそうに目じりを細めている彼女に対して、父親は泥んこの子どもが土足で部屋に入ってくるような、無邪気さと遠慮のなさで話をする。僕は、この人とは合わないだろうな、と思った。正直に言って、嫌だ。どうせ出来もしないのに口だけ達者で粹がっている奴となんら変わらない印象を与えてくる。この人の話を聞いていると、車内という理由じゃなくても悪い酔いしてくる。

会話がいつの間にか途切れ、車体は阿形宅の車庫に入っていた。

冬の季節のせいか、太陽は幾分か傾いており、斜陽らしきオレンジ色の光もアスファルトの上に差していた。車を出て軽く背伸びをする。走行時間が微妙に長かったせいか、腰の辺りが地味な痛みを訴えていた。そういえば車に乗ったのは久しぶりかもしれない。両親が基本的に家にいないし、姉ちゃんは運転免許なんて持つていなかった。最後に車に乗ったのはいつだろうかと考えると、自動車の記憶は遥か遠く、中学の修学旅行で乗ったバスが最後かもしれない。そりゃ腰も痛くなるはずだと思い、もう一度大きく背伸びした。

「なあ亮太君。大阪来とって楽しいことあったかいな？」

父親が車の鍵を閉めながらそう言った。

「あ、はい。結構新鮮でいいですね」

「そういうことやあらへんで、亮介がほったらかしやる。どこか連れてってやろうって思うんやけど、どうや」

「え、いや、それは申し訳ないですし……」

「それを言うたらうちの方が申し訳ないねん。折角大阪までやってくれたつちゅうに、何もせずに帰すわけにもいかんやろ」

悪くはないと思ったが、僕は決して遊びに来たわけじゃない。そのことを考えると、阿形家というよりは、自分自身、もしくは『彼女』に申し訳なかった。

なんとか断ろうと考えていると、昨日のことを思い出した。しかしそのまま事実通りに言ってしまうと、なんだかいけない気がして嘘を混ぜて伝えることにした。

「えっと、明日から深夜さんが町を案内してくれるってことになっているんです。だからその辺りは多分大丈夫です」

「深夜が？」

語尾が激しく上がり、素の表情で驚いていた。真陽留さんと顔を見合わせて、どちらも信じられないといった様子だ。そんな閉塞的なイメージは深夜さんにはなかったために、どうしてそんなに驚いているのかが分からない。

「まあならえねんけど、深夜はおかしなやつやから変なこと吹き込まれんように気をつけたらええ」

「えっと、はい」

頷くべきか迷ったけれど、周りに当人もいないことだし忠告を受け取っておくことにした。

阿形君の部屋まで帰ってくると、彼は相変わらず部屋の隅で漫画を読んでいた。本当に彼はこのままこの体制で一週間を過ごす気なのだろうか。僕は少なからず自分の中に疑心が芽生えているのを認識した。同時に、彼が誘ってくれたのに、彼が言ったことなのに、と小さな恨みの念も積もっていることに気づいた。どうして彼は動かないのか。それとも、そもそも『話をした』深夜さんに僕のことを任せるつもりだったのか。それを直接聞いてやろうかとも思ったけれど、漫画本に集中している阿形君に声をかけられるほど、僕には遠慮なしというある種の傲慢さはなかった。

仕方なくいつものように僕も部屋の隅に座り、適当に時間をつぶそうと漫画本に手を伸ばすと、対角線になるように座っている阿形くんのところから、本を置く音がした。

「なありョータ。天才のお前に聞きたいことがある」

「僕は天才じゃないってば……」

「まあそんなのはどっちでもいい。お前、不幸ってのはどうして起こると思う」

突然哲学的な話をしてきたものだから、僕も姿勢を正して考えてみた。

「どうしてって……そういう法則性とか前触れがないから不幸なんじゃないの」

「いいや違う。法則性も前触れもある場合だってある。それでも不幸って呼ばれるなら、不幸はどうして起こる」

「いや……阿形くんの言い分が正しいなら、どうしてもなにもないじゃないか。前触れや法則性のせいだろうそれは。ただ、そうなら未然に防げてしまうから、偶発的なものっぽい不幸とは呼ばないの

かもしれないけれど」

「偶発的なものってなんだよ。偶然なんて、誰にも分からないだろ」
夕焼けから伸びてきたオレンジ色の、目が痛くなるくらいの光が
部屋のフローリングに反射して、阿形くんの顔が見えない。いった
い、どういう思いでこんなことを言っているのか、顔の見えない今
では想像のしようもなかった。

「例えば交通事故が不幸だとしてさ、それが実は裏ではわざとその
人にぶつかるように車を走らせたっていう立派な殺人事件だとする。
これは不幸じゃないのか」

「その、そういう事件の対象に選ばれてしまった偶然が、不幸なん
じゃないのかな」

「計画性を持って、それも事件の動機がしっかりあったとしても、
か」

「……」

答えられなかった。たとえば、犯罪者が被害者の家族によって殺
されてしまうのはどう考えても不幸なんかじゃない。犯罪者がもつ
と偶然、階段で足を滑らせて死んでも世の中はそれを「当然の報い
だ」というかもしれない。それは、一般的にいうところの不幸なの
か？

「俺さ、ずっと考えてたんだ。不幸ってのはなんなのかって」

「漫画を読みながら？」

「そうだぜ。それで考え付いたんだが、不幸ってのはもつと根本的
なところにあるのかもしれないって」

「それは？」

「不幸ってのは、アダムとイヴの時代に始まり、奴らのせいで起こ
るもんだ」

ぶつとびすぎて、一瞬頭がついていかなかった。大口を開けてぽ
かんとする、というのはまさに今の僕に当てはまるんじゃないだろ
うか。

「不幸が起きないようにするためには、そこから改変しないといけ

ない。そしてそれは俺らには到底無理な話だ。つまり、不幸は仕方ないことだ」

「ま、まあ不幸は仕方ないといえば仕方ないよね。運氣ってというのは人の力で左右できるものじゃないだろうし」

「そういうわけで、俺は割り切ることにした」

「何を？」

「さあな」

がはは、と豪快に笑い飛ばす。僕といえば頭の上にクエスチョンマークを浮かべそうな勢いで彼の言ったことを理解しようと勤めていたが、途中で無駄なことに気づいてやめた。

阿形くんはもう話すことがなくなったのか、再び漫画に戻り、その後一切しゃべることはなかった。ただ、微かな斜陽の中に佇む姿は、静かな瞳を携えて、圧倒的な存在感をその中で放っていた。戦場に出る武士じゃないが、どうしてかその姿からは明日死ぬことすらも厭わない、恐ろしく気丈な雰囲気を感じさせた。

僕は彼の強さに怯えながら、部屋の隅で明日を待つことしかできなかった。

16、信頼と信仰（1）

大阪の町というのは道頓堀だとか食い倒れ人形だとかを想像していたけれど、そんなのは一部の都市の話で、少し地方側に寄つてみれば大型ショッピングモールがどこでかい交差点沿いにひとつかふたつあるくらいで、商店街なんてものは駅前くらいにしか存在しない。活気はもちろんあるけれども、商店街の気さくなおじさんおばさんが関西弁で会話している姿を想像していた僕としては、どうにも拍子抜けな感じが否めなかった。

最初は近場からと言つた深夜さんは、僕を自前の自動車に乗せて家から二百メートルちよつとしか離れていないショッピングモールにつれてきた。姉ちゃんを探すといつても手がかりもなければ、大阪にいてという確証すらなく、本当に観光紛いのことをしつつ、目を見張らせるくらいのことしか僕らには出来ない。深夜さんに至つては僕の姉ちゃんの外見すら知らない。付添い人以上の意味を彼女は成さないだろう。しかし、一人で探すよりかは幾分か気分も乗つたし、深夜さんは夜の時とは打って変わって僕に良くしてくれる。たかだが高校生の本当かも分からないような搜索劇に巻き込まれて迷惑しているかと思つていたけれど、彼女は彼女なりにどこか楽しんでるようにも思えた。

午前八時過ぎ辺りに家を出た僕らは、数時間ほどショッピングモールの中を回り——もちろん姉ちゃんを探しつつ——昼ごろには内蔵されていたファミリーレストランに落ち着いた。さすがに歩いているだけの深夜さんにとっては、ほとんどただの散歩と違いはないだけであつて、疲れがたまる早さも相当なようだった。対する僕といえは、不謹慎にも少し楽しんでしまつて、心地のいい疲労感ならば感じているくらいだった。

ファミレスの中は意外と落ち着いた空調で、料理の臭いというのは感じづらいものがある。空腹を催すには刺激が足りない。ウェイ

ターが水の入った透明なグラスを持って、僕らの前にそれを二つ置いた。それを取って一口喉に流し込むと、冷えた心地のいい感触が喉を伝った。幾分か疲れていたらしく、舌がさつきよりか回りが良くなった気がした。

「お姉さん、見つかった？」

恐らく期待なんてまったくしていないのだろう。とりあえずといった様子で目の前に座った深夜さんがそう僕に訊いてきた。

「いいえ、だめでした。似ている人も……いませんね」

正面の人物が一番似ていて困っているのだけれど、それを深夜さんに言ってしまうのもなんだか嫌な感じがした。

「でしようね。広大な砂漠から一粒の金を見つけ出すよりも辛いことだわ。手がかりもなく人探しなんて途方もないこと」

「でも、やっぱり僕は阿形くんがここに連れてきてくれたことに意味はあると思っています。だから、きつと手がかりはあるんじゃないかと」

「そういえば亮介……今朝は部屋にいないみたいだったけれど、どこかに行ったの？」

そうだった。今朝僕が七時ごろに目を覚まし、部屋を見るとそこには阿形くんの姿はなかった。朝日がきらきらとフロアリングに輝きを作っているほか、まるでその部屋は僕のものなんじゃないかってほど、阿形くんがずっと漫画を読んでいたスペースは空っぽになっていた。父親も真陽留さんも見てないという。僕は姉ちゃんがいなくなった日のことを思い出してかなり狼狽した。けれどもそこでがつんと殴られるように昨日の光景がよみがえってきて、不思議と納得して落ち着いてしまった自分がいる。

「多分、どこかに遊びにいったんじゃないんですかね。阿形くん、結構な遊び人ですし」

「そうね。そうだったわ。我が弟のことながら、すっかり忘れてたわ」

きつと嘘だろう。そして、嘘に気づいてもいるだろう。

「あの、深夜さん」

「なに？」

レストランのメニューを見ながら、深夜さんが答えた。

「不幸って、どうして起きるんだと思いますか？」

昨日の僕と同じように感じたのか、一度メニューを閉じてテーブルの上に置き、すつと細まった瞳で僕を見てきた。

「どうしてそんなことを訊くの？」

「いや、えつと、なんとなく……」

我ながら最悪の言い逃れだと思ったけれど、深夜さんはそれ以上追及してこなかった。ただ、何か引いてはいけないクジを引いてしまったのか、あの日の冷たい深夜さんが登場した気がする。後ろに真っ白な月がない分、意外と冷静に受け止めることができた。

「不幸なんて、存在しないわ」

前にあつたガラスの氷がからん、と音を立てた。

「いえ、正確には、少なくとも私にはあるけれども、あなたには存在しない。真陽留にも存在しない。私のお父さんにも存在しないわ」

「神様を信じている人には、ってことですか……？」

「聡明ね、亮太君。その通りよ」

まるでクイズゲームの正解者を褒めるような言葉。彼女はこの命題に対してゲーム感覚で語っている。この冷たい目は、きっとそんな時に出てくるものなのかもしれない。

「例えば、『不幸にも』何かの事故で死んでしまった人がいたとしましょう。けれども、神様を信じている人はそれをきつと、神が迎えに来たとか、そういう時が来たというわ。宗教学的観点から見ても、『そういう風に決まっていた』で終わってしまう。哀れみも悲しみもあるだろうけれど、誰もそれを不幸とは呼んでくれはしないわ」

想像をしてみる。例えば彼女の父親。温厚そうな厚い瞼の奥では、どんなことを考えているのだろうか。少なくとも彼ならば悲しみとか、そういう濃い青色に満ちていそうな感情を携えているに違いな

い。けれども時折見せる深夜さんへの嫌悪感を思い出すと、果たしてもしも目の前の彼女が死んでしまった時、父親はどういう反応をするのか、ぞっとする不安があった。彼女の死体を目の当たりにして、僕の想像の中の彼は冷酷な瞳を向けている。まるで、それは仕方のないことだったとも言いたげな様子で。

毛穴が大きく開くような激しい鳥肌に襲われ、僕は考えるのをやめた。人のことを勝手に邪推して勝手に気持ち悪くなっているなんて、失礼極まりない。首を大きく振って邪念を取り払う。

僕には家族というものがいまいち理解できないだけなんだ。何せ今の今まで姉ちゃんと育ってきたようなもので、父親が娘にしてやることなんて分らない。そうだ、きっと彼だって、どこにでもいるような普通の父親のように、悲痛に表情を歪めて涙を流すに違いない。

「逆に、そういう人たちには幸運っていうものも存在しないのかも
しれないわ」

考えに耽っていた頭を深夜さんのほうに向けると、彼女はこちらを見て口元を微かに吊り上げていた。

「どんな頑張りも、神の行為になる。そう、亮太君がこうしてお姉さんを必死に探しているでしょう。もしも見つかったも、『神の導きがあった』とか言われちゃう」

「それは……」

「最悪でしょう？」

そう同意を求めてくる。上手く口車に乗せられているような気がする。知らない間にエスカレーターに乗せられていて、どれだけ端に逸れようとしてもいつの間にか戻ってきている感じ。そのまま先に連れて行かれたら負けだ。

「僕は……それでもいいと思います。姉ちゃんが見つかるのなら、神の導きだろうが人の導きだろうが犬の導きだろうが従うし、納得しますよ」

嘘ではない。僕は姉ちゃんが見つければそれでいい。

「それは、神様を信じているって言えるの？」

「神様も信じているんです」

細くなっていた瞳がふつと氷解するように大きくなる。グラスの中の氷も溶けきってしまっていて、グラスの表面には結露した水滴がテーブルの上に小さな水溜りを作っていた。それに構わず深夜さんはそれを掴んで、一口喉に流し込んだようだ。

「大丈夫よ。どんな形か分らないけれど、亮太君のお姉さんは必ず見つかるわ。だからそんなに必死にならないでもいいと、私は思うわ」

「必死にならないわけがないじゃないですか。深夜さんだって、家族がいなくなったら僕みたいになるでしょう」

「さあ、私は冷たいからどうかしらね」

そう言つて、恐らく冷たさを感じているだろうグラスをテーブルに置いて、視線を窓の外に背けた。僕も一度、気分を落ち着けることにする。

肩の力を抜いて息をゆつくりと吐いてみると、周りの雑音が良く聞こえるようになった。昼時は過ぎたけれど、ファミレスは賑わいを落ち着かせない。学校帰りの学生が特に目立つ。甲高い耳鳴りを起こすような声を上げて女の子が話している。会話の内容は分からないけれど、きっと今の僕のような深刻な状況下にあるのとは違う、どうでもいい娯楽性に富んだものだろう。

ふと、彼女らにとつての不幸とはなんだろうかと考えた。付き合いついていたボーイフレンドと別れたとか、友達だと思っていた友人に裏切られたとか、担当する教諭が自分の望む形じゃなかったりだとか、いわゆる『チヨ―最悪』に属する分類のものだろうか。そんな言葉をさつきから良く耳にする。僕と彼女らの不幸が同じ属性であったとしたら、僕の姉ちゃんがいなくなったことは僕にとつて『チヨ―最悪』と言えるものなのだろうか。確かに、最悪か最高かなんて局地的な二択を迫られれば、僕はきっと最悪と答えてしまうだろう。でも、それは僕が僕を『シスターコンプレックス』として

分類して呼称する人を嫌うのと同じ理由で、許し難い表現だ。

「料理、頼みましょうか」

深夜さんがメニューを持って僕に見せた。受け取って、適当な料理に決めるとウェイターをボタンで呼び出して注文をした。客の込み具合も段々と減ってきてはいるが、まだまだピークなのかウェイターは急ぎ足に注文を取ってカウンターの奥へと消えて行った。

数分もすれば料理は来て、僕らは会話という会話もほとんどなく食事を終えた。外に出ると、曇天が空一面に広がっていた。天気予報では降水確率は然程高くなかった、と深夜さんはそれを見て僕に告げた。とは言え、冬の寒気のせいもあってか、雨こそ降らなかったけれど微妙に湿り気のある凍えた空気が臉の周りや耳を真っ赤にし、終始摩擦を起こしながら歩く羽目になった。

近場だったので帰りも歩きだった。しかし、これで帰るのもなんだと言って、深夜さんは僕をショッピングモールから更に五百メートルもしないところにある公園に連れて来た。近頃では珍しい回るタイヤの遊具や木製のアスレチック、大きな砂場に噴水まであった。人の出入りも盛んなのか、公衆便所の前に若い人が二三人と、子ども連れの親子が二組、噴水の前に老人を見つけた。僕らは老人の座るベンチの一つ隣のベンチに腰を落着けた。風が多少吹いているせいか、霧になった水しぶきが首筋に飛ぶ。場所を移動しようと提案しようとも思っただけで、他に残った場所はブランコくらいしかなく、流石にこの歳で乗るのは恥ずかしいのでやめた。

「カウンターを指しているって、私言っただじゃない？」

そうですね、と僕は夜のことを思い出して頷いた。

「らしいと思う？」

僕は、どう答えるべきか一瞬迷った。

「正直に答えていいわ」

「えっと……分らないです。向いているような気もしますけれど、人によっては違うかも」

「亮太君らしいわね。まあでも、私は自分で全く向いていないと思

うわ。人を救う手助けをする、なんて大仰な仕事をしようとしているのに、突発的に神は死んだ、とか殺された、なんて発言をする。そんなカウンセラーがどこにいるかしら」

「でも、人を救うのは神じゃなくて、深夜さんじゃないですか」

納得したようにも、否定的なようにも見えない。やはり灰色で今にも振り出しそうな空を見ながら、そうね、と小さく呟いた。

「ねえ亮太君。一つ聞いてもいいかしら」

「なんですか」

「私と神様、どっちが信用があると思う？」

まるで僕に空にいる神と自分を見比べてごらん、と言いたげに訊いてきた。そうして、今まで曇天に穴が開きそうなくらい見つめていたのはこのためなのかと理解した。

思考がぐるぐると回り、焼ききれそうになる一步手前を彷徨うところまで行きそうになる。人と神、どちらが信用に値するかなんて僕にはあまりに判断しがたい。今、こうして現状を考えたときに、祈られてまだ何もしてくれていない神と、結果こそ出ていないが僕と一緒に姉ちゃんを探してくれている深夜さん。そのどちらかを選ぶなんて出来そうに無い。眼球の奥がチカチカと火花をあげている気がした。凶悪過ぎるジレンマがせめぎあつて、間にいる僕は今にも潰れそうになる。考える、という言葉を頭の中で数十回以上反芻して、いつしかその言葉の意味すらも失って、がけ崩れが起きるように巡っていた思考回路は呆気なくショートし、僕は結局いつもの言葉を吐いた。

「分かりません」

伝えるはずの言語はどすんと、重い音を立てて深夜さんに届く前に地面に落ちた。当然深夜さんは依然として何かを見上げたままで僕の声なんてまるで聞いていないかのように沈黙でいた。少しだけ焦って、僕は取り繕うように言葉を並べた。

「だ、だって僕は……失礼かもしれないですけど、姉ちゃんが見つかればそれで良いんです。誰が見つけただとか、そんなものには

あまり興味がありません」

ひっそりと顔色を窺うために目だけ横に向けて深夜さんを待った。すると、わざとらしく声に出して「ふう」と深夜さんがため息をついた。

「知ってると思うけれど、人も神も信用によってでしか関係を築けないのよ、実は。確かに今のは意地悪な質問だったわ。亮太君はどちらのほうが信用に値する、としか答えられなかった。当然、私はどちらを聞いたって不服に思ったわ。そうして、亮太君が分からない、と答えるのも予想済みだった。きつと頭の中で悩んだんでしょね、どう答えれば良いのかって。でも不毛よ亮太君。答えなんてどうせ最初から用意されているんだから」

「どうして僕のこと分かるんですか。僕は答えなんて用意していないのに」

「亮太君、人にはパターンというものがあるのは知っているでしょう」

「だから何ですか」

「私は、どうせ亮太君はそうとしか答えないだろうって、そう思ったの」

嫌に刺々しい言葉を選ばれた気がする。身に染みる思いはしなかったけれど、ぐっと反論を押し戻されたようなに重い空気を胸の中に感じた。

「カウンセラー、らしいですね」

心にもないことを言ってみる。

「そう？ きつと誰でもそう思うわ」

「僕ってそんなに分かり易いですか？」

「ええ、とても。……いえ、きつと亮太君の奥底には誰にも分からない何かが眠っているのかもしれないけれど、表面に出ている貴方は表裏に違いの無い真っ白な紙みたいなものね。わかり易いというか、もうそれしかないって感じかしら」

真っ白で何も描かれていない紙。裏面も同じで、見ていて面白く

も無いもの。ピンとは来なかった。

「うっん、ちょっと違うわね。最初は書いてあったものが消しゴムで消されてしまったような……違う。上から真っ黒な絵の具で塗りつぶしてしまったような……」

最後の一つにしっくりと来たのか、「ああ、そんな感じ」と実に抽象的な結論で僕に微笑んだ。カウンセラーの例え話は良く分からない。

昔、そういつだったかは忘れてしまったけれど、一度だけカウンセラーにかかったことがある。どうしてそんなことになったのかも覚えが無いけれど、きっと思春期特有のうつ病か何かだろう。ともかく、そこで聞いた話も似たようなものだった。ただし童話チックで聞き易い内容だったことだけ覚えている。深夜さんのそれは完全に「まるで」の話だ。

「僕の人格が真っ黒だなんて、酷い言いようですね」

「人格を否定したわけじゃないわ。そうね、もっと柔らかく言うなら、硬い殻で覆われてしまっているような、とでも言えばいいのかしら」

どちらにせよ、あまり良い意味には聞こえなかった。人に自分のことを言われるのはやはり好かない。

「もう止めませんか……深夜さんがカウンセラーらしいっていうのは良く分かりましたから」

「そう？ まあそうね、あまりいい気はしないだろうし」

深夜さんはベンチを立った。軽く砂埃を払い、大きく背伸びした。僕もそれを追うように立ち上がって身体を伸ばした。

真っ黒な空。そのもっと上空には青い空が広がっている。僕もこんな感じなのだろうか。どこを見渡したって同じもくもくと煙のように広がった汚い色の雲しか見当たらない。表裏も何も無い。確かにこれだったら、雲の色を当てようにもそれしかないのだから仕方ない。ただ、僕とこの雲の違いは、きっと僕の黒い部分は突き破ったその先に青空なんて大層なものが広がっているとは思えないところ

るだ。この雲の向こう側に、もっと汚い空が広がっていたら、僕ももっと共感できたのかもしれない。

「明日はどうするの？」

「姉ちゃんを探します」

僕ははつきりと、そう答えた。

「そう……。なら一応私も付き合っわ。一緒に探すって約束したしね」

無言で頷き返し、僕はもう一度曇天を見上げた。

その日、雨は降らなかった。

17、信頼と信仰(2)

それから月曜日が過ぎ去り、何の成果も得られないままあつという間に木曜日を迎えた。阿形くんの言う一週間が本当なら、僕は最速で明日、遅くとも土曜日か日曜日に帰らなければならない。電車をいくつか乗り継いでそれらしい場所にも行ってみたが、やはり手がかりなしでの搜索は無謀だったらしい。深夜さんと街巡りをしているのと全く変わらない日々を送った。今日になって、初めて僕はここに來た理由を疑いたくなっていた。

僕を誘った当の阿形くんは月曜日から今日まで、僕が目覚ます前にどこかへ出かけている。帰ってくるのも夜がかなり更けた頃だ。会話という会話も交わさずにすぐ寝てしまうので、一体どこに行っていたのか訊ねるタイミングもなかった。ただ、そう、何か思いつめたように、必死になって何かを行っているのは確かだった。破裂しそうなまでに膨らんだ風船に、まだまだ空気を入れようとする。それでも阿形くんはそのギリギリのタイミングを知っていそうだから、僕には何も出来そうになかった。

大学の関係で今日は深夜さんがいない。先導役がいない。かといって家でダラダラと過ごすのはまずいと思ったから、とりあえず外に出ることにした。一人で歩くには少し物寂しい広さの歩道を抜け、初日に來たショッピングモールの中へとやってくる。何の目的もなくただ彷徨うように歩き、ウィンドウの中にある商品に目もくれずひらすらに僕は進んだ。

何も無い。僕は何も考えていない。自分の足で歩いているはずなのに、新幹線に乗った時に感じた海に浮かんでいるような感覚が今ここにある。いや、もっと酷いものだろう。人の激流に流されつつも、自分で泳ごうだなんてまったく考えもしない愚か者だろう。このままでは溺れて、死ぬ。しかし、僕は泳ぎ方を知らなかった。涙が出そうになるくらいその場では無力で、嗚咽を吐き出しそうにな

るほどその場では無知だった。普段水の中にいる魚だって、陸に上がれば跳ねることをするというのに、僕はその必死の抵抗すら出来なかった。

そうして幾らか時間が進んで、僕は迷っている事に気づいた。モールの大きな時計を見ると、既に午後三時を回っている。約二時間ほど無駄を食ったことになる。二度鳴ったはずの一時間ちよつどの音楽も聞こえなかった。僕はどこかに沈んでいるようだ。

「あれ、リョータ君やないか」

聞き覚えのある細い声がして、そちらのほうを向いた。そこには、学校の制服を着た真陽留さんの姿があった。

「真陽留さん……？ どうしてここに」

「それはこつちのセリフや。お姉さん探しとるんやないの？」

「一応は。今だってその一環でここに来ているんだよ」

「ここに？ こんなところにお姉さんおるんかいな」

「それは……分からない」

真陽留さんはこつちに來て、片方の頬を吊り上げて心底訳が分からなそうに言った。

「アホなん？ 手がかり無しで探しとるんリョータ君。そりゃ探偵失格やで」

「僕は探偵じゃないよ」

「そんなこと分かっとなるわ。何や、手がかりがあつて大阪來たと思つとったけど、兄貴に連れられてきただけかいな」

「そうだよ、その通りだよ。思うと、僕は何も言えなくなつた。そうして苛立たれたつて仕方が無い。責められても仕方が無い。でも、腹が立つた。だって、阿形くんは僕に何も言ってくれない。僕をここに連れてきた理由だって、彼自身が一体今何をしているのかだつて。それじゃあ、僕にだってどうしようもなかった。

「まあええわ。ここで会つたのも何かの縁やからあたしも手伝つたるか」

「いやそれは……」

「警察には連絡しおった？」

僕を無視して話を進められる。腕を掴まれて、ぐいと引つ張られた。

「ちょ、ちょっと待ってよ。警察には連絡しないでくれ。それだけはダメなんだ」

「なんでや？」

言ってやっと足を止めてくれた。

「えっと……兎に角ダメなんだ。警察は好かない」

「そんなこと言つとる場合やないやろ。ええんか？ お姉さん見つからんでも」

「いいわけないだろう。でも警察はダメなんだ」

「だからなんでや」

「ダメだからだ」

「話にならん」

僕の腕を放つて、真陽留さんは大きくため息をついた。警察がダメな理由は僕にだって分からない。ただ、頭の中の危険信号が激しく鐘を鳴らしている。ほとんど直感と言ってしまったてもいいくらいに信用の無い理由だった。そんなことを言ってもどうせ何も変わらないし、この感覚を言葉にするのはあまりに難しかった。

「ごめん」

「謝られても困るわ。本当にええの？ このままやったら何にもならずに戻ることになるで？」

「そんなことは分かってる。でも、だからってどうしたらいいんだ……僕だって手がかりさえあれば何かしたい。でも真陽留さんの言う通り、僕は阿形くんに連れられてきただけで何も知らないんだ。何も、出来ないんだよ」

「だから警察に……」

「それは無理だって言ってるだろう！？」

あまりにしつこかったので、つい声を荒げてしまう。ハッと気付いた時には遅く、真陽留さんは僕の態度に驚いたのか一瞬身体を震

わせて、小さく僕に謝った。

自分でも腹が立つ。どうして警察がダメなんだ。自問自答したって返ってこない答えを求めて何度も腹の中に問いかけるが、意味のあるわけがなかった。警察を頼れば姉ちゃんなんて一ヶ月もしないうちに見つかるかもしれない。それが僕にとつて最大の幸福なはずなのに、僕はそれよりも大きい何かのせいで警察に怯えている。出来ることならば、喉の奥に手を突っ込んで引っ張り出してやりたいくらいにもどかしい。

「お、お昼はもう取ったん？」

真陽留さんが無理矢理話題を変えようと、そう提案してきた。

「い、いやまだだけど……」

「ならそのファミレスでちょっと食べていかん？ あたしお腹空いてんねん」

必死に陽気を装おうとしているが、ヒビだらけの笑顔の仮面は見えていて辛かった。僕なんかに気を遣う必要なんてないのに、彼女は醜い仮面を身につけて僕を助けようとしている。意味が無い。その行動には全く意味が無いんだ。

「僕は……」

「ええやん。変なこと聞いてしもつた代わりに今日は驕ったから行こうや」

「うん……分かった」

そんなもの受け取れないというのに、どうしようもなく僕は流されていく。

月曜日に深夜さんで行ったファミレスとは違って、どこか大人びた雰囲気のある店に僕らは入った。アンティーク系の丸テーブルと椅子が席になっており、カウンター席もある。天井を見ると、淡め

の光を発している電球が網目に縫われた木製のカバーがかけられている。人気のありそうな店だなと思ったのも当然、客入りは普通のファミレスよりも幾分か多いように見えるし、客層も子ども連れやサラリーマンというよりは若い男女が来ている様だ。それはそれで場違いに思えて、少しだけ肩身が狭く感じた。

「なんだか、ファミレスって感じじゃないねここ」

窓際の席に案内されたあと、僕はそう真陽留さんに呟いた。

「洒落たコーヒーパーみたいな感じやね。実はあたしも入るのは初めてやわ」

「空腹を満たせるようなもの、あるのかな」

「サンドイッチくらいならあるやろ。お腹が減ったって言うても、別にしっかり取らんでもええし」

「それもそうだね」

結局、僕は安めのブレンドコーヒーを、真陽留さんはその通りサンドイッチとジュースを頼んだ。

それにしてもなんだか落ち着けない場所だった。街の雑踏は隔たれ、緩やかな曲調を奏でるギターの音が店内には流れている。軽い食事に来たはずなのに、どうにも気持ちの置き場所に困った。

「何や、カップル多いなあ」

気になっていたことをあえて口に出さなかったのに、僕の心を読んだように真陽留さんがそう言った。

「う、うん。人気のありそうな店だしね」

「ええなあ。あたしもあんな風に彼氏と過ごしてみたいわ」

「付き合っている人いないの？」

訊いて良いものか悩んだが、会話を続かせるためにあえて選んで訊いてみた。

「おらんおらん。あたしって結構ケバイやん？ 実はあんまりウケてへんねん」

「い、いや、そこまでじゃないと思うけれど。むしろ、僕は普通では君みたいな人が人気があるものだって思ってたけど」

嘘じゃない。実際に真陽留さんは大和撫子という言葉とはほど遠い格好をしているが、決して普通から逸脱したような格好はしていない。普通の女の子が化粧をしてお洒落とやらをするように、僕にはそれと全く違うように見える。茶髪でイヤリングやブレスレットなど、装飾品がジャラジャラと音を立てている点、僕はそう好きではなかったが、世間ではそれが受けているものだと思っていた。「まあ人付き合いはええよ。それが男女関係で人気がある、とは限らんけど」

「そうなんだ、意外だ」

「それを言うならリョータ君こそどうなん？ そんなルックスとしてモテなかったなんて言わんよね？」

興味津々な視線を向け、少し口元をいやらしく歪めてそう真陽留さんが言った。

「阿形くん……真陽留さんのお兄さんにも言われたけど、ありえない。君たちが言うように僕の外見が良かったとしても、実際に僕は一度も告白なんかされたことはないし、したこともないよ」

「ふうん……」

値踏みするような目。それから逃げるように、視線を逸らした。

誰がなんと言おうと、『ありえない』のだから仕方が無い。

「まあ実はそうやと思ったけれどな」

「どうして？」

「DTの臭いがする」

「DT？」

言葉の意味が分からず、僕は聞き返した。

「え、知らんの意味？ ああ、ならええわ。冗談、冗談やから」

なんのことか分からないが、凄く楽しそうに笑われた。不快な気分にはならなかったが、話題に置いていかれた気がして気持ちよくは無かった。

「ほんまはあれや、どこか壁を感じるからやリョータ君からは。あたしと同学年なのになんかかしこまったような口調やし、兄貴のこ

とだって君付けやし。今どき男友達を君付けしてる男子なんて見たことないわ」

「いやそれは癖で……」

「癖でも何でも、なんだか「ああ、この人とはこれ以上仲良くなれへんのかなあ」って気にならされる。気をつけたほうがええで」

気をつけようにも、これが僕なのだから仕方が無い。気にならなかったと言えば嘘にはなる。そもそも同年代どころか小学生にだって『僕』と一人称を固定している人物は少ない。それに気付くのは中学卒業間際辺りの出来事だが、かと言って高校デビューと称して自称を『俺』にする気なんて微塵も起きなかった。恐らくは親の影響だろうと思う。スパルタを受けていた僕は、兎角礼儀正しいことを求められた。それは親だけではなく世間の目に対してもだ。クラスメイトは稀に僕にフランクさを求めたが、その度に僕は断ってきた。僕自身、そういう中に入ることを望んだわけでもないし、それで何かが変わってしまうわけでもなかっただろう。

「実際、女の子に興味ないやろリョータ君」

「うん」

「うわ、即答しよった」

また笑われた。何が楽しいのか分からないけれど、真陽留さんがそれでいいならそれでいい気がした。

「好きな人おらんの？」

「いないよそんなの。おこがましい」

「おこがましい？」

意味が分からなかったのか、真陽留さんが首を傾げた。

「い、いやなんでもないよ。そういう真陽留さんこそどうなのさ。年頃なんだから、一人や二人くらいいるだろう」

隠すようになってしまっただろうか。取り繕うように慌てて話題を真陽留さんのほうに放った。

「二人って何やねん。あたしはそんな軽い女の子やないで」

「あ、いや他意はないよ。言葉の綾」

「ふうん。まあええけど」

彼女の表情は終始にこにこしている。僕が彼女のイメージから相手を中傷するような発言をしたというのに、それをまるで冗談だったかのように受け流す姿勢。恐らく本気で気にしてはいないのだろう。やっぱり眩しい。最初見た時、真陽留さんからは作り物のような印象を受けた。けれど今なら分かる。彼女は実に自然体なのだと真陽留さんと話していると会話の途中でありがちな、喉の突っかかりのようなものを感じない。僕が如何なることを言っても彼女は取り込んでしまうからだ。深追いもしてこない。深夜さんみたいに冷たく切り込んできたりもしない。初めて会った時間が夜だったせいなのだろうか。僕が彼女は温かいことに気付けなかったのは。

「最近な……付き合う人は、別に好きな人やなくてもええんやないかと思う」

トーンの一つ下がった声で、真陽留さんはそう言った。心持、綻んでいた表情も幾分沈んだように思う。

「それは？」

「なんかな、誰かと早くつながりたいねんあたし。あ、変な意味やないで。誰かと色んなものを分かち合える、みたいな良い信頼関係みたいな意味で」

「夫婦みたいなの？」

「そうやね。あと、この人やつたらあたしを助けてくれるとか、逆にあたしに対して助けを求めてくれるような人。そういう、感覚的に言ったら元は一つやったあたしと誰か、その誰かと早く繋がって安心感みたいなのを得たいんや。やから、そこに好きとか愛してるとかそういう感情は関係あらへん。まあ、嫌いな奴とは繋がりたくないけどな」

まるでどこかへ飛んでしまった部品を探す未完成のロボット。感情はなく、ただ必要だから求めるだけの相互関係。そんなものを僕は想像した。ギコギコと音を立ててパーツを探すロボット。道端で気になるものを見つけても、どれだけ心らしきものを奪われても、

それはロボットの完成には全く必要のないものだからと切り捨てる。そんな感覚がした。

「やけれど、あたしも女の子やかからかつこええ人には惹かれるし、話してて楽しい人とはもつと一緒にいたいと思う。それとな……どうしようもなくかつこつけとるアホが心配やから、そいつと繋がってやりたい、みたいな気持ちもある」

最後の一つにだけ色が混じっていた。真陽留さんを悩ませているのはこれだろうか。はあ、と大きなため息が漏れる。初めて彼女の落ち込む様子を見た気がする。そして僕は、そんな様子の彼女にかける言葉がない。曇りこんだ空気に気圧されたのかもしれない。なににせよ、僕の頭は咄嗟に元気付けられるような言葉を練りだしてはくれなかった。

「昔……よお手え繋いどった男の子がおったんや。小学生の頃やったからそれも普通やったけど、いつからやったか、何かを境にして男の子が手を繋ぐことを拒否するようになったんや」

「それは……思春期だからじゃないかな。恥ずかしいだろう女の子と手を繋ぐなんて」

「それもあつたやろうけど、なんかちゃうねん。恥ずかしいんやなくて、何か悪いことをしおって必死に謝ってるみたいや、そんな風やった。そして、なのに男の子は急に人に暴力を振るうようになった」

なんとなく繋がりに欠ける二つのものに、僕は頭を捻った。

「君と手を繋がなくなつたから、人に暴力を振るつた？」

「そうや。やって、あたしが手を繋いでおけば、『拳』なんて大層なもん作れんやろ」

真陽留さんは拳を作って、僕に見せ付けた。小さい、本当に小さい拳だった。それではきつと誰も傷つけられないだろうし、何も打ち破れないだろう。阿形くんのそれを思い出して、僕はそう思った。「流石に暴論だろう。君のいないところで人を殴っていたかもしれない」

「そういうことやない。あたしが繋がってれば、止められたかもしれん。そういう話や。頭のいいリョータ君なら分かるやろ」

発言が安直過ぎたと少し反省しつつ、僕は頷く。

「大体人っていう生き物は、なんで殴るってことを覚えてしまったんやろうな。ほかの生き物みたいに相手を倒して食べてしまうような、そういう弱肉強食の世界に生きているわけでもないのに」

その反面、食べるために『拳』は使わない。人は武器を持って相手を制し、火を持って食料を確保する生き物だ。僕らが握った拳をものに向ける意味はほとんどない。こつそりと机の下で拳を握ってみた僕だったが、真陽留さんの小さなそのものと何も変わらないことに気付いて、自分が酷く矮小なものに思えた。

「力……じゃないかな」

僕には無いものを挙げた。この拳からは力が見えない。力が無い拳に、何の意味があるのか分からない。僕のこの手が、この形を取ることに何の意味があるのだろうか。

「強さを示したいから、きつと人は拳を作るんだよ」

それに中てられたから、僕は阿形くんの強さを尊敬している。

「動物は……どうしても生存本能がために異性を求めなきゃならない。けれどもそれが簡単に叶うように世界が出来ていないんだ。すると、特にオスに分類されるほうは異性を手に入れるために自分をアピールすることが必要になる。虫だってそうだ。強いほうが好みのメスを手に入れることが出来る」

「そういう理由で拳を振るってたていうんか？」

「や、これは本能的な話さ。まあそう、もしかしたら君に好かれたいがためにやったことなのかもしれないけれど」

「はっ、そんなのありえへんな」

真陽留さんはそれを鼻で笑った。僕だって自分の発言をそうして笑いたい。けれども、なんとなく真陽留さんの言う『男の子』の存在が想像できてしまう僕は、そう一蹴することが出来ない。

「なありリョータ君。人を好きになるって、どういうことやろうな」

それは年頃の乙女らしい問いではなかった。ぶつけられた質疑の重みはパンパじゃない。言葉尻からは何か自嘲らしい微かな卑下を感じ取れる。女子学生が同年代に悩みを打ち明けるようなそれとは違う。悟りを開いた人間が、愚かなものを見下すようなものだ。

「分からない……僕は人を好きになつたことが無い」

「まさか。小学生の時でもええよ、クラスに気になる女の子とかいたやろ」

「いない。その頃、僕にとっては姉ちゃんが全てだったから」

そう淀みなくはつきりと答えた。

「そう……そうやな。じゃありョータ君は、姉ちゃんのこと好きか？」

好きなのか？

胃液が喉を駆け上がってきそうになるのを堪えた。自分に出来る最大の量の唾を喉に無理矢理流し込む。舌の奥のほうに苦味としよっぱさの混じった不快な味が広がる。

「君は馬鹿なのか？　なら真陽留さんは自分が信仰するイエスキリストに対して恋愛感情を抱くっていうのか？」

「何やそれ。話が全然ちゃうやん」

「僕にとっては同じことだ。自分を救ってくれた人間に対して、そんな感情を抱くのはあまりにおこがましい。ありえない。ありえないんだよ真陽留さん」

自然と饒舌になってしまう自分を止められない。舌の奥の味は自己嫌悪のものか。

「リョータ君な、気持ちは良く分かる。あたしもその男の子には助けられてばかりで、いつしか好きになっていたというよりも、もっと大きなものになってしまったような気がしたんや。その子の背中が凄く大きなものに見えた。もしかしたらその信頼関係は、リョータ君の言うようなイエスキリストに対する信仰みたいなものかもしれないへん」

しかし、対面する真陽留さんも同じく止まらなかった。僕はその

言葉に一つ一つ押されて崖っぷちまで追いやられていくような切迫感に呼吸を荒くしていた。

「そんな男の子があたしの目の前からいなくなった時、あたしは泣いた。もうこれ以上泣いたら死ぬんじゃないかってくらい泣いた。その時気付いたんや、あたしはその人のことが好きやったんやって」

ゆつくりと噛み締めるようにそう真陽留さんは語る。よくありがちな、失ってから気付くものだろう。僕はそれを聞きながら自分を顧みた。僕はそんなことはない。姉ちゃんが必要で仕方が無いことは、当然なのだから。

「追いかけてようかとも思った。けれど、無理やった」

「どうして……？」

「あたしにはその子が必要やったけど、その子にはあたしは必要無かった。人を殴るようになった姿を見て、あたしはそう思った」

「さつきと言ってることが違うじゃないか。君がいれば、彼は人を殴らずに済んだと思うたんだろう？」

「そう、あたしがいればきっとそうはならなかったんやと思う。でもそうなってしまったものはどうしようもないんや。もうあたしは彼を信頼出来へんし、大きかった背中は、壁みたいに覚えてしまった」

壁とはつまり拒絶。真陽留さんは、男の子の背中を見て拒絶を感じたのだろう。伸ばして掴みたかったその手は、大きな背中に阻まれて、拳に辿り着くことすら出来なかったのだろう。

「なありョータ君。姉ちゃんがいなくなった時、リョータ君もそういう思いをせんかったか？」

「僕は……」

廃人になったその時のことを良く覚えてはいない。けれど、姉ちゃんが好きだったなんて幻想も抱かないし、いなくなった姉ちゃんに対して拒絶を感じた覚えも無い。ただそう、僕から『姉ちゃん』という大きな要素がこっそり抜け落ちてしまつて、人としての機能を果たせなくなった。その隙間を一週間という時間で代用している

だけで、僕の中はまだ不完全なままだ。

「食べ物喉を通らなかったし、何もする気が起きなかった。でも僕は姉ちゃんに必要とされていないだとか、そういうことを思ったことは無い。そういう問題じゃないから、僕にとっての姉ちゃんも、姉ちゃんにとっての僕も」

「リョータ君の姉ちゃんは、人を殴ったりせんかった？」

「あ、当たり前だろう！ 姉ちゃんがそんなことするわけない」

「じゃあ、リョータ君が人を殴ったことは――？」

「あるわけ……ないだろう」

だって僕だぞ。このひ弱で何の力も持たない僕が、人を殴れるわけがない。阿形くんみたいに僕は強くない。世界の不条理だとか、力の及ばないものを捻じ伏せられるほど出来た人間じゃない。ただ、どうしてだろうか。零した墨汁がじわりじわりと白紙に染み込んで行く様な、ねつとりとした速度で罪悪感が僕の中に広がっている。その正体が分からなくて記憶の筆筈を開け閉めしたが、どこにも見当たらなかった。

「ならええ。リョータ君は姉ちゃんのこと信頼してるんやな」

「そりゃ、そうだろう。真陽留さんも分かったと思うけれど、僕は姉ちゃんが……」

「リョータ君」

僕の言葉を遮って、真陽留さんから飛び出したとは思えない鋭利な刃が銀色の光を除かせた。

「なら、なんで姉ちゃんを探しにいかへんねん」

「いや、僕は……」

「言い訳は聞かへんで。頭のいいリョータ君なら分かるはずやろ。姉ちゃんは大阪になんかおらへんって。アホなあたしでも分かる。東京に住んどる人が、失踪したからってなんで大阪に来るんや。確かにいないとは限らへんけど、四十七都道府県の中で、一番最初に大阪に来ることがどれだけ確率の低い話か分かつとるやろ」

「だって、阿形くんが……」

「千歩譲って兄貴が何かリョータ君に吹き込んだとしてもや、警察にも頼らん、手がかりもない。そんな中で、リョータ君は姉ちゃんが見つかるでも思っただんか」

反論は出来ない。かといって、ここに来たことを否定するつもりも無かった。ここには何かがある。だから阿形くんが連れてきてくれた。そう信じて僕は疑わない。

「少し、おかしい話するで。一応変に頭のええ姉持つとるから、ちよつと真面目な話も出来るんや」

「なんだよ……」

恋の話をしていたと思ったら、僕はどこかに巻き込まれてしまったようだ。どこか、深夜さんと話しているような気分になって、口調が荒くなる。

「キリスト教徒やから、その手の話題で例に出させてもらうけど、あたしたちキリスト教徒は神様の再臨を待ち望んでいる。といつてもそんな熱狂的信者やあらへんから、『そういう話になっている』くらいの認識しかあらへんけど」

神の逸話は僕も少しだけ知っていた。ゴルゴダの丘にて処刑されたイエスキリストは、横穴の中に遺体を埋められたが、死後三日後に蘇った。その後十一人となった弟子の元に訪れたイエスは彼等を祝福し、天に昇って行った。そして突如現れた人物によって、イエスの再臨は伝えられることになる。イエスキリストの逸話の中では、ラストに飾られる話だ。

「リョータ君の、姉ちゃんに対する気持ちは、それによく似ている気がするんや。そりゃ、神様やつたら探さへん。もう一度自分の前に現れるまで、じつと信仰して待つとるやろ」

「流石に……それは酷いんじゃないかな」

僕の姉ちゃんに対する感情を、信仰なんてもので片付けられても困る。一度深呼吸をして、怒鳴りそうになるほど沸騰し始めた胸の中を冷やす。空気が足りない。燃え盛るような場所に酸素を送るためのものじゃない。燃え盛るような場所から逃げ出すための場所が

足りない。奥歯を砕くほど噛み締める。跳ねそうになった腕を抑える為に、拳を握る。

「何で怒るんやリョータ君。リョータ君の怒りはあたしにはいまいち理解出来へん」

「それこそどうしてだよ。今君自身が言っただんじやないか。僕の姉ちゃんに対する気持ちは、君たちがいうイエスキリスト信仰に似ていると。なら君は自分の信仰する神が愚弄されても怒らないっていうのか？」

「あたしがいつリョータ君の姉ちゃんを愚弄したんや。確かに、自分の大切な人を『神様』みたいに扱われることが腹が立つのは分からんでもない。でもちゃうやろ、リョータ君は姉ちゃんに触れられること自体に怒ってるように見える」

「何を……」

「なあ、人を好きになるっていうのは別に恋愛感情の話だけやない人を大切に想う気持ちも好きってことだとあたしは思う。んで、もう一度聞くで。リョータ君は姉ちゃんが好きか？」

問いを吟味する。噛んで噛んで、無味無臭と思える真陽留さんの言葉から味を出そうとする。しかし感じない。僕の味覚が腐ったのかそもそも食べたものが腐っていたのか分からないが、僕には言葉の真意を理解することが出来ない。頭痛がしてきた。変なものを食べたせいなのか脳が食中毒を起こしているみたいだ。ああ気持ち悪い。なんで僕はこんなものを食べたのだろうか。好き嫌いはいけけないと父親に言われたけれど、それにしたって酷い。戻してしまふような物を食べて何の得があるんだ。

そうだ。こういう時はいつだって姉ちゃんが代わりに食べてくれた。見つかったら平手が飛んだだろうけれど、姉ちゃんはいつだって上手く僕を庇ってくれたんだ。姉ちゃんは本当に完璧だったんだ。僕に出来ないことは全部出来てしまふ。父親も母親も僕には敵しかつたけれど、姉ちゃんには優しかった。僕が見ることの出来なかった親の笑顔を、姉ちゃんは自身の力で勝ち取っていたんだ。そんな

人が僕に優しくしてくれていた。そのことを感謝せずに何に感謝しろっていうんだろうか。ああそうだ、やっぱりそうだ。この人はおかしいことを言っている。僕が姉ちゃんを好きだとか嫌いだとか、信頼しているだとか信仰しているだとか、そういう低俗なもので語れないことを知らない。無知で愚かな生き物だ。信用ならない。方や神を信仰していると言っているのに、僕のこの感情が理解出来ないなんて、それは表面だけの信仰だ。意味が無い。この人と話している意味が無い。無味無臭になんて構っているほど、僕は暇じゃない。

「もうやめよう」

「逃げるんかリョータ君。そうやっていつも……」

「やめよう。料理が来てないようだけど、僕は帰るよ。結構に寝不足で、辛いんだ」

「なあ、実はあたし兄貴から電話でリョータ君のことは何度か聞いたんや。だからあたしは『リョータ君に何があつたのか知っている』話してくれん？ あたしやって少しは心配なんやで」

「関係のない話だよ……」

なるべく真陽留さんの顔を見ないようにして席を立った。ポケットから財布をだして、コーヒーの代金をテーブルの上に置く。

「リョータ君……」

声も無視する。これ以上不快にさせないでくれ。我慢強い僕だつて、限界っていうものがあるんだ。ここに阿形くんがいたら、前に御奥さんを殴った時みたいに真陽留さんを殴ってくれるんだろうか。やはり羨ましい。阿形くんは僕に出来ないことが出来る。彼も姉ちゃんと同じように強い人だ。早く帰って気分を潤しに行こう。

握りこんだ指すらも潰してしまうくらいに拳を握り締めていたことに気付いて、僕はゆっくりと指を弛緩する。爪の刺さった手の平が、痛々しいくらいに赤く腫れていた。血も出ていないのに何故か僕は舌を這わせ、それが無味無臭じゃなかったことに安堵した。

曙光が窓から差し込む時間になるまで、僕は阿形くんの部屋の片隅で小さくなっていた。暖房のきいていない部屋は夕焼けの熱程度では肌寒さは消えない。自分の腕を抱いて眠るようにして俯いていた僕は、ひたすらに考えることを止めていた。

この世界には敵が多い。誰にとってもそうだ。人に個性というものがあある限り存在するそれと相容れない存在の問題。僕には勿論のこと、きつと真陽留さんにだっているだろうし、阿形くんにもだっている。深夜さんなんてこの家の中では最たる敵だろう。そして、僕にとつては真陽留さんは敵なのかもしれない。そんなことをずっと考えようとして、抑えることに必死だった。

「ようリョータ。しけたツラしやがってどうした。何か用事があって外出してたんじゃないのか」

ドアが開く音がしたと同時に、阿形くんの澁刺とした声が飛び込んてくる。なんだか久々に聞いた気がする声。最近朝は毎日のこと、夜も僕が眠りにつくまで帰ってこないことが多かった阿形くん。顔を上げてその姿を確認すると、懐かしさまで感じられた。

「久しぶりだね、阿形くん」

「久しぶりとは何だよ。毎日会ってただろうが。つかここ俺の部屋だし」

「や、なんだかそんな心地がしたんだ」

「良くわからないな」

阿形くんは持っていた袋を床に置いて、適当な場所に座った。
「それは？」

近くにあるスーパーの袋だろうか。それを指差して言った。

「ロープだ。それも、かなり頑丈な」

取り出して僕に見せた。ロープという言葉に差し支えない、どちらかと言えば運動会で使う綱引きの綱を連想させるくらい太さを

誇るものだった。阿形くんが引つ張ると、ギリツと藁が締まった。相当な固さのロープだと想像できた。

「町内会で綱引きでもするのかい？」

「はっ、馬鹿言っじゃねえよ。たえそんなもんがあつたとしても、なんで俺が買つてこなきゃならねえんだ」

「じゃあ……自殺でもするのかい？」

鬱屈になっていたせいか、自分でも驚くワードが飛び出した。

「聡明なりヨータ君にしちゃ、随分と極端なもんがでてきたじゃねえか」

「悪い。そんなつもりは……」

「いや、しかし自殺ね。悪くは無い、悪くは無いぜ。ただ、俺には死ぬ理由が無いし今死んで未練を残さない自信も無い。なら死ぬ意味が無い」

それはそうだ。阿形くんが自ら死を選ぶなんてことは考えられない。彼がロープで首を吊る姿なんて、どうやっても想像出来ない。たとえその強靱なロープが彼を拘束しようとも、それを抜け出し破壊するだけの力をきつと阿形くんは持っている。

「……」

が、今の僕はどうか少しおかしいらしい。

ロープと阿形くん、そして首吊りの光景から、大アルカナの『吊るされた男』を想像した。口には勿論出さない。大アルカナの『吊るされた男』には幾つかの意味がある。正位置で修行、忍耐など。逆位置で徒勞、欲望への敗北。だが、その中には「反逆者」というタイトルをつけられたものもある。深夜さんの話や真陽留さんの話を聞いてきて疑心が芽生えたせいなのか、変に勘ぐってしまう。よそつ、あまりにも邪推過ぎた。

「で、実際はそれは何に使うんだい？」

「そうだな、まあ念のためってやつで、実は使わないかもしれねえな」

「なんだいそれは。要領を得ないな」

かははっ、と阿形くんはいつものように笑い飛ばす。豪気な阿形くんだからこそ映える行為。こうして疑心を抱え込んだままそれを見ていると、これが敵に回ったときを想像して恐ろしくなる。猛勇な武將を目の前にして震え上がる雑兵。一喝されたら一溜まりも無いだろう。それが、僕の味方でよかったと今更ながらに思う。

「なありョータ。聡明なお前に聞くが、前に不幸がどうのこうのって話をしたのを覚えてるか」

「あ、ああ。アダムとイヴの頃からおきていることだから、だとか言ってたね。正直良く分からなかったけど」

「気にすんな。良い例えが思いつかなかったただけだ。でだ、話は変わるが、お前は不幸を起こした人物の不幸を考えたことがあるか」

「どういうこと？」

「前と同じ例えをするなら、交通事故。突然車に轢かれた奴は不幸極まりないが、突然来るまで轢いてしまった奴だって不幸だ。更に俺に言わせれば、それが計画性があったとしても不幸だ」

「計画性があったらただの犯罪だろう。なんでそれが不幸になるんだ」

「そこまでしなきゃならない状況が、不幸だろうが」

彼の言葉を聞いていて、手に持っているロープを見て、不吉な予感しかしない。何を考えているんだ阿形くんは。何故そんな、「今から起こることは不幸で、俺も不幸なんだ」という結論を急ぐような言動ばかりするんだ。土からほんの少し首を出した疑心の芽に水をあげるよう。人の汚い部分の心くらい、日光が無くたつて育つ。

「誰も助けちゃくれない。だが今のままでは過ごせない。そんな状況の究極の果てに、不幸が存在する。それは仕方の無いことだ。でもなりョータ、そいつは強者のみが選択出来るもんだと思わないか」

「どういうこと？」

「人を殺すことなんて、誰にでも出来るわけじゃねえんだよ」

ふざけてなんかいない。阿形くんは本気で喋っている。それが分かるだけに、僕はその言葉を見無視できなくて、その上で無視したく

て溜まらなかった。

「だが、幾ら不幸だとかいっても、それが許されることじゃないし、許せることでもない。それくらいは馬鹿な俺だって分かる。でもな、その不幸に加害者と被害者が存在したとして、どちらだってその不幸を恨みたいはずだ。そんな時、そいつらはどのどいつを呪えばきつちりと心の整理が出来ると思うか。被害者が加害者を呪ったところで、そいつはその時豚箱にいるだろう。加害者は被害者を呪うことなんておこがましすぎる。かといって、その感情を溜めておく事だって出来ない。そうして消去していけば、残るのはたった一つ、『神』だけだ」

拳を握り、阿形くんは天にそれを突き立てた。そうして神を呪うように、彼は拳を天に向けた。

「糞喰らえだ。神は人を救う存在なんかじゃねえ。人に試練を与えるだけ与えて、結局は何もしてくれねえ。祈りつてなんだよ、賛美つてなんだよ。俺たちはそれをする事で、何を貰えたんだよ」

まるで愚痴だ。独りで喋っているだけで、決して意見なんて求めていない。もしくは拳の向く場所にいる何かに問いかけているのか。「結局、人は強くならなきゃならねえんだ。たった一人でも生きていけるよう、俺たちは強くなる必要がある。そうは思わねえカリョータ」

僕は。

「僕には良く分からないよ……。僕は深夜さんの前で、真陽留さんの前でも神を信じると宣言した。それはきつと、僕一人じゃどうにもならないから、せめて神様だけでも味方につけようと思った僕の考えた。かといって、僕は阿形くんみたいな強さにだって憧憬を抱いている。君がいいいたいことは分かる。でも、僕はそうやって生きていける自信が無い」

「はっ、だろうな。そうだろうよ」

怒りの沸点を棒で突つくような言い草で、鼻で笑って一蹴した。何か阿形くんの癪に障ることを言ってしまったのかと、不安感の段

数を一つ重ねた。

「てめえみたいなクズには、そうやって他人に頼っている姿がお似合いだ」

「……」

「リョータ。今日の夜十一時半ごろに、ベランダから見える公園に来い。俺がここに来た目的と、お前を連れてきた意味を教えてやる」

雑兵に向けた果たし状。我こそが最強だと思い知らせるためにわざと組まれた出来レース。しかし、僕は行かなければならない。ここで行かなければ、僕がここにいる意味が無いからだ。出来る限りしっかりと頷き返し、それを確認した阿形くんは部屋を出て行った。

阿形くんにクズと言われたことは初めてじゃない。彼は基本的に正直な人間だから、相手に全く遠慮というものをしない。彼が僕をクズと言えば、恐らく彼にとって僕はクズなのだ。その上で所謂友達というものをしてきている。堪えないと言えば嘘になる。誰だっけ人に誹謗中傷されていい気になる奴はいないだろう。ただし、阿形くんの場合はそれを含めて強さと言えるだろう。人に嫌われることなんて微塵も気にしじゃない。自分が正しいと思ったことは貫き通すそのスタイルは、僕には到底無理な話だ。だから、僕はクズと呼ばれても仕方が無い。

でも僕は今、人生の中で一番を争う震えを感じている。身体の内からドライアイスの冷気が溢れ出すように、凍りつくほどの寒気を感じている。このままでは死んでしまう。視界がぶれる。世界が回転しようとし、僕に見せてはいけない裏側を見せようとしている。吸ったはずの空気は口から入って鼻へと抜ける。ガタの来たボディに鞭を打って無理矢理活動しようとするロボット。急速に錆びて、いつしか壊れて動けなくなるのは時間の問題。誰か助けてくれ。

そうして僕は姉ちゃんを夢想し、失敗し、夢想する。人の雨風に晒されて錆び付いた身体に差すオイル。作業は簡単かつ単純。いつものように、僕は姉ちゃんをなぞるだけ。

その時、視界に深夜さんが現れた。確かに彼女は姉ちゃんと似て

いる。口調も性格も外見も、何もかもが似ている。しかし姉ちゃんとは違う。彼女は姉ちゃんの外見を象ったマネキン。中身が無いから冷たいんだ。それを取り払うと、入れ替わるようにして今度は真陽留さんが出て来る。

「リョータ君は姉ちゃんが好きか？」

その口を閉じるんだ真陽留さん。君のような無味無臭の存在は濃い色ですぐに塗りつぶせる。どれだけ彼女が温かそうな存在であっても、微温湯のような世界に身を浸している彼女では誰も救えないし、誰の手も握ってやれない。君は僕には何も関係が無い。自分のいるべきところにいて、僕には関ってくるんじゃない。

姉ちゃんを描かなければならない。絵の具の色彩をきちんと選択し、現実に関りなく近い形で姉ちゃんを再現しなければならぬ。赤だったか、青だった、それとも黄色だったか。パレットの上で複雑に混ざり合った色の名前を僕は忘れてしまった。そもそもその色がどうやって出来ていたのかも忘れてしまった。

「ためえみたいなクズには、そうやって他人に頼ってる姿がお似合いだ」

すつ、と現実に取り戻される。

既に夕日は地平線の向こうへと沈み、窓からは街頭の冷たい光が無機質に部屋を照らしていた。酷く汗をかいている。千恵熱でも出たのだろうか、額の辺りがやけに熱い。まるで頭の中の電線がショートしてしまったような感覚だ。

脱力して壁に背を掛ける。虚ろに揺れる視界の中に虚空を収めて思う。

僕は故障してしまったんじゃないか、と。

ベランダから見えると言っていた公園は、先日深夜さんと来た公園だった。大きな噴水があり、そこで深夜さんと話をしたことを思い出す。昼の時の雰囲気とは打って変わって夜の帳が降りてきたそこは、奇妙なまでの静寂を醸し出している。さあ、さあ、と夜風が水をさらって水面で音を立てている。出来れば近づきたくなかった。

午後十一時半。僕は時間通りに公園に到着し、ブランコに座っていた。昼間はそこそこ見えた人の姿も、この時間となっては疎らも見えない。この深海に沈み込んだような空気が僕は嫌いではない。アミューズメントパークの夜の姿もこんな感じなのだろうか。水面の上では遊泳する人間や太陽の光で溢れているというのに、いざ潜ってみれば音も生物の存在の気配すらも感じない暗黒の世界。同じ場所、違う時間。違う場所、同じ時間に感じられるギャップ。それに合わせて僕ら人も順応する。僕の心臓はやけに静かに鼓動を刻み、空気に吸い込まれていくようだった。

「来たか、リョータ」

阿形くんの出迎えが来たようだ。夕方と何も変わらない格好で彼が闇の中からぬっと姿を現した。

「正直……僕はどうしてここに来たのかが分からない。今までずっと否定してきたけれど、阿形くんが僕をここに連れてきた意味は、もしかしたらないんじゃないかと疑い始めたのは事実だ。でも、阿形くんは今からそれを説明してくれるんだよね」

「ああ、そうだな。てめえには一から十まで耳の穴が腐るまで説明してやるよ。どうやらてめえは何ひとつ覚えてないらしいからな」

「覚えてない？ 僕が何か忘れたっていうのか」

「そうだ。だがどうせ言ったって意味がない。百聞は一見にしかず、つてわけじゃないが、まあついてきな」

阿形くんは僕に背を向けて歩き出した。ブランコから降りて、その背中を僕が追う。

連れて来られたのは備え付けの公衆便所。ここだけやけに冷機が立ち込め、肌寒さが増している気がした。白と青のコントラストが目には優しいが、嗅覚を付く不快な匂いがその場所を遠ざける。そして何より、ここに連れて来られたわけが一番理解不能で、歩幅を小さくした。

「見る」

阿形くんが指差したほうを見る。直後、僕はその光景に目を覆った。

「何が…… あったんだ」

かなり冷たいだろうタイルの床には、一糸纏わぬ姿の真陽留さんがあった。すぐに目を覆ってしまったからどうなっているかは分らなかったが、ここ数日間毎日のように顔を合わせてきた人物を見間違えるわけもない。

「服を…… 早く服を着せてあげないと」

「リョータ。その必要はねえよ」

「何だって？ 頭がおかしくなったのか君は」

「だって俺がやったんだ」

瞬間、言葉を失った。途端に阿形くんの姿が何か違うものに見えた。彼の表情はどこか自信に満ちていて、まるでこの目の前の状況に満足感を覚えているようで、無性に腹立たしかった。

僕は阿形くんを無視して、自分の着ていた上着を真陽留さんにかける。せめて素肌だけでも隠してやらなければならないと必死だった。華奢な身体をタイルから離してやろうと抱き上げると、微かに呼吸の音が伝わってきた。意識はないようだが、しっかりと生きている。身体は所々汗でべっとりと濡れており、頬には線のように涙の後が残っている。いくら鈍感と言われた僕であっても、ここで何が起こったのか想像に容易い。

「ロープは、このためのものだね」

「ご名答。まあ使わなかったがな。意外にもそんなに抵抗されなかったし」

「君は、自分が何をやったのか自覚がないのか？」

「そこまで馬鹿じゃねえよ」

「馬鹿じゃなくても、愚かだ。僕には到底理解出来ないことを君はした」

「なんだ、説教でもするのか。無駄だぜ。俺には罪悪感がないわけじゃないが、この行為に対して一切の後悔をしてないし、反省もしてない。むしろこうなるべきだったと思ってるくらいだ」

真陽留さんがボロボロにされて、阿形くんはやけに満足そうな顔をして、それがなるべき事象だったと言う。それも、僕は阿形くんの真陽留さんに対する感情を知っている。その結末が、これだっていうのか。目の前の光景を疑わずにはいられない。これは何かの夢で、もしくはいつものように幻想の世界に入ってしまったているのではないだろうかと思ってしまうほどだ。

いや、それが現実逃避だってことは分かっている。腕の中から感じる仄かな体温は確かに存在するものだ。手を回した背中から感じる柔らかさだって間違いのないものだ。しかしそれでも、阿形亮介という男の存在だけは認めがたいものだった。

「阿形くんは、さっき自分の来た目的と、僕が来た意味を教えてください。言って言ってたよね。それが、これなのか」

「遠からず」

「ふざけてるのか？ 僕は大阪に来て君が好いていた妹が君自身によつて犯された姿を見て、何らかの意味を感じろっていうのか？」

阿形くんは僕らのほうへと一歩だけ近づいて、腰を落とした。

「なありョータ。俺とお前が出会ったのって、いつ頃だったっけか」

「何を突然……」

「確か、入学式が終わったあと、俺がヘタレてたお前に声をかけたのが初めだったよな」

「そうだけど……」

四月。高校への入学を果たした僕だったが、勿論性格上人と積極的に会話することもなく数日間を過ごした。ものめずらしさからなのか何なのか知らないが、阿形くんが声をかけてきたのは突然だった。まだ会って数日しか経っていないというのに、クラスの端で本を読んでいるような僕に「ようリョータ君」と名前付けで呼んでくれたのだ。初めは鬱陶しかったが、喋ってみれば意外と面白い人ですぐに気に入った覚えがある。その頃から彼はクラスでガキ大将的な立ち位置にいて、そう多く話す機会も無かったが。

「リョータ……お前の言ってることは間違ってるぜ」

「何が、だよ」

「何が『そうだけど』だ。違う。俺とお前はもつと前から友達だった」

「君こそ何を言ってるんだ。そもそも阿形くんだって高校から東京に引っ越してきたんじゃないか。その前とかありえないだろう」

「ちげえよ。『俺は東京から大阪に引っ越したんだ』」

思わず阿形くんの顔を見た。嘘をついているようには見えないどころか、どこか悲しそうにも見える。阿形くんが東京から大阪に引っ越して、また東京に帰ってきたということなのだろうか。

「里子で深夜と真陽留が家族の中に入ってきたのが小学生高学年、まだその頃は東京にいた。が、直後に親が離婚。母親はそもそも不倫してたのかすぐに再婚。それが今のあのクソオヤジだ。仕事の都合でそのまま大阪に転勤。それが中二の頃。そしてそれまでの間、俺とお前はよくつるんでた友人だった」

まるで他所の国の御伽噺を聞かされているようだった。頭の中の情報と何も一致しない現実に、僕は頭を抱えた。小学校の頃も中学校の頃も記憶が薄い、流石に友達と呼べた存在を忘れるだろうか。しかし、いくら検索をかけても阿形亮介の名前は見当たらない。

「深夜、大阪弁で喋らないだろ。俺もだしな。そもそも東京生まれなんだ。真陽留は何か影響されたみたいだが」

確かに、大阪生まれだったらそれにしはやけに標準語が上手い

阿形くんに深夜さん。何ら疑問を感じなかった。

「しかし……本当に覚えてないのな」

「それは、悪かったよ。でも、それとこれとは関係が無いだろう。まさか僕に覚えて貰えてなかったからといって、見せしめに彼女を犯したっていうのか？」

「はっ、そんなわけねえだろうが。これは俺がやりたいからやった。好きな奴と肉体関係持ちたいなんて、当然の感情だろう？」

「さもそれが人間の性だろう？　とでも言うように語り掛ける。しかし、そうして阿形くんが自分の欲に素直だったということにより一層強く知るたびに、真陽留さんが不憫に思えてならない。いや、正確には二人とも不憫だ。」

「真陽留さんは……君のこと好いていたようだったよ」

「へえ、そりゃ嬉しいな」

「そう全く動かない表情で言う。」

「君が、こんな結末にさえしなれば、きちんと自分の気持ちを伝えさえ出来たならば、もつといい結果になったかもしれない」

「そうだな。でも、どうしようもないだろう？　もうやっちゃったもんはやっちゃったんだ」

「全く悪気などないように、今にもこの状況さえ笑い飛ばしてしまいたいそうに言う。仕方ないわけがない。なのに、僕は言い返せない。どれだけ善人ぶっても所詮は何もできない偽善者ということなのだろうか。だって、取り返しがつかないんだ。僕にだってどうしようもない。悔しさを感じて下唇を噛むことすらせず、僕は呆然と暴論を受け入れようとしていた。」

「リョータ、お前も真陽留を犯せ」

「はあ！？」

便所の小さな空間に声が反響し、耳鳴りを起こした。

「何を言ってるんだ君は！？　本当に気が狂ってしまったのか？」

「そうだとしたら今すぐに帰って寝てしまったほうがいい。今の阿形くんは見るに耐えない」

「今ならやりたい放題だぜ。気絶してるし、俺がやったあとだから愛撫の必要もない。真陽留も良いカラダしてんだろ。てめえだって男だから、それ見て反応しないはずがねえ」

反応なんてするわけないだろう。たかだが女の身体を見たくらいで、僕が変な気分になるとでも思っているのかこいつは。

「阿形くん……君は犯罪者だ。警察に通報させてもらう」

「ははっ、一体何の罪で俺は検挙されるんだ？」

「無論、強姦罪だ」

僕はケータイを持っていないから、今すぐは出来ない。早く真陽留さんを家に連れ帰って電話を借りよう。

最早今の阿形くんとは会話する意義が見出せない。彼は「首吊り男」なんかじゃない。ただの「愚者」だ。自らを極限の状況に立たせて更なる進化を遂げようとする意味を持つ吊るされた男。まさに僕にとつて強さの象徴だった阿形くんらしいじゃないか。でも違った。ただただ自由に進んで、信じるものだけ信じて、知らない間に崖の淵まで来てしまった。それだけの愚者だ。やっぱり君は「天才」だったよ。愚者は、天才なのだから。

「リョータ……お前の言うことはやっぱり間違ってる」

ため息が混じっていた。

「俺は、殺人罪で逮捕されんだよ」

言われてすぐに、真陽留さんの口元に手のひらを当てる。大丈夫、きちんとしたペースで呼吸は刻んでいるようだ。

「なあ、殺人罪ってどんなものだと思う？」

「どんなって……つまりは君が人を殺して、その罪を背負うそのものだ」

「そうだよなあ。じゃありョータ、俺は誰を殺したと思う？」

狂っている会話だと、自分がその当事者なのに思う。まるで人差し指を唇に当てて笑う乙女のように、一つ一つ焦らすように質問していく楽しいゲーム形式の会話。しかしその内容が乙女の表裏を表すほどの狂気性を孕み、聞いていて中毒症状を発しそうだった。

「知らないよそんなこと」

「知らない？ 馬鹿を言っなよリョータ。俺は言ってるだろ、お前をここに連れて来た意味を教えてやるって」

「それでも分からないものは分からないよ。何だ、君は僕に関係のある人物を殺したっていうのか」

「てめえの両親だよ、リョータ」

その言葉が脳に染み込んで行くまで、幾らかの時間を要した。まるで水を油を無理矢理混ぜ合わせようとするほどに、僕の頭はそれを拒んだ。

「意味が、分からない。僕の両親は長期で旅行に行っているんだ」

「俺も意味が分からない。一体いつからいないんだよそれ」

「それは……」

土に埋もれている財産を探すように記憶を掻き出し、必死に奥深くまで手をつ込もうとする。でも見つからない。彫りすぎて頭が痛くなってきた。どういうことだ。爪の間に挟まったゴミのような記憶が背中に不快感を走らせた。僕が欲しいのはそれじゃない、これじゃない。

「汗だくだぜ、リョータ」

「うるさい……」

けれども、探せど探せど、おもちゃ箱の中にはいつ使ったかも分からないものばかりが散乱して、今欲しいものはどこにも無かった。「無いんだろ、記憶が」

「……」

「おかしいとは思ってたんだ。高校が同じになって、同じクラスになったっていうのにお前は俺に気付かないどころか、俺の名前すら忘れている。でもそれはおかしいことじゃない、自分の両親を殺した野郎なんか係わり合いになりたくない、お前がそう思っているもおかしくはなかった。でもな……」

便所の冷えた空気が、一層厚く凍りついた気がした。

「てめえが頼んだんだろうが、俺に殺せってよ」

「嘘、だろう？」

「ふざけてんじゃねえよ。何が嘘か、てめえは人に殺しを頼んでおいて自分だけ勝手に忘れやがって。なのに人を天才だとか強者だとか言いやがって、何も覚えてないくせに実は覚えててからかってるクソ野郎じゃねえのかって期待させて、それでこの有様だ。殺人罪で逮捕されるのは、俺がお前かどっちなんだろうな？」

「ま、待ってくれよ！　じゃあそれこそこの有様は何だ。何故そこで真陽留さんが傷つけられることになるんだ！」

腕の中の体温はどんどん低くなっていく。そしてそれを抱いている僕がその原因なんじゃないかと一度思い始めると、その速度は急激に増していった。

「そんなもの、自己満足だ。俺がこうしてお前に真実を話せば、俺が殺人者だっていうことが露見するだろ。なら、せめて警察の厄介になる前にやりたいことをやっておこうと、そういう欲望だ。誰にだってあるだろ」

「それじゃあ真陽留さんはただの被害者じゃないか」

「違いよ。こいつは、不幸に出くわしたただけだ。俺にみたいな野郎に好かれた不幸にな」

「そんな……」

「少し前に不幸の話をしただろうが。俺は諦めたんだよ、真陽留がこうして傷つくことをな。でもな、これで真陽留にとって良いと思えることだってある」

「良いと思えることだって？」

この状況を見てまだ、「良い」だなんて言葉を吐ける阿形くんに湧き上がるような怒りを感じる。

「そうだ。真陽留は俺を恨めない。こいつは強姦じゃない。俺の自己満足によって起こされた、不幸でしかない。でもこうして真陽留はそこで気絶をして、自分に訪れるはずがなかったと思っていた不幸に出くわして、涙を流した。なら誰かを恨まなきゃならぬだろ。なあ、聡明なりョータ君なら俺の言いたいことがわかるよな？」

いつも僕に話しているように、ありのままの阿形くんがそこにいることがとんでもなく悲しかった。そして同時に、なんて愚かなんだろうと絶望した。

「君ってやつは……そんなところにまで、神様の話を持ち出すのか」
「そうだよリョータ。神だよ。世界に神なんていねえんだよ。だから不幸が起きたんだ。だから俺は強くなつて、誰にも負けることのないこの拳を手に入れて、どんな荒波だろうが叩き潰す。そういうことを真陽留には知ってもらいたかったんだが、こいつはいつまでたつてもガキみたいに神様神様っているかもわからねえ存在に縋って生きていやがる。でもどうだ、こうして事実として身に感じれば分かるだろ？ 誰だって一人で、どうにかして生きていける力をつけなきゃならないってさ」

だから阿形くんは強かった。彼が喧嘩で負けたことは見たことがないし、いつだって自由奔放に生きて、見ていて何でも打ち破ってくれるような心強さがあつた。でもそれは、こうして阿形くんの弱さから露見していく。

「そしてリョータ、それはお前にも言えることだ。元々姉ちゃん大好きっ子だったってのは知ってたが、高校からのお前はどうか。姉の話をするれば意味もわからずキレるし、真陽留や深夜に聞いたつてお前は過剰に姉に依存しているように見えるつて言われてる。それは真陽留で言う神様と同じだ。頼りになるわけもないひ弱な女なんかに頼つて、見ていて無残だった。そんなお前をここに連れてきて確認して、俺はお前を更生させることを思いついた。真陽留をついでにお前にも犯させるつて方法でな」

啞然としている僕を尻目に、阿形くんの口は興が乗ったようにとまらない。

「お前だつて不幸なんだ。俺に両親を殺させなきゃいけないような状況まで追い詰められて、それでやってしまう。可哀想なりョータ君だ。だから強くなれリョータ。俺みたいな、強い人間にしかできないことを、お前もやってのける」

腕の中で静かな息を立てている真陽留さんを見る。僕の上着で隠れた肌がどんな艶やかな光沢を持っているのか僕は知らない。知らないものに対して醜いだとか美しいだとか飾るような形容詞を並べることが出来ない。けれども、阿形くんの、つまりは悪魔の囁きに耳を傾けてはいけないことだけは分かる。僕には何かが欠けている。でも、倫理観だけは欠けていない。それは自分で認識できる。自分の一般的に持つている理性というものを感じ取れる限り、僕は普通であり続ける事が出来る。

僕は息を大きく吸った。喉に張り付くような冷気が肺の奥のほうへ流れ込み、咳き込みそうになる。でも、言わなきゃいけない。僕が彼と違ってまだ「普通」であるなら、僕が彼を正さなければならぬ。それは身分不相応なことかもしれない。僕ごときが阿形くんに見えていいのか、正直良く分からない。そして僕が正しいのか、彼が正しいのかの判断もつかない。

でも、言う。目の前の狂った光景をそのままにはしておけなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5344f/>

フィスト

2010年10月9日00時44分発行